

---

# ゼロの使い魔 -変態という名の神による二次創作-

Sonia

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔 - 変態という名の神による二次創作 -

### 【Nコード】

N4311T

### 【作者名】

Sonia

### 【あらすじ】

神様の湯のみ?!が頭部を直撃。そのまま帰らぬ人となってしまう主人公が神様からの謝罪と賠償により、数々のチートと思われる能力を貰い才人の代わりとしてゼロの使い魔の世界へ転生。原作をぶち壊しつつ、巨乳女神様達を手中に収めるべくひた走る!

『5/22:題名が作品にそぐわないので少し修正いたしました』

本作には原作小説やアニメ、他の小説やアニメなどから台詞や技などを引用(転載)している部分が発生する可能性がありますのでご注意ください

## プロローグ

「あれ、ここ何処だ？」

『目が覚めたかの』

そこにいるのは……長い顎鬚をたくわえた、頭髪は既に絶望的となっている爺さん。

一体誰だこのハゲ爺は？

『誰がハゲじゃ！』

「いや、どっからどう見てもハゲじゃん」

『ええい、黙らっしやい！』

「つか、ここ何処だよ、序にあんた誰？」

『ここはく狭間>と呼ばれる場所じゃ、んでわしや神様じゃよ』

「……爺さん、ボケたのならいい老人ホーム紹介しようか？」

『わしやボケとりやせんわ！ 全く、失礼な奴じゃのう』

いや、普通自分は神様です！ なんて言われたら、そりゃ正気を疑うだろう。

つか、むしろ精神的に病んでると思われて隔離病棟にぶち込まれるぞ。

しかも見た目普通の爺さんだからなあ……良くて夢遊病患者かボケ老人かっつとところで老人ホームにぶち込まれるだろ。

むしろぶち込まれて来いと言いたい。

『まあええわい、それよりもお主がここにいる理由じゃがな……お主、死んだぞ』

「……What？」

『だからお主は死んだのじゃ、死因は頭部打撲による頭蓋骨陥没じやな。ああ、ちなみにすでに火葬されておるからの。』

「…………マ、マジ?」

『もちマジじゃ』

…………ははは、あり得ない、あり得ねえだろ!

なんだよ、俺が死んだって!

だ、だって俺は今日は普通に過してて、さっきまでコンビニに行こうとして、それから…………。

…………やべ、思い出してしまった。

『どつやら思い出したようじゃの』

「そ、そういえば、道を歩いてた時、いきなり衝撃を受けた感じが…………」

『それが原因じゃ。ちなみにその衝撃じゃがの、わしが落とした湯のみが原因じゃ、テへ』

「…………ちよっと待てや、すると何か、俺は爺のせいで死んだって事か」

『まあ、そういう事じゃのう、すまんすまん(藁)』

「……………し、死にさせ、クソ爺!!!!!!」

『ちよ、まつ! ぎゃ————!!!!!!』

《主人公による折檻中……………大変のお見苦しい場面の為暫くお待ち

下さい》

「…………はあはあ」

『な、何も、パロスペシャルからのグランドコブラは無いじゃろ…………』

…しかもウエスタンリアートのおまけ付きとは……ガクッ」

「う、うるせえ！ 勝手に人の事殺しやがって！ まだ彼女も出来てなかったんだぞ、どうしてくれんだよ、ゴルア！」

『ま、待つんじゃない！ わしも悪かったと思っておるのじゃ、それ故お主をここへ喚よんだん出のじゃ！』

「……どういふ事だよ」

『つ、つまりじゃな……』

クソ爺からの話では、神様という存在は人間の間でも知られていくように複数存在する。

そしてそれぞれが違った役割を担っている。

本来クソ爺の管轄は、世界の安定。

世界によつては、そこに住む者達によつて崩壊する場合がある。

そういった場合に、クソ爺が表に出て崩壊を未然に防ぐらしい。

それが何の関係があるのかと聞くと、クソ爺の権限では人間の蘇生は出来ない。

更に俺の場合、既に肉体は消滅している。

こうなつて来ると手詰まり状態なのだが……神が人間に、というか、生物に対して直接的に手を下し殺す事は非常に不味い問題なんだそうだ。

そこでクソ爺は、昔から懇意にしている命の管理者に拝み倒して俺を別世界へ転生させてくれと頼み込んだのだが……断られた。

これは非常に不味い！

『原初の存在』に知れでもしたら、わし自身が消されてしまう！  
そう思い、なんとか策を考えたクソ爺は、俺を最近神の間で流行

っている所謂『二次創作』の主人公とする事にしたんだそうだ。

二次創作って……んな事してねえで仕事しろやっ！

と、全身全霊で突っ込み入れたいところだが、話しが進ま無いのでとりあえず置いておくとして、神の二次創作について詳しく聞くと神が創る二次創作の世界は、自然発生的に出来た世界と違い、所謂<箱庭>的な世界でありその中であれば神はどのような事でも可能となるんだそうだ。

言ってしまうえば、その世界は神の遊び場のような物だ。

だが、そうは言ってもその世界で生きている人間や動物は、間違はなく自分の自由意志を持って生きているんだそうだ。

しかしだ、自由意志を持っているとなるとそれは物語とは言えないのでは無いか？

勝手に行動し、筋書きを変えられては物語として成立しないだろうと俺が当然の疑問をぶつけたところ、神の創る二次創作や物語は人間が創るものと違い、その物語の中の登場人物が生きた人生そのものが物語りとなるんだそうだ。

つまりは、神様は箱庭だけを創り後は中の人に任せ、物語を完成させて貰いそれを読むと……そういう訳らしいのだ。

なんとも適当だなあ……。

「何だかよくわからんが、つまりはあれか、俺がその世界で生きた人生が本になるようなものか……ある意味自叙伝みたいなものだな。」

「案外飲み込みが早い、まあそういう訳じゃ。人間を見ているのは面白いからのう、特に苦難の人生などはまた格別じゃ。」

「神様つてのも案外暇なんだな、しかも趣味悪いし」  
『まあ、人間のお主の感覚じゃとそうじゃろうな』

しっかし、新しい人生ねえ。

はあ、せつかく就職も決まって漸く親孝行出来ると思ってた矢先にこれかよ。

割に合わねえよなあ。

これじゃ完璧に親不孝者じゃねえか……。

『勿論ただで転生などさせんよ、お主が欲しい能力をくれてやるう』  
「……マジ？」

『もち、マジじゃ。せつかく転生させるのに簡単に死なれては物語としてつまらんからの。』

「自分が楽しむためかよ、やっぱクソ爺は最低だな、駄神で十分だろお前なんてよ」

『……そこまで言わんでもええじゃろ』

「あゝはいはい、んで、どんな願いでもいいんだな？」

『神様にしてくれというのと、生命を創る、死んだ生物を生き返らせるというのは無しじゃ』

「まあ、そうだろうな。つかよ、二次創作だつてんなら題材があんだろ？」

『うむ！ よくぞ聞いてくれた、今回の題材はくゼロの使い魔ぐじや！ ルイズたん、タバサたん、はあはあ……』

「きもい……」

『そ、そんな汚物を見るような眼で見んでくれ……結構傷つくぞい……』

こいつ、もう駄神じゃなくてただのド変態で決定だな。

しかし、ゼロの使い魔か、割と好きな作品ではあるんだよな。

ルイズも性格はあんだけど、実際問題あれも苛めやらの被害者みたいなものだからなあ。

魔法が使えるようになって自信が付けば、恐らく性格変わるんじゃないかなと思う。

それにだ、あの世界には俺の大好きな巨乳キャラが結構いるからな。

テファにカトレアさんにキュルケ……うほ、たまんねえ！

しかし問題としては、転生だとすると新しくその世界で人生を歩む事になるんだよな？

となると、どこの国のどついった家に転生するのかが問題だな。

「おい、変態、質問に答える」

『……わし、泣いていいかの』

「んな事はどうでもいいんだよ、実際に転生するとして俺はどこに産まれるんだ？」

『いや、転生といつてもお主は新しく産まれるのではないぞ』

「どついう事だ？」

『ほれ、あの作品に<平賀才人>がいるじゃろ、あれの代わりに召喚されるのじゃよ。要は才人に転生すると思えばよい。』

「なるほどな、それなら主役としての立場になりやすい。つか、その場合才人はどうなんだよ？」

『存在せぬよ』

「い、いいのかよ、そんな事して。ゼロ魔の世界ぶつ壊れるぞ？」

『構わぬのじゃよ、むしろ神が創った世界じゃからな。別に原作通りに生きる必要性は無いのじゃ。』

「つまりあれか、よくある<原作崩壊>もOKという訳か？」



『そういう事じゃ、ちなみに新しい肉体はこちらで用意するぞい。才人の肉体そのままでは、選ぶ能力によっては耐えられんじやろうからの。』

「ま、そりゃそうだな」

肉体的にもある意味では元からそこそこの能力を秘めていると考えてもよさそうだな。

更に才人に転生するとなると、ガンダールヴの能力は初めから付いていると仮定して他に必要な能力としては……

- ・ゼロの使い魔に存在する魔法／魔法技術／知識の全て
- ・始祖の使い魔のルーンを全て
- ・杖を必要とせずに魔法を使えるようにする
- ・あらゆる世界の医療技術と医療器具の全て
- ・黄金律
- ・肉体についてはネギま！のラカンと同等の鋼の肉体
- ・剣術／格闘術／馬術の技能
- ・使い魔を一匹

「こんな感じだ」

『ず、随分多いの……』

「全部理由があんだよ」

『ほう、それは？』

魔法関連については、ルイズに俺という存在を認めさせる為だ。相手が高位のメイジであり、とんでもない実力者と知ればルイズもそう邪険に扱う事は無いだろう。

使い魔のルーンについて、これは後々敵対するであろう存在への対処。

同じ能力を持っていれば、ある程度手の内を知る事が出来る。

そうなれば、かなりのアドバンテージになるはずだ。

尤も相手側だって馬鹿じゃないだろうし、何より経験じゃ相手の方が上だから木を抜く訳にはいかんだろうけど。

杖を使わずにというのは、一々杖を持って戦うのが面倒というものもあるが、それだけでも能力が高い事の証明になるだろうという目論見がある。

例えば杖を使わずに〈念力〉を使ってみたり、〈錬金〉を試してみたりすれば、恐らくかなりの反響だろう。

そしてそれだけのメイジを召喚したルイズは、実は凄いのではと周りに認識させるきっかけにもなるかもしれない。

まあ、異端と言われるかもしれないがそこは話の持つて行き方次第だろう。

医療技術と器具に関しては、当然の如くカトレアさんの治療の為だ。

カトレアさんを治療出来たとなれば、ヴァリエール家の覚えも良くなるだろう。

それにだ、タバサの母親の件もある。

あの世界で生き抜くには医療技術は確実に必要だ。

黄金律に関しては、単純に生活上困らない為というものもあるが、これまたルイズへ俺を認めさせるといふ意味合いも含まれる。

メイジとしても優秀で、かつ、金を稼ぐ事も出来るとなればよほどのバカで無い限り見限る事はしないだろう。

あれも結構金には困っているかもしれないからな。  
よく教室とか破壊してるようだし、修繕費とかもバカになら  
ないだろう。

肉体については、あんな世界である以上どんな争い事に巻き込ま  
れるかわからない。

故に出来る限り強靱な肉体が欲しい。

でなければ戦闘経験なんて無い俺がのほほんと生きていく事は出  
来ないだろうからな。

それと、マツチヨは勘弁な。

剣術などの技能についてはガンダールヴとしての能力を活かす為  
だ。

幾らガンダールヴとはいえ、本当の達人が相手になった場合、技  
能が無ければやられてしまう可能性が大いにある。

加えて、あの世界の主要交通機関は馬である事を考えれば必然的  
に馬術は必要だろう。

じゃないと、ケツが痛くなってしょうがないだろうし。

最後の使い魔に関しては、単純に便利であろうという目論見と、  
有事の際に味方が多い方がいいと思う為だ。

まあ、俺的にはルイズは救済してやりたいと思う。

恋人に欲しい訳じゃないけど、なんつーのか、やっぱり苛められて  
のを見るのは流石に忍びない。

それに、環境が変われば考え方も変わるだろうし。

「まあ、こんな理由さ」

『ふむ、確かに理に適つとるな、よいじゃろう全て叶えよう。それと医療器具に関しては、収納する為の手持ちのカバンでも用意するか。あれじゃ、王の財宝ゲート・オブ・パヒロンと似たような感じじゃな』

「Fateまで知ってるのかよ、どこまで暇なんだこの変態は……」  
『いいじゃる別に……そういえば、使い魔はどうするんじゃ?』

使い魔か……順当に行けばドラゴンとかだけどあの世界じゃそう珍しくは無いよなあ。

となれば、あの世界にいない存在で、かつ、強力な奴を……

「決めた！ 使い魔は……」『白虎』だ！

『白虎か……神獣じゃのう』

「駄目か?」

『いんや、構わんぞ』

「それと、白虎の能力だが人語を話せる事と空間を飛び越える能力が欲しい」

『まあいいじゃろう、わかったぞい』

こんなものかな。

まあ、正直なところこれでも不安が無いと言えば嘘になる。

何せ元が物語りとはいえ、そこは現実な訳だから、事故だって起こるだろうしそもそも物語り通りに進むとは限らない。

となれば、なんらかのイレギュラーが発生する可能性は十分にあり得るから、用心するに越した事は無いだろう。

「ああ、それと使い魔のルーンだけど、通常は見えないようにしてくれ。複数のルーンがあるとわかれば面倒な事になるからな」

『確かにの、いいじゃろう承知した』

「あ、そうだ、一つ忘れてた」

『ほ、まだあるのかの？』

「これは完全に我俣なんだが……出来れば俺の両親に金を渡してくれ」

『どづいう事じゃ？』

「いやよ、これから親孝行するって時に死んじまって、全く親孝行出来てないからさ。せめてそれくらいはなと思つてよ。」

『……ほっほっほっ。なかなかいい心がけじゃのう、いいじゃろ、お主の両親にはそれ相応の金が入るように運命を調整しておこう。何、残りの人生を悠々自適に暮らせるほどあればよかるう？』

「ああ、それで頼む」

まあ、こんくらいはしておいても罰は当たらないだろう。

原因はこの変態にあるとはいえ、先立つ不幸を起こしてしまった以上、それなりに償いはしておかないとな。

「願いはこんなもんだな」

『それでは肉体の作製と転生の準備に掛かるぞい。その間は意識が無いが、召喚された時に目覚めるじゃろう。』

「わかった」

さてはて、どうなるんだろうなあ一体。

これからの人生、物凄く不安でいっぱいだぜ……。

この世には神も仏も無いんだろうなあ。

ま、せっかく物語の中に生きられるんだ、精一杯面白く生きるとしよっ。

## 第一話

ここはトリステイン魔法学院。

数多くの貴族の子弟が揃い、勉学に励む学び舎。

今日は進級を掛けた使い魔召喚の日。

この使い魔召喚により、この世界の新たな物語は始まる……。

「さあ、最後はミス・ヴァリエールの番ですぞ」

「はい！」

「おいゼロのルイズ、どうせ失敗するんだから時間の無駄だぞ！」

「爆発して使い魔殺すんじゃないか？」

数多くの罵声と嘲笑が飛び交う中、ルイズは己が身の内に精神を集中させ自らの使い魔を喚び出す為の呪文をつむぎ出す。

既に何度も失敗しているが、これだけは失敗する訳にはいかない  
と気合を入れて臨む。

「我が名は『ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール』。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし、さだめ使い魔を召還せよ！」

呪文が完了した瞬間、大きな爆発音が響く。

周りでは『またか』『無駄無駄』など、これまた数多くの罵声が響き渡る。

教師であるコルベールも、流石に召喚の呪文まで爆発するとは思っておらず頭を抱えてしまった。

それでもめげる事無く呪文を繰り返すルイズ。

だが、無常にも呪文をどれだけ正確に読み上げても失敗ばかり。あまりの失敗の多さの為、流石に監督役であるコルベールも時間の関係上、次で最後であると言い渡した。

『お願い、もうなんでもいい、お願いだから答えて！』

そう願いながら、ありつたけの想いを込めて呪文をつむぎ出すルイズ。

そして一際大きな爆発が起きた後、そこに現れたのは……。

「あ、あいたたたた……」

そう、召喚魔法によりそこに現れたのは、間違いなく人間だったのだ！

これはハルケギニアでも前代未聞の出来事。

神聖な召喚の儀式において人間を召喚したなどという事は、誰も耳にした事が無い。

一体これはどういう事なのか。

「おい、ゼロのルイズが人間を召喚したぞ！」

「初めっから用意してたんじゃないの？」

等々、召喚された存在が自分達のような幻獣では無いと知るや否や、即座に罵声を上げる者達。

そんな中、ルイズは自分が人間を召喚してしまった事に酷く落胆していた。

「コルベール先生！ やり直しさせて下さい！」

「それはいけませんぞミス・ヴァリエール」

「何故ですか?!」

「サモン・サーヴァントは非常に神聖な儀式、やり直しは効きませ  
ん」

「う……でも!」

「それが何であれ喚び出された以上は貴女にとって重要な存在なの  
です。いいですね、彼と契約するのです。そうでなければ残念なが  
ら貴女は進級出来なくなりますぞ。」

「うう……」

本来であれば、ここでルイズが喚び出した存在について、色々と  
事情を聞くべきなのだが今のルイズにはそんな余裕が無い。

進級が出来ない、そうなれば由緒あるヴァリエール家の家名に泥  
を塗る事になる。

それだけは避けなければいけない。

でも、人間を使い魔なんて……そのような葛藤によりくコントラ  
クト・サーヴァント>……所謂使い魔との契約に踏み切れないので  
ある。

《以上、天の声による状況説明終了!!》

あいててて……まさか召喚されるのにこんな衝撃を受けるなん  
て……あのド変態め、何時か覚えてるよ……。

んで、ここがトリステイン魔法学校か……俺が召喚されたって事  
は今は春の使い魔召喚の儀式中という事か。

となると……目の前にいるのはルイズとしてその隣にいるのはコ



ルベール先生、後の才人に多大な影響を与え、かつ、キュルケを物にしたリア充だ。

んで後ろにいるのが他の生徒と……ふむ、キュルケとタバサもいるな。

どうやら場の混乱状況から見て未だコントラクト・サーヴァントはされていない。

となると、こちらから先に仕掛けるべきだ。

「あゝお取り込み中悪いんだけど、ここは何処だ？」

「おお、これは申し訳ない、私はジャン・コルベール、このトリステイン魔法学校で教師をしている者です」

「トリステイン……確か遙か西方の地、ハルケギニアにそんな名前の小国があつたなあ」

「あの、つかぬ事を伺いますが……ミスタの出身は」

「お宅らハルケギニア人がロバ・アル・カリイエと呼ぶ地方だ。ちなみに俺はそのとある国の一番大きい領地の領主の息子でね、国の大きさはこのトリステインの……五倍位じゃないかな。ああ、ちなみに文献でトリステインの事は多少なりとも知っているよ。」

な、なんですと！

ま、不味い……これは非常に不味いですぞ！

不可抗力とはいえ、ロバ・アル・カリイエの貴族に当たるであろう家柄の跡取りを勝手に呼び出してしまったのだ！

下手をすれば戦争になりかねん！

あの地はハルケギニアよりも遙かに進んだ魔法技術があると聞く。そのような国と戦争などしてまともに勝てるはずがない！

「せ、先生……」

「どうやらミス・ヴァリエールも事の重大さに気が付いたようですね……これは学院長とも相談せねばなりませんまい。」

「下手な対応をすれば、この国を戦火に巻き込む事にもなりかねません。」

「失礼、ミスタ」

「ああ、俺の名前は『草薙猛』、苗字である草薙か、名前である猛のどちらかで呼んでくれ」

「では、ミスタ・クサナギ、よろしければ学院長も交えて色々とお話をさせて頂きたいのですが」

「ふむ……そうだな、状況を正確に把握する為にも責任者の方と面会させて貰おうか」

「ええ、ではご案内いたしましょう。皆さんも教室へ戻りなさい。ミス・ヴァリエールは私と一緒に。」

「は、はい……」

「ふむ、落ち込んでいるのか、それとも怯えているのか……まあ、両方といったところか。」

「しかし、なんであんな風にペラペラと嘘がでてきたんだ？」

「あゝあゝ聞こえるかの」

「その声は……変態か！」

「それ、まだ続いとるのかの……まあええわい、お主の疑問じゃが、あれはわしが考えた設定じゃよ。それを事前にお主の頭に刷り込んでいる。」

「なるほどな、どつりでスラスラとペテンが出て来ると思った」

「ちなみにじゃが、お主の言った家も実在しておるのでは」

「随分と手回しがいいな」

『まあこれ位はの、それと所望した能力については既に使えるようにしてある。後、例の<カバン>についてはお主の足元にあるし、使い魔については念じて呼べばすぐに来るぞい。ああ、それと精神力じゃがルイズの十倍程度にしておいた。まあ、鍛えれば更に増えるからの。最後に使い魔のルーンの洗脳効果は無効にしてあるぞい。』

『頼んでもいないのに、えらい奮発してんな』

『まあ、これくらいの特典はの』

『ま、いいや、大体はわかったぜ』

『では、もう話す事も無いじゃろうが、達者での』

『礼は言わないからな、あばよ、変態』

『最後までこんな扱い……グスン』

能力の確認は今すぐには出来ないから、後でこつそりやっておくしかないな。

それと<カバン>は……お、あつたあつた。

見た目は普通のリュックサックだな。

これにあらゆる医療器具が入っている訳か……内容についても後で確認しておくべきだな。

それと使い魔の白虎については……学院長との話の最中に喚よびだび出そう。

その方が恐らく効果的だろうからな。

## 《学院長室》

ここは、トリステイン魔法学院の長であるオールド・オスマンの

仕事部屋。

今もオールド・オスマンは、秘書であるロングビルのスカートの中を使い魔を使って何時もの如く覗いている最中である。

「……あの、学院長、使い魔を使って人のスカートの中を覗くのやめて貰えませんか」

「なんじゃ、年寄りの楽しみじゃ、ええじゃろうに」

「……いい加減にしないと、踏み潰しますわよ、そのネズミ」

「おゝ怖いのが、モーソトグニル、こっちにおいで」

オールド・オスマンが指示すると、ロングビルの足元にいたネズミはそそくさと戻っていった。

しかし、神聖なはずの使い魔をまさか覗きに使うとは……やはりこの爺も変態であるようだ。

ちなみに、ロングビルの下着は紫のヒモで、若干透けていたと追記しておく。

うわ、何をするやm（天の声……乙！

「学院長、コルベールです、よろしいでしょうか」

「おお、入りなさい」

「失礼します」

ふむ、あれが狸爺ことオールド・オスマンと美人秘書のロングビルか……確かに狸爺の秘書にしておくには惜しいな。

しかし、彼女も苦労してんだらうなあ、なんとなくだが苦労性が顔に出ている気がするぞ。

「ふむ、そちらは見ない顔じゃな」

「実はその事でご相談がありました……」

「わかった、ミス・ロングビル、悪いが退出してくれるかの」  
「わかりました、何かあればお呼び下さい」  
「すまんの」

さて、これから狐と狸の化かしあいになるのかな。  
まあ、俺としてはとりあえず衣食住を保障してくればいいんだ  
がね。

金に関しては黄金律があるから、稼ごうと思えばすぐ稼げるし、  
自分で金を錬金<sup>きん</sup>してもいい。

この辺は交渉次第ってところだろう。

「さて、どうやら厄介事のようじゃが」  
「ええ、実は……」

コルベール先生がルイズの召喚結果について話し始めると、みる  
みる内にオールド・オスマンの顔が青ざめていく。  
そりゃそうだな、他国のしかも国交も無い、ある意味謎の地であ  
る東方の国の人間を搔つ攫ったようなもんだ。

下手すりゃ戦争にでもなりかねん。

まあ、こちらとしては元々召喚される予定だったし、色々と方便  
も考えてあんだけど。

「それは、非常に不味いのう……」  
「ええ……このまま契約をするのは問題ありと思ひまして学院長に  
ご報告をと」  
「うむ……」

「あゝ話の最中だけど、幾つか整理させて貰いたいがいいか？」  
「構わぬぞ」

「先ず最初に俺を召喚したのはこの子でいいんだな？」

「ええ、間違いございません」

「次にここはトリステイン王国」

「そうじゃ」

「んで、俺が使い魔にならなければこの子は進級出来ない」と

「まあ、そうじゃの、残念じゃが」

ふむ、どうやらその辺りの設定は原作と変わりはないようだ。

つか、ルイズが泣きそうなんですけど……いや、誰も使い魔に成らないとは言ってないぞ。

だからそんな顔すんなって！

いたたまれなくなるじゃないか！

「あゝちなみにだが、君の名前はなんて名前だ？」

「……ル、ルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

「随分長い名前だな……まあ、ルイズでいいか？」

「……コク」

「んじゃ、結論から言わせて貰うとだな、条件付で使い魔になってもいいぞ」

「えー！」

「ふむ、その条件とは？」

「先ず、俺の衣食住の永久保障、これは見知らぬ地で暮らす以上そちらに責任があるのだから当然だな」

「……まあ、そうじゃの」

「それから仕事の斡旋。ちなみに俺も魔法が使えるので、そっち方面でも構わないぜ。」

「ほう、魔法とな」

「ああ、ちなみにこんな感じだ、レレレレレレ浮遊」

俺が杖を使わずに魔法を披露したところ、三人とも滅茶苦茶びつくりしているようだ。

そらそうだわな、ハルケギニアの常識からぶっ飛んだ事だし。

「い、今、杖を持っていない状態で魔法を使ったのかの」

「ああ、そうだ、俺は杖なしで魔法を使える」

「……な、なんと」

「ちなみにだが、エルフや亜人は俺達の地方にもいてな。奴らが使う先住魔法も俺達の地方じゃ研究されていて、俺も使う事が出来るぞ。」

「……なっ!!」「」「」

「更に言えば、こっちの地方じゃ神といわれてるブリミルだっけ？あれが使った虚無だが……あれの研究もされていてな、俺使えるからな」

「……ポカーン……」「」「」

「一応証拠を見せよう……瞬間移動!」

テレポート  
瞬間移動を使い、今の場所からオールド・オスマンの真後ろに逆さの状態で宙に浮く形で移動。

それを見た瞬間、三人とも腰を抜かしそうなくらい驚いていた。

始祖の魔法をいとも容易く使えば、そりゃそうなるわな。

つつても、原理的にはそう難しい話じゃないんだけどねえ。

「ま、ざっとこんなもんだ」

「な、なんとという事じゃ……確かにそんな魔法、四系統のどれにも無い……」

「え、ええ、一瞬で移動するなど……どれだけ風の魔法を駆使しても不可能です……」

す、凄い……あんな魔法をいとも簡単に……。これって私、凄い使い魔を引き当てたんじゃないかしら。

で、でも、この人もご自分の生活があるだろうし、無理矢理使い魔にしたら……。それこそ戦争に……。

駄目よ、そんな事出来ない……。けど……。使い魔がないんじゃない進級出来ないし……。

「別に虚無なんてそう珍しいもんじゃないからな、まあ、ハルケギニア人は使えないようだが。とりあえず、これで俺がハルケギニア流にいうところのメイジだというのは理解して貰えたか？」

「……じゅ、十分過ぎる位にの」

「あんがと、んで、さっきの条件だけど、どうだい？」

「……衣食住としては永久は無理じゃが、ミス・ヴァリエールが学院にいる間はわしが保障しよう。仕事については、学院の雑務などでなければこれもわしが斡旋する。しかし、本当によいのかの、お主とて元の生活があるじゃろ」

「ああ、それなら心配無い。俺は次男坊だから家督は兄が継ぐさ。それに、俺の使い魔の能力使えば一瞬で戻れるから実は何時でも帰れるんだわ。」

「つ、使い魔といますと」

「序だから呼んでおくか……。おいで、白虎！」

俺が呼びかけると、目の前にゲートが開きそこから現れたのは……真っ白な毛並みをした……。子供というか赤ん坊と言っても差し支えないほど小さい白虎だった。

何これ可愛い！

じゃなくて！



なんでこんなちんまいのさ！

俺は大人の白虎のつもりだったんだぞ！

まあ、癒しになりそうだからこれでもいいけどさ。

『お初に、主殿』

『ず、随分とちんまいな』

『戦いの場合などは元の大きさに戻ります故、ご心配には及びませ  
ん』

『そうか、ちなみに名前はなんて言うんだ？』

『白帝と申します』

『了解、それと人前では念話で頼むわ、当面の間な』

『畏まりました』

しかし、なんとというかある意味ではギャップ萌になるんじゃないか  
ろうか。

ある意味では、とっつきやすいからいいんだけどな。

これもあの変態の仕業か？

だとしたら、少しはマシな仕事するじゃないか。

「そ、それがお主の使い魔かの？」

「そうだ、名前を白帝という。こいつには空間を飛び越える能力が  
あってね。こいつの能力使えば一瞬で家に戻れる。」

「な、なんと！」

「まあ、こつちの地方にはいないだろうな。つか、白帝の種族は東  
方でも非常に貴重だし、滅多に人前に姿を見せないからな。あ、そ  
うだ、白帝、一つ頼みがあんだけどいいか？」

『がっ』

「家の親父とお袋に、俺がハルケギニアの方で一旗上げるつもりだ

つて伝えて来てくれるか？」  
『ががう』

白帝は早々にゲートを作り、俺が頼んだ事を実行する為に向かった。

しかし、あいつの能力は事の外便利だな。

確か虚無に似た魔法があったけど、それだと精神力が無駄になるからな。

白虎の能力使った方が楽でいいやな。

「とまあこれで実家にはちゃんと事情が通る」

「し、しかし本当によいのですか？」

「ああ、大丈夫。親父もお袋も兄貴も俺の破天荒さは承知してつからな、ははは。」

「ふむ、本人はこう言っておるがミス・ヴァリエールはどのようなかね？」

「わ、わたしは……使い魔に、なって欲しい……です……」

「んじやま、条件の方も飲んで貰えるようだし契約成立だな」

「そ、それではミス・ヴァリエールの使い魔になるといふ事です？」

「ああ」

「ならば、コントラクト・サーヴァントを、ミス・ヴァリエール」

「あ、はい」

『我が名は』ルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール』。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ』

ぐっ！

お、思いの外痛いな……これが使い魔のルーンが刻まれるときの痛みか……。

よ、よく才人の奴はこれに耐えたもんだ……普通なら気絶していてもおかしくはないぞ……。

……ふう、漸く治まったか。

左手には……うん、ちゃんとガンダールヴだ。

他の部分は見えないが、ルーンの気配自体は感じるからどうやらちゃんとあるようだ。

「珍しいルーンですな……後でお調べいたしますので、スケッチしておきましょう」

「あ、ああ、しかし思いの外痛いなこれ……」

「あ、あの、大丈夫？」

「ああ、心配ない、もう治まったからな」

うむ、こうして見るとやっぱりルイズは可愛い。

やっぱり性格さえなんとかすれば、ルイズは一級品の美少女だわ。

「では、契約も済んだ事ですし、一度部屋へ戻りましょう」

「うむ、何かあればわしに相談しなさい」

「は、はい、わかりました」

「て、俺の部屋は？」

「直ぐには用意出来ないでな、悪いが暫くはミス・ヴァリエールと同じ部屋で」

「おいおい、いいのかよ、仮にも男だぜ」

「致し方ないじゃろう、ミス・ヴァリエールもよいな」

「あ、えと……その……はい……」

「ま、ルイズがいつてんならいいけどさ。ああ、心配しねえでくれ、邪な事はしねえからさ。」

ルイズと相部屋か……世のロリコン共が聞いたら血の涙流しそうだな。

これでタバサまで加わったら、最早呪い殺されそうな気がするぜ。

まあ、ルイズは俺的にはどっちかってーと妹ポジションだからなあ。

いっっちゃ悪いけど、やっぱり決め手は乳だよ！

あの柔らかい物体には漢の夢が詰っているのだ！  
早めにキュルケとお近づきにならないと！

「じゃ、じゃあ、失礼します、学院長」

「俺も失礼するわ、またなんかあったら来るからさ」

「うむ」

……  
……

「とんでもない事になったのう、コルベール君」

「ええ、まさかミス・ヴァリエールがあのような者を喚よびだすび出すとは

……」

「始祖の魔法さえ使いこなす、東方のメイジか……こりゃ王宮に知られる訳にはいかんのう……」

「そうですね、そうなたら確実にゲルマニアと戦争となりましょ  
う」

「うむ、こちらでその辺りの対応策も検討すべきじゃな。はあ、頭が痛いわい。」

「全くですな……」

……  
……

ルイズの部屋に着いた訳だが……案外こじんまりとしてんだな、まあ、学生寮だし当然と言えば当然か。  
しかし、やっぱり女の子の部屋だねえ、匂いからして違うわ。

暫くの間はルイズと同棲だもんなあ、これだけでも役得だわ。  
流石に着替えとかは自分でやらせるつもりだがね。

「あ、あの」

「ん？」

「えと、その……ごめんなさい、勝手に喚よびだび出してしまって……」

「ああ、気にするなって。どの道、俺は家を継げないからな、自力で生きていくしかないからさ。」

「で、でも……」

「いいんだって。それともっと気安く話してくれていいぜ、変に畏まられてもこっちが困るからさ。ああ、俺の事は『タケル』でいいからさ、これからよろしくな可愛いご主人様」

「う、うん！」

うむ、やっぱり笑顔は素晴らしい……美少女の笑顔プライスレス！！  
つか、この顔見ただけでもほんと果報者だ。

こりゃ、ルイズの悩みも早々になんとかしてやらないと。

しかし、これからハルケギニアでの生活か……一体何が待ってるんだらうな、わくわくするぜ！

## 主人公設定

《《《主人公設定》》》

名前：草薙猛くくさなぎたける>

年齢：18歳

生前年齢：25歳

身長：176.3

見た目：黒髪、黒目の純粋な日本人の見た目、顔は割とイケメン

イメージとしては、魔法少女リリカルなのはの『クロノ・ハラオウン』を若くした感じ

本籍地：東方<ロバ・アル・カリイエ>

実家についても神様により創られている為実在している

家族構成：父、母、兄、妹

本人としては会った事はまだ無いが記憶には存在している

これもまた神様による刷り込みのため

性格：明るく調子がいい

年相応にスケベ

可愛い子にはめっぼう弱い

女性の好みは下は自分より三歳、上は三十路までOK

大の巨乳好き

突っ込み方面の気質あり

案外涙もろい

アニメなどは見るが、そこまで突っ込んだオタク気質ではない  
声優などにも興味は無い

趣味：ごく一般的なゲーム

散歩

友人との飲み会

映画鑑賞

学力：大学卒程度

大学では経済学を専攻

第二外国語はドイツ語、ただしサボり気味だったのでよく覚えてない

能力：ゼロの使い魔に存在する魔法／魔法技術／知識の全て

東方や亜人のものも含まれる

変態という名の神様による刷り込みにより意識せず使用可能

精神力はルイズの十倍、鍛えれば更に増える

ランク的にはスクウェアを突破しているがそれ以上が無い  
為便宜上スクウェア

始祖の使い魔のルーンを全て

ガンダールヴ、ヴィンダールヴ、ミヨズニトニルン、リー

ヴスラシル

<リーヴスラシルについて補足>

リーヴスラシルの能力は、原作とは異なり独自の能力

能力内容は、他の生命体（人間、亜人、幻獣問わず）から  
生命力、精神力を吸い取る能力

使い方次第では、一度に多数を死に至らしめる  
また吸い取った生命力や精神力を自分のものとして蓄える  
事も可能

蓄えられる量は自分の生命力、精神力と同じ量まで  
有事の際は蓄積した生命力や精神力で自己の回復、他者の  
回復が可能

例え致命傷であっても治す事が出来る  
しかし、既に完全に死亡してしまった場合の蘇生は不可  
吸収する際、精神力の性質を変化させる事が可能

これは個人により、精神力の性質が『プラス』か『マイナ  
ス』どちらかになり、

違う性質の精神力を吸収すると反発する為である。

主人公の性質は『プラス』

また、精神力を他者に渡す際に相手の性質に合わせて変化  
させる事も可能

なお、蓄積が無い状態で他者の怪我の治療など、肉体的な  
回復を行うと

最悪の場合自分が死亡する恐れがある

これは自分自身の生命力を使用する為である

また、過剰に生命力や精神力蓄積してしまうと、許容量を  
超えてしまい

これまた死亡する恐れあり

とはいえ、生命力はラカン、精神力はルイズの十倍な為、

そう滅多に許容量を越える事は無い

生命力に関して言えば最早バグの領域である

杖を必要とせずに魔法を使えるようにする

これは杖などの発動媒体を必要としない

またネギまの無詠唱のようにルーンを省略する事も可能



あらゆる世界の医療技術と医療器具の全て

現代社会や未来、漫画やアニメなどの創作も含めたあらゆる医療技術と器具

器具に関しては所持しているリュックサックに入っている  
内部は王の財宝と同様異空間であり薬品なども腐らない  
ゲイト・オブ・パレロン

黄金律

某金ぴかさんの能力

財貨を望めば、必要なだけ手に入るというある意味もつとも羨ましい能力

ニートを増産する能力でもある

働いたら負けでござる！

肉体についてはネギま！のラカンと同等の鋼の肉体

これはそのままラカンの肉体的ポテンシャルを持つ能力  
ただし筋肉達磨ではない

剣術／格闘術／馬術の技能

剣術は西洋剣術や日本の剣術など、格闘技は軍隊格闘、マ  
ーシャルアーツなど

ネギまの神鳴流のようなトンデモ剣術ではなく純粹な剣術  
である

馬術については一般的な乗馬の技術と騎乗戦闘の技術

使い魔

こちらに関しては別項参照

目的：神様から頼まれた神様の二次創作の主人公

とはいえ、特別な事をする訳でなく、自分の思うままに生きる  
当面はルイズ周りの環境改善と、ルイズ自身の改善

る事

それによる自身の待遇の改善などとキュルケとお近づきにな

最終的には、キュルケ、テファ、カトレアの三人を嫁にする

事！

補足：ルイズに対しては悪い感情は無い

魔法が使えず苛められている境遇には同情しているのでなんとかしたいと考えている

タバサに対しても境遇には非常に同情している

何れはなんとかしたいと考えている

どちらにも恋愛感情は無く、妹的な感情を持っている

案外と過保護である

神様についてはただのド変態としか思っていない

殺された恨みもあるので、能力その他については当然と思っ

ている

なお、神様が体を作る際に色々と設定などを刷り込んでいる

為、

自分の出自などに関して淀みなく答える事が出来る

時折真面目になるが、普段はルイズをからかって遊んでいる

度が過ぎてしまい、時折魔法でせっかんされるが

体自体バグキャラの代名詞であるラカンと同様な為、

すぐに復活出来る

記憶については生前のものと、刷り込みで植えつけられた東

方の家族などに

ついての記憶を保持している

この為、出身や過去についてはスラスラと答える事が出来る

《《《使い魔設定》》》

名前：白帝くはくてい

種族：神獣

この物語では神獣は神様のペット扱い

性格：忠誠心が高く主には絶対服従

普段は大人しいが、戦闘の場合は攻撃的

容姿：普段は子虎の姿

有事の際は大人の姿へ戻る

大人の姿は、スパロボの虎王機

能力：空間跳躍

距離に関係なく跳躍可能

正し行ける場所は主人公が正確に記憶している場所のみ

位置関係などが不明瞭な場所へは行けない

例：実家については刷り込みにより主人公が場所を記憶しているので

跳躍可能

場面としてアニメなどに登場した場所については、位置

関係が

不明瞭な為、跳躍不可

雷を操る能力

雷雲を呼び任意の場所に雷を落せる

補足：常時は子虎の姿の為、ルイズによく抱かれている

本人的にもルイズは気に入っているため、第二の主としている  
主の本質的な優しさに気が付いており、主には絶対の忠誠を誓っている

目下のところ、ペット扱いである

なお、神獣である為、他の幻獣よりも遙かに格上である

主と二人っきりの場合は普通に話すが、基本人前で人語を話す事はしない

通常は念話で会話する

他者<ルイズ含む>の前では、普通の虎と同じように鳴く

## 第二話

ルイズの部屋に来てから、二人で話し合っていたのだがその中で二つほど決まった事があった。

先ず第一に、虚無魔法については人前で使わない事と、俺が使えるという事を誰にも話さない事。

これは要らぬ面倒事を避ける為でもあるので、ルイズもちゃんと承してくれている。

次に俺の出身だが、別段隠す必要も無いので聞かれた場合は東方出身のメイジであると伝える方向で決定。

隠せば余計に妙な勘ぐりされそうだし、態々自分で面倒事を引き寄せる必要も無いし。

まあ、後の細かいところは追々って感じになるだろうな。

それと、ルイズと話してみてもわかったが、原作よりも案外素直な感じだ。

俺に対して色々と思うところもあるからって事なのかもしれんけど。

「ねえ、タケルもメイジなら系統があるんでしょ？」

「ん〜そうだなあ、俺は一通り使えるんだが」

「へ？」

「ああ、俺、魔法に関しては異常な才能があるらしくてな、ハルケギニア流でいうところの四系統なんだがあれ全部使えるんだわ、虚無も含めてな。まあ、勿論才能があるからって全部出来た訳じゃない、自分で努力をした結果使えるようになったんだけどな。今もまだまだ修行中だしさ。」

「……す、凄いわね」

「まあ、おかげで縁談には困らなかったが……正直なところ、面倒でな、さつさと旅にでも出ようかと思ってたのさ。その矢先にルイズに召喚されてな、ある意味じゃラッキーだね。」

「あう……ごめん……」

「だから気にするなって、俺としては嬉しいんだからさ」  
「う、うん……」

なんていうか、随分ルイズがしおらしいというか……こつ、あれだな、なんとというかそそのるものがある！

うむ、やっぱり可愛いわ、是非妹に欲しい感じた。

て、んな事考えてる場合じゃない、さつさとルイズのコンプレックスを取り除いてしまおう。

今のままで過ごさせるのは、流石に可愛そうだ。

「そっぴやさ、ルイズ、一つ聞きたいんだけどいいか？」

「な、何？」

「召喚の時に周りが『ゼロのルイズ』とか言ってる、あれ、何だ？」

「……私、魔法が使えないの」

「ん？ どういう事だ？」

「……どんな魔法使っても、直ぐに爆発しちゃって……一度も成功した事ないの……」

「ふむ、なるほどな」

ああ、やっぱりこの事気にしてるんだなあ、えらい落ち込みようだ。

つか、ハルケギニアの連中ってバカだよなあ、失敗するなら何も起きるはず無いのに。

それを自分らが理解出来ないからって……はあ、これだから頭の固い連中ってのは駄目なんだよな。

もうちよつと、頭柔らかくして考えればすぐにわかる事なのになあ。

「どんな魔法でも爆発か……」

「ええ……だから<ゼロ>なの……」

随分落ち込んでるなあ。

こりゃ相当堪えてるんだろう。

無理も無い、ずっと長い間ゼロだ無能だといわれ続けて来たんだろっから。

やっぱり不憫でならない……こりゃ放ってはおけんぞ、漢として。

「タケルはいいわね、凄い才能があつて……」

「おいおい、俺のは努力の結果だけ。それに才能ついたらルイズも凄いはずだよ。」

「……気休めはよして頂戴、どうせ私なんて……」

「そう卑屈になるなつて。よく考えてみるよ、ルイズは俺を<召喚>したんだぜ。こんな規格外な俺をさ。」

「そ、そう言われてみれば……」

「少なくとも<召喚>という魔法と<契約>という魔法は成功したじゃないか。だから、決して<ゼロ>じゃないさ。」

「……私が、ゼロじゃない……」

つか、ルイズ自身もそうだが表面だけしか見ていないのはハルケギニア人の悪い癖だな。

ルイズがどんだけ凄い才能を秘めているかなんて、少し考えれば

わかりそうなもんなんだけどなあ。

「それとき、さっきの爆発の話だけど、ちと気になるんだよな」

「え？」

「だって失敗したら普通は何も起きないはずだろ？」

「そ、そういえば……」

普通と違う効果が出ているから失敗だなんて短絡的過ぎだ。

少し見かたを変えればルイズの魔法の特殊性なんて直ぐに気が付くのに。

これだからガチガチに頭の固い連中は駄目なんだよ。

思考は柔軟でなきゃな！

「ところがルイズの場合は<爆発>が起きている。となれば、単純な失敗じゃないのは明白だ。」

「……単純な失敗じゃない？」

「ああ、原因はまだわからないけどさ」

俺の独自の推測はある。

多分ルイズの持つ虚無の担い手としての力があまりにもでか過ぎて、通常のやり方だと呪文が対応出来ない可能性が高い。

だとしてルイズがコモンマジックを使えるようにするとすれば……

……閃いた！

単純な事だ、力のコントロール方法を変えればいいんだ！

通常のメイジは、全身から精神力を杖に集めて魔法を行使するがルイズの場合だと、それじゃ大きくなりすぎるんだ。

コモンマジックでも爆発するし、その際消費されるのはコモン程



度だって言われているけど、絶対量そのものが違うからコモンマジックからすればルイズの精神力はでか過ぎるんだよ。

だから、ルイズの場合は精神力の扱い方を変えて、体の一部から通常よりもほんの少量の精神力を杖に集める事が出来れば恐らく失敗はしないはず。

まあ、このやり方は使う魔法にあわせて精神力を微細に調整するっていう、かなり精密なコントロールが必要だから直ぐに出来るようになるとは考えにくい。

けど、魔法に関しては天才的な才能を持つルイズなら案外と短期間で出来るかもしれない。

こうしちゃいらねえ、早速実験だ！

「なあ、ルイズ」

「……な、何？」

「ちよいと実験してみないか？」

「実験？」

「ああ、俺の推測が正しければ……ルイズがコモンマジックを使う事が出来ると思うぜ」

「ど、どういう事?!」

「詳しく説明するとだな……」

俺が説明する間、ルイズはかなり真剣な顔をして聞いていた。

そりゃそうだな、もしかしたら魔法を使う為の糸口になるかもしれないんだ。

それに、ルイズは確か座学じゃトップクラスの成績だったはずだから理解力は申し分ないはずだ。

こりゃ期待出来るかもしれん。

「た、確かにタケルの言う通りなら……」  
「ああ、成功すれば魔法が使える可能性が高い。ただ、微細なコン  
トロールが必要だから一朝一夕って訳にはいかないだろうけどさ。」  
「ええ、でも……」  
「やってみる価値はありそうだろ、俺も手伝うからさ」  
「う、うん！」  
「おっしや、そんじゃ早速行こうぜ！」

### 《ヴェストリの広場》

さてと、実験するにあたって使うべき魔法は……〈念力〉がよさ  
そうだな、一番単純な魔法だし。  
ライトだと、明るさの調節やらなんやら色々あって、返ってやり  
にくいだろうし。

んじゃま、準備しますか。

先ずは〈念力〉で動かす対象だけど、適当な石でも錬金してと……  
…んで地面に輪を二個、離れた位置に描いてと……これでよし！

これから実施する実験は、手前の輪の中に置いてある石を、奥に  
ある輪の中に入れる、つまりは玉入れみたいなもんだ。

これを上手く出来るようになれば、どんどん輪の大きさを狭めて  
小さい輪の中に入れられるようにすると。

それが出来たら、次のステップに進む感じだ。  
うっし、ルイズに説明しよっと。

「んじゃま、ルイズ準備出来たから説明するぜ」

「うん！」

「これからやる実験は………という訳だ、わかったか？」

「ええ、わかったわ」

「んじゃ始めよう、ああ、石ころは幾ら爆発させてもいいからな、俺が都度錬金で作るから」

「ええ、それじゃいくわ……えいつ！」

うほ、いい爆発！

じゃなくて、うへへ正しいルーンを知らないのにこの破壊力かよ。

これだけでも十分チートじゃねえか……しかも、狙い自体は正確に石ころを捉えてるんだぞ、これで敵の頭にも狙い付けたら……スプラッター丁上がり！

てな事になるわな……やべ、あんまりルイズをからかうのは危険だ……。

「な、なかなか難しいわね……」

「そりゃ今までのやり方と全然違うんだ、一朝一夕では出来ないだろうさ。まあ、焦りと無茶は禁物だ、じっくりやろうぜ。」

「ええ！」

しっかし、道が開けたかもしれないという思いからなのかなんだけ随分前向きになってるじゃないか。

やっぱルイズは根は素直ないい娘なんだろうなあ。

周囲の環境のせいで、あんな性格になったんだろう。

まあ、ツンデレ部分はどうにも生粹っぽいけど。

……  
……

それから、俺は止めたんだがどうしてもやると聞かず数時間も続けた為、遂にルイズがぶつ倒れてしまった。

なので、今はルイズをおんぶして部屋に戻っている最中である。

いやはや、可愛い寝息立てやがってもう……しかし、無茶は禁物って言ったのになあ。

自分がぶつ倒れてちゃ意味無いだろうに全く、本当に手の掛かる妹が出来た気分だぜ。

とはいえ、最後の方は明らかに最初と比べて爆発の規模も小さくなっていたし、使っている精神力も小さかった。

恐らくは、疲れて無駄な力が抜けたんだろうな。

人間、疲れきると楽な動作をしようとするもんだからな。

この調子で使用する精神力を絞っていけば、恐らくは近いうちに<念力>を使用出来る様になるだろう。

まあ、その前に体力付けないと体が持たないだろうから、その辺りも訓練しないと。

ルイズの体系からして、栄養のバランスも行き届いていない可能性もあるし、体力付けと併せて食生活の改善も必要かな。

「ちょっと、そのミスタ」

「ん？」

そこにいたのは……うほ、いいキュルケ、やらないか？

て、違っわ！

いきなりそんな事いったら、あの変態爺と同じじゃねえか！  
しっかし、あれだな、生で見るとマジ凄いな、あの乳！

うむ、眼福眼福！

と、そんな事考えてる場合じゃないな、話し合わせておかないと。

「え〜と……どちらさん？」

「あら、申し遅れましたわ、私わたくしキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルト・ツエルプストーと申しますの、ミスタ」

「あ、こりゃどうもご丁寧に、俺は草薙猛、呼び方は苗字のクサナギでも名前のタケルでも好きな方で呼んでくれ」

「珍しいお名前ね」

「東方出身だからな、こっちは文化がまるで違っからさ」

「まあ、そうでしたの」

「んで、なんか用かい？ 出来れば早くルイズを寝かせてやりたいんだけど」

「いえ、女子寮に男性がいらっしやるものですから」

「そりゃそうか、ちなみに知ってると思うが、俺はルイズの使い魔だぜ。まあ、部屋が用意されるまではルイズと同室なんでね。悪いけど勘弁してくれ。」

「そうでしたの」

「んじゃ、悪いが俺は行くぜ、なんか用事あんだったら来てくれ」

「ええ、そうさせて貰いますわ、うふふ」

「そいじゃ」

つか、あれでマジ18歳なのかよ、どんだけ色っぽいんだ！

とはいえ、キュルケの真の魅力は外見のよさじゃなく、中身の優しさだと俺は思う。

タバサの事を大事にしてるみたいだし、コルベール先生をかばった事といい、彼女の本来の姿は多分母性的な女性なんだろうなきと。

うん、益々惚れた、絶対ものにしてやるぜ！

……  
……

んで、ルイズを寝かし付けたから、今の内に貰った能力の確認で  
もしようかな。

一応使い方なんかは全部頭の中に入ってるみたいで問題は無いと  
思うが、念のために確認しておこう。

いざって時に使えなきゃ意味がないからな。

先ずは<カバン>の中身から確認してみるか。

「え〜と……およ、なんだこの紙切れ」

何々……え〜と……。

何だ、あの変態からか。

まだなんかあんのか？

いい加減しつこいやっちなあ。

「ごほん！ え〜これを読んでいるという事は、漸く能力の確認に移ったのじゃろう。既に各能力の使い方は事前の刷り込みにより頭に入っているはずじゃと思う。ただ、リーヴスラシルのルーンにつ

いて一点だけ刷り込み忘れた事があるので補足しておくぞい。それはな、吸収した精神力じゃがその性質を本来の物と変化させる事が可能なのじゃ。』

どういうこったそりゃ。

なんで態々性質を変える必要があるんだ？

別に必要無いと思うが。

それとも何かあるんかね？

『精神力の性質は人によって異なる、お主はプラスの性質じゃし、タバサたんはマイナスの性質じゃ。んで、お主がマイナスの精神力をそのまま吸収すると本来のプラスの精神力と反発してしまい、悪影響が出てしまう可能性があるのじゃ。その為この能力をリーヴスラシルに付加しておいた。』

なるほどね、そういう理由なのか。

確かにプラスとマイナスのエネルギーがぶつかれば、互いにショートして下手すりゃ爆発だわな。

てことはだ、プラスの性質を持つ奴に対してマイナスに変更した精神力を送り込めばそれだけでも倒せる訳か……スプラッタになりそうだけどな。

こりゃ思いのほか便利かもしれないなあ。

あのド変態も案外気が利くじゃないか、ド変態から格上げして駄神に戻しておくか。

呼び名を変えたところで、奴がド変態なのは変わらんけど。

『以上で説明は終わりじゃ、なおこの手紙は自動的に爆発する……』

ばいちゃ  
□

読み終えた瞬間、手紙が破裂しやがった……ケホケホ……。  
あ、あのクソ野郎、格上げはやっぱやめだ！

あいつは生涯ド変態で決定だ  
くそ、次に会う事があつたら絶対にぶっ殺してやつからな！

……

……

その後も<カバン>の中を漁ると出るわ出るわ……聴診器に超音波メス、それにX線治療器などなど。

中には現代では実用化されていない治療器具なんかもあったな。

しかも、ハルケギニアの方の秘薬や、なんでかわからないけど石鹸やらシャンプー、リンスまであった。

これって医療器具になるんかね？

まあ、あの変態が気を利かせたのかもしれない。

ありがたく貰っておこう。

一応使い方についてはすぐに頭の中に浮かんだから問題無いだろう。

まあ、使う対象は限られているし、そんなに出番は無いと思うんだけどなあ。

「ううん……」



「ルイズ、目が覚めたか？」

「あ、あれ、ここは……」

「お前の部屋だよ、全くあれほど無茶するなって言ったのになあ」

「あ、そっか、私……」

「焦るのはわかるけど、ぶっ倒れちゃ何にもならないだろ」

「……わ、悪かったわよ」

「やれやれ、次からはもう少し落ち着いてやろうな。焦っても結果は悪くなるだけだぞ。」

「うん……」

「でもまあ、最後の方は爆発の規模も小さくなってたし精神力の消費も下がってたからな、恐らくそう遠くない内にコツを掴めるんじゃないか？」

「ほ、本当?!」

「勿論マジだ、だが焦ってお前がぶっ倒れちゃ続けるものも続けられなくなっちまうぞ」

「う、うん、次からは気をつける」

「それでいい、まあ、焦らず確実にいこうぜ」

「うん」

うむうむ、素直で結構。

いやしっかし、ほんと、素直なルイズは可愛いねえ。

何だか違う方面の性癖に目覚めそうだ……注意せねば!

俺はロリでは無い!

「ねえ、そういうえば、タケルの食事はどうするのかしら」

「そっぴやそっぴやだ、どうすんだろ」

「学院長に聞いた方がよくないかしら、食堂に行くのは流石に不味いし」

「そだな、一度聞いてみるか。つかさ、とっくに食事の時間過ぎて

ね？」

「そ、そういえば……」

「仕方ねえ、厨房にでも行って残り物貰って来るわ」

「あ、私も行くわ、タケルは厨房の場所知らないでしょ」

「そういやそうだな、忘れてたわ、ははは」

「もう、案外抜けてるのね」

「うっせ」

いやはや迂闊だったぜ、衣食住は保障されているとはいえ、食事処の場所聞き忘れるなんて。

確か食堂では貴族以外食事出来ないはずだからな、となると部屋で食べるか厨房で食べるかになるんだらう。

まあ、俺としてもその方が気楽でいいんだけどさ。

さてと、さくつと爺さんのところに行って確認しますかね。

## 《厨房》

途中、学院長室により食事について聞いたところ、やはり食堂で食べるのは不味いという事になった。

その為、当面の間は厨房で食べるようにとの指示を受けた。

何れは部屋で食べれるようにしてくれるらしいが、俺としては一人で食べるよりも厨房で食べる方がいいんだよな。

やっぱ食事は大勢で食べるに限るからな。

んで、ここがその厨房な訳だけど、案外と広いんだな。

およ、あそこにいるのは……おお、シエスタか。

生で見ると確かに美人だなあ、まあ、俺の好みじゃねえんだよな。悪い娘では無いと思うけどさ、どうも食指が動かんよね。

「すみません、ここの責任者の方いらっしゃいますか」

俺が声を掛けると、なんだか酷く怯えた感じが漂ってきた。

そりゃそうか、貴族が態々厨房に来て責任者を呼び出すなんて下手こいたかと思うわな。

しかし、ここまで怯えるって事はハルケギニアの平民蔑視は相だなもんなんだなあ。

この辺りも何れなんとかしたいもんだわ。

「……貴族様、何か問題でもありましたか？」

「いや、問題って訳じゃないんだけどさ。実は……」

そうして出てきた責任者であるマルトーのおっさんに事情を話したところ、賄い料理を頂ける事になった。

そっぴやアニメとかでも才人が絶賛してたっけなあ。

いやはや、楽しみだぜ、マルトーのおっさんの料理。

何せ超絶美味いつて評判だしさ。

「お、お待たせいたしました」

「あんがと、メイドさん。んじゃルイズ、食うか。」

「そうね、じゃあ……」偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ。今朝もささやかな糧を我に与えたもつたことを感謝致します。』」

『いったきま〜す！』

「ちよつと、何よその挨拶」

「俺とこじゃこうなの、これはな、料理を作ってくれた人、これから糧となる食物や動物に対しての感謝の気持ちを表す挨拶なんだよ。」

「いい挨拶ですな」

「だろ……と、話してると冷めちまうな……んでは早速……おお、美味しいな」

やばい、マジ美味い。

なんですか、この反則級に美味しい料理は。

よくこの連中こんな料理を残せるよな。

俺だったら勿体無くて残せないわ……太りそうだけど。

「て、ルイズ、野菜ばっか残すなよ」

「だって野菜って苦いんだもの」

「どら、こっち渡せ……うん、確かに苦いけど、後引く美味さじゃないか」

「え〜だってそれハシバミ草よ、食べられないわよ」

「んな事言って好き嫌いばっかしてるから成長出来ずに何時まで経つても胸がペツタンコなんだよ」

「……な、ななな、なんですってええええええ！」

「やっぱキュルケみたいに、ボンキュボンじゃないとな、ははは」  
「……ど、どうせ……どうせ私はペツタンコよおおおおお……！」

叫びながらルイズが腕を振り回すが、頭を抑えてやるとまるで子供の駄々っ子パンチだ。

うん、やっぱルイズ可愛いわ。

ルイズも女なんだねえ、自分でもペツタンコな自覚はあるみたいだし気にしているようだな。

よし、ここはいつちよ、豊胸と美肌への道を説いてやるとしますかね。

「まあ落ち着けてルイズ。確かに今のルイズはペタンコだけだな、実はそれを改善する秘策があんだよ……ふふふ……。」

俺がそう言った瞬間、厨房内にいる全女性からの視線が集まった。つか、無茶苦茶怖いんですけど！

そんなに睨まなくても教えるつてば！

ほら、マルトーのおっさん達も怯えてるつてばよ！

「ど、どどど、どついう事よ、説明しなさい！」

「お、おおお、落ち着けて！つか、厨房の女性方も落ち着いてくれ！ちゃんと教えるから！」

「早く言いなさい〜い！〜！」

「ちょ、やめ！食べた物出ちまうよ！！！」

マ、マジでやめれっつーに！

食べた直後にんな揺らされたらマジで吐いちまうよー！

《ルイズ&女性陣一同暴走中……暫くお待ち下さい》

「……ぜえぜえ……し、死ぬかと思った……」

「じ、ごめん……」

「全く、どこの国でも女性はこういった話題になると目の色変わるな……」

「だ、だって……」

「はは、まあ、気にしてないさ。んじゃ、豊胸と美肌についてだが、少し長くなるが皆しっかり聞いてくれ。」

話し始めようとした瞬間、物凄い真剣な目が変わった。

つか、真剣てより血走ってるな……マジ怖いんですけど。

下手な事言ったら確実に殺られる！

こ、これは気合入れて説明せねば！

……

……

んで、豊胸体操と美肌の為の運動療法や食事療法について出来る限りわかりやすく説明。

これは実際に現実世界で効果ありと実証されたものだから、こちら側でも効果はあるだろう。

とはいえ、一応は実証例を説明しておかないと信憑性が低い。

実証例としては……お袋にすっかね。

「ちなみにな、今説明した方法はちゃんと実証例があんだわ」

「実証例？」

「ああ、実は俺のお袋なんだけどき、ルイズと同じでペタンコでなあ。親父は気にしてなかったんだけど、俺がガキの頃にちとある台詞を言ってしまったから物凄く気にしていたらしくてな。んで隠れて色々やってたらしいんだけど、どうも芳しくなくてなあ。」

「ある台詞って？」

「ん、ああ、うんとこさ小さい頃によ、お袋の胸さわって『まな板』







「答えるぜ！」

「「「「「「「「「「「「「「「「」

そうして、厨房での食事は物凄く盛り上がった。

女性達やルイズからは、美白やらその辺の事についてかなり詰め寄られたがな。

いやはや、凄い剣幕だぜ、思わず引きそうになった。

それとマルトーのおっさん達男性陣からも、普通の貴族と違い平民と分け隔てなく接し料理の大切さがわかっていているという事で随分と気に入られたようだ。

んで、明日からの食事について相談したところ、厨房で飯を食う事を許された。

いや、これで毎日美味しい飯が食えるし役得役得

## 《ルイズの部屋》

「しっかし、さっきの女性達の剣幕は凄かったな、思わず引いちまったよ」

「し、仕方ないじゃない、あれだけ有用な方法なら誰でも知りたいわよ」

「ま、そりゃそうだな」

ルイズは今日から早速、今日から豊胸体操を始めるようだ。

まあ、胸部を刺激しなければならぬので裸になる必要があるから、体操中は俺は外に出てるがね。

「そついやさ、少し聞きたいんだがいいか？」

「何？」

「多分そつ変わらないとは思つが、使い魔の役割を聞いとこうと思つてさ」

「そつね、じゃあ説明するわね」

ルイズから聞かされた使い魔の役割は原作と同一な内容だった。流石に感覚の共有は無理だが、秘薬の製造は出来るし、戦闘にいつでも可能だ。

なので、本来の才人よりは十二分に役立つだろう。

しかも、俺には黄金律まであるから金を稼ぐ事も出来る。

「ふむ、感覚の共有は無理だけど、秘薬製造は可能だし戦闘も可能だな」

「秘薬も作れるの？」

「ああ、水系統は医学にも通じるからな、特に力を入れて覚えてきたんだわ」

「へへ凄いのね」

水系統は何も癒ヒールンクしだけじゃないんだがな。

例えば、初歩中の初歩である凝縮コンデンセーションだつて、敵の顔の周りに発動させりゃそれだけで相手は溺れる。

癒ヒールンクしだつて、過剰に使えば組織を壊してしまい死に至る。

使い方次第では、水系統は一番残酷な魔法だからな、使う以上はしっかりと知識を身に付けないと。

「そついや、前に作った髪質をよくする秘薬があつたな」

「ど、どんなの？」

「風呂の時に使う物さ」

「えと……」

「欲しいか？」

「う、うん、出来れば」

「はは、構わないよ。なんせ作るの簡単だしな。ほら、これがそう  
だ。」

「二つあるの？」

「ああ、具体的に使い方を説明すると先ず最初にお湯でよく髪を濯  
ぐ、ここまではいいよな」

「うん」

「髪の濯ぎが終わったら先ず先にこっちの『シャンプー』をよく泡  
立てしつかりと頭を洗う。これは毛穴に詰まった汚れを落す為に必  
要なんだわ。毛穴の汚れを放っておくと抜け毛の原因になるから、  
将来的にハゲる確立が高くなる。まあ、女性の場合はハゲるんじゃ  
なくて抜け毛が多くなるって感じだな。んで、ちゃんとシャンプー  
の泡を洗い流したら続いてこっちの『リンス』を使う訳よ。こっち  
はよく髪に馴染ませる感じで使う。そうすると痛んだ毛なんかの髪  
質が改善されるって訳さ。どうだ、簡単だろ」

「とはいえ、慣れないと泡が目に入ったりして結構痛かったりする  
んだけどな。」

「よく子供の頃は目にシャンプー入ってしまったって悶絶してたもんだ  
わ。」

「これもタケルが作ったのよね、凄いわね」

「ま、そういう事だ、渡しておくから使ってみな。足りなくなつた  
ら補充するからさ。」

「い、いいの？」

「ああ、材料に関しては非常に簡単だし、はっきり言えば錬金で作  
れるんだわ」

「へ〜ほんと、なんでも出来るのね」

「人間努力次第でどうとでも成れるさ。ルイズだってきつと魔法が出来るようになるぜ。」

「うん、頑張るわ!」

「その意気だ、さ、明日も授業あんだろ、風呂入ってさっさと寝な」  
「ええ、そうするわ」

こうして召喚一日目の夜は更けていった。

ルイズとも案外上手くやれてるし、このまま行けば確実にルイズは魔法を使えるようになるだろう。

そうすりゃ、周りで嘲笑してるバカガキ共を見返してやる事が出来る。

今から楽しみだよなあ、周りの連中の鳩が豆鉄砲食らったような面を見るのがさ。

きつと笑えるだろう、そんなときゃ、ルイズと一緒に大笑いしてやるぜ。

そんじゃま、明日も頑張るとしようかね!

### 第三話

「う、うう〜ん、もう朝か……ふああああよく寝たぜ……」

ルイズは……まだ寝てるな。

随分可愛い寝顔してやがる、美少女の寝顔プライスレス！

……いかにいかに、このネタ二度目だな。

そういや、今日の授業って俺も顔出さないと不味いんだろうか？

確か、原作でもそんな感じだったし。

どうせ、バカなガキ共がルイズを挑発すんだらうけど、まあそこはきつちり俺が抑えればいいだらう……と、そろそろルイズを起こすかね。

「おいルイズ、そろそろ起きろってば」

「う、うう〜ん……」

「ほら、早く起きろって、遅刻すんぞ」

「……えへへ、もう食べられない〜」

な、なんつーベタな夢見てるんだよ。

全くしょうがねえなあ……仕方ないがやるか。

古来より、寝ぼけた子を起こすときはこつするに限る。  
覚悟しろルイズ！

「そおいー！」

「……うきゃあー！」

うむ、布団をひっくり返すに限る！  
案の定、ベッドから落下してる。

しかし……ルイズにその下着はまだ早いだろ。  
もうちよいと、グラマラスになってからでない。

「い、いたたた……」

「よう、目が覚めたかルイズ」

「も、もう、タケル！ もっとやさしく起こしてよ！」

「何度やっても起きないルイズが悪い、つか、下着見えてるぞ」

「……へ……きゃあああ！」

「ルイズにはまだその下着は早いんじゃないかねえの、ははは」

「……タ、タケルの……ばかあああああ！」

ちよ、こんな室内で魔法使うんてば！  
あべしっ！

……  
……

い、いてて……流石に効いたぜえ……これがルイズの爆発の威  
力かよ。

ラカンの肉体の頑強さが無きゃ死んでるところだったぜ。

こりゃ、本格的にルイズをからかうのはやめておいた方がよさそ  
うだ。

命に関わるぜ、この威力は。

「もう、知らない！」

「悪かったって……つか、ルイズも下着姿で寝なくてもいいだろうに……」

「う、だって、暑いんだもん……」

「これからはちゃんとパジャマなり着てくれ、んじゃ外出てるから着替えてくれよ」

「わかったわよう……」

……

……

それからルイズの着替えが終わったので、二人揃って洗顔に向かう。

洗顔する為の場所は、風呂場の前にあるようだ。

つか、俺って風呂場使えるのかね？

どうなんだろう……？

「ルイズ、洗顔にはこれ使え」

「これって、例のシャンプーと同じ物なの？」

「これは洗顔専用だよ、さっぱりして気持ちいいぜ」

「ありがと、試してみるわ」

「おう、感想聞かせてくれな。と、そういやさ、俺って風呂場使えるのかね？」

「そういえば……どうなのかしら」

「また、学院長の爺さんに聞いてみるか」

「そうね、そうしましょ」

二人で洗顔を済ませたところ、ルイズは洗顔用ソープが気に入ららしい。

凄くさっぱり出来たと喜んでいる。

やっぱりハルケギニアの日用雑貨って、あんまり進歩してないんだろう。

それも無理無いか、ブリミル教のあほったれ共がいるせいで文明的な発展が遅れているみたいだからなあ。

このままじゃ行き詰って、にっちもさっちもいなくなるぞ。

誰かがそれに気が付けばいいんだけどねえ。

……

……

んで、朝一番で学院長室に突撃し風呂場の使用について聞いたが、やっぱりトリステイン貴族では無いので使えないとの事だ。

その為、自作で風呂場作っていいか確認したところ、例のコルベール先生の研究室の傍であればいいとの事だ。

あそこって、確か匂いが酷くて誰も近寄らないんだよな。

まあ、その辺は風の魔法なり駆使して匂いが届かないようにすればいいし、コルベール先生の研究室自体を掃除してもいいしな。

なら、今日の午後にも早速建てるかな。

自重するつもり一切無いけどな……ぐふふ……。

さてと、そんじゃ朝飯の時間だしそろそろ行きますかね。



ちなみに、ルイズは一応食堂で食べるそうだが、そういう決まりらしいから。

「あら、ミスタ・クサナギ」

「およ、昨夜の……えと、キュルケだっけか？」

「ええ、覚えていただいで嬉しいですわ」

「ちよ、ちよっと、何でタケルがツエルプストーと知り合いなのよ！」

「ああ、昨日ルイズがぶつ倒れて運んでいる最中に顔合わせてな。ほら、やっぱり女子寮に男がいたら気になるだろ、んで声掛けられて事情説明した訳さ。その際に自己紹介だけしておいた訳よ。」

やっぱりこの時期だとキュルケとはまだ反目なんかね。

まあ、何代も続いている遺恨みたいだからなあ、そう簡単に仲良くしろつても無理かもしれない。

でも、ルイズには友達が必要だろう。

よし、ルイズの今後の為にも今の内から手打っておくでしょう。

「ミスタもこれから食事ですか？」

「ああ、俺は厨房で食べるんだけどな」

「なら、私もわたくし一緒しようかしら」

「ちよっと、タケルは私の使い魔よ！ 手出さないでよ！」

「あら、貴女みたいなお子様じゃ、ミスタを満足させられないんじゃないかって」

……うひゝなんか火花が見えるんですけど……これが女の本気の喧嘩かよ、マジ怖いんですけど……。

まあ、キュルケとはお近づきにはなりたくないけど、あんまりルイズに反発する訳にもいかない。

キュルケについては、じっくりやってきゃいいか。  
つか、先に二人を止めないと。

「ほらほら、こんな往来で喧嘩してつとみつともないぜ」

「けど！」

「まあまあルイズ、そう短気を起こすなって。お前の悪い癖だぞ。」

「……ううう……わかったわよ……」

【あら珍しい、ヴァリエールがこんなに素直に言う事を聞くなんて、よほど信頼しているのかしら。それに、随分落ち着いた殿方よね。少し言葉は乱暴だけど、なんだか親しみが湧くわ。……案外この方が、私の微熱を受け止めてくれるかもしれないわね。】

「んじゃ、俺は厨房に行くよ。飯食ったら部屋に戻ってるからさ。」

「ええ、わかったわ」

「あら、ミスタ、もう行かれるのかしら」

「あんまり時間掛かりすぎると、作ってくれる人に悪いからな。二人も早く行けよ、んじゃな。」

ここにこれ以上いると、厄介事になりそうだから、さっさと退散しておこう。

しっかしあれだよな、やっぱりキュルケは美人だわ。

しかもあの褐色の肌がまたそそる！

まあ、がつついてもしょうがねえし、無理矢理なんて真似もする気は一切無いしな。

出来れば自然に仲良くなればいいんだがね。

と、それよりも、さっさと厨房行って飯食ってこようつと。

## 《厨房》

厨房に到着し、マルトーのおっさんに朝飯を頼むと、ハムエッグとサラダが出された。

サラダの方は、昨夜のハシバミ草と他の野菜を混ぜたもので味付けも意外あっさりしていて美味い。

というか、聞いた限りでは普通、貴族の食事はもつと濃い味付けなんだそうだ。

試しに食材とか聞いてみたところ、ほとんどが脂っこいものや糖分の高い物ばかり。

生活習慣病まっしぐらだ、こりゃあれだな、ルイズやキュルケなんかには栄養学についても講義しておいた方がいいかもしれん。

今のままじゃ、確実に将来太るか糖尿病だわ。

……  
……

食事も終わったのでルイズの部屋で待機しているが、確か才人が召喚されてからの一番最初の授業でルイズが錬金の魔法使って失敗こいて罰掃除させられるんだよな。

あのイベントは事前に潰しておいた方がいい。

せっかく上向いて来たルイズの気持ちを、またもや下降させる事

になりかねん。

となると、確か原因としてはどこのデブと喧嘩してその罰的な感じで先生に指名されるはず。

なら、デブとの争いを止めるか、指名された際に割り込むかのどちらかだ。

まあ、争い止めるよりも、俺が割り込んで錬金で金でも作ってみせる事の方が効果的かもしれん。

金はスクウエアじゃないと作れないから、スクウエアメイズを使い魔に出来るほどルイズには才能があるってわからせるいいきっかけになるかも。

よし、そうと決まれば後は実行するのみだ。

## 《教室》

これから授業か……しっかし……後ろにいる使い魔、なんかどえらいのが並んでるな。

梟やら鷲、カエルなんかはまだいいけど……なんだあの目玉は……すえぞうか？

まあ、どれも小型だわな……と、あそこにいる火トカゲは、キユルケんとこの『フレーム』か。

なかなか愛嬌のある顔してるな、後で話してみるかね。

「皆さん、おはようございます。皆さんも無事使い魔を召喚したようです。私はこうして新しい使い魔を見るのが毎年楽しみでならないのですよ。」

ま、こんだけバラエティーに富んだ面々を見るのはそりゃ面白いわな。  
つか、中には大型のもいるだろうし、多分ここに入りきれないのもいるんだろう。

暇なときにも、使い魔の小屋に行つて見るかね。  
ヴィンダールヴの力の確認もしておきたいし。

「それにしても、ミス・ヴァリエールは随分と変わった使い魔を召喚したようですね」

「はい……」

「どうせ、どっかから連れて来たんだろ」

「そんな事ないわよ！　ちゃんと召喚したわよ！」

「嘘だね、だってあの時爆発してたじゃないか！」

こいつ、マジでアホなのか？

爆発の後に俺がいたの見てるだろうに……やっぱり何もわかってないガキだなあ。

これじゃ、程度が知れるってもんだな、ここの連中も。  
なんだか、対抗意識燃やすのもバカらしいわ。

「そうだ、どうせその辺歩いてたのを捕まえてきたんだろ！」

「違うわよ！タケルは……」

「だからお前はくゼロのルイズ>なんだよ！　才能なしの能無しめ  
！」

やばい、怒りがふつつつと湧き上がる……しかし、ここは我慢の子だ！

この後に徹底的に見返してやればいい、そうすりゃ小づるさいガキ共も黙るはず。

今は辛抱するときだ！

まだ慌てるような時間じゃない！

「……………！ミス・シユヴルーズ、かぜつぴきのマリコルヌが私を侮辱しました！」

「か、かぜつぴきだと！ボクは『風上』のマリコルヌだ！」

「こらこら、お二人共みつともない口論はおやめなさい。さもないと両名共に口を塞ぎますよ。」

教師がそう言うと、渋々ながらルイズとあのデブは席に座った。

とはいえ、ルイズは相当頭にきてる。

まあ、俺もだがよ。

あのデブ、どうしてくれようか……………いっそ、生命力全部吸い取って殺すか？

……………流石にヤバイか、口論の後で死ねばルイズが疑われるもんな。いかんいかん、何だか怒りのせいかどうも思考が黒い方向に行くな、自重しないと。

……………

その後も授業は座学が中心となって進み、授業の残り時間が十分になったところで錬金の実演となった。

ここで俺が割り込み、力を見せればあのデブもいい加減黙るだろう。

本来ならでしゃばるべきでは無いが、今回ばかりは自重しないぜ！

俺のターンはここからだ！

「さて、ここに一つの石があります。これを青銅へと錬金していただきますしょう。では、代表してミス・ヴァリエールにお願いしようかしら。」

「先生、止めた方がいいです。どうせ爆発するだけですから」

「そうです、教室が壊れますよ、やめましょう」

「誰にでも失敗は付き物です、失敗を重ねる事で成功が生まれるのですよ」

よし、このタイミングだ！

ルイズの才能、認めさせてやるぜ！

「あゝ先生さんよ、ちよつといいか？」

「何かしら、ミス・ヴァリエールの使い魔さん」

「実は俺はロバ・アル・カリイエの出身でね、今後の参考までにロバ・アル・カリイエ流の魔法の使い方つてのを実践して見せたいんだが いいかい？」

「まあ、ロバ・アル・カリイエの……それは随分と遠方ですわね。いいでしょ、ロバ・アル・カリイエの魔法なんて滅多に見られるものではありませんからね。」

ふふふ、掛かったな。

ロバ・アル・カリイエ流と言っても、そう特別な事をする訳じゃない。

ただ、杖を使わないってだけなんだけどな。  
それでも、恐らくこいつらはビビるだろうよ。

なんせ、自分らの常識とはかけ離れているんだから。  
せいぜい驚くがいいさ！

「んじゃ、遠慮なくやらせて貰うわ、いいだろルイズ」  
「え、ええ……」  
「んじゃいくぜ……『錬金』！」

そして俺が錬金したのは……スクウェアでなければ作り出せない  
金だ。

しかも、これは純度100%を誇る優れもの！

ハルケギニアのメイジじゃ、スクウェアでも早々作れるものじゃ  
ないだろうぞ。

とはいえ、金を作り出すのは魔法技術から言えば実はそう難しく  
は無い。

ただ、イメージだけで作るうとするから面倒なんだ。

ちゃんと金の配列やらなんやら、その辺りの事がわかっていれば  
別に難しくはないんだよな。

「こ、これは……金……ですか？」

「ああ、<ディテクトマジック>で調べて貰ってもいいぜ」

「で、では失礼して……す、凄い、純度100%……」

「ああ、ちなみにそいつは先生にあげるわ。何時も家のルイズの面  
倒してもらってる事への、使い魔からのささやかな礼さ。」

「あ、あら、それは……」



ふふふ、態々金を作ったのもそれに目を奪わせて黙らせる為なんだよ。

まんまと引つかかったな、このオバハン。

まあ、誰でも目の前に金なんて価値のある物をちらつかせりやなびくだろうな。

おまけに今回の金は天然物と同じ純度100%だからな、食いつかない訳が無いぜ。

「ね、ねえ、ミスタ・クサナギ……貴方、今杖を使わずに魔法を……」

「お、キュルケは気が付いたか、流石だな。実のところロバ・アル・カリイエじゃ、長い研究の末に杖などの発動媒体を使わずに魔法を使用する方法が編み出されたのさ。とはいえ、スクウェアクラス、かつ、その中でも取り分け実力のあるメイジしか出来ない芸当だな。」

「そ、それじゃ、お前はスクウェアだと……そ、そんなバカな事……」

「現に目の前で金を錬金したろ？金はスクウェアじゃないと作れない。それはハルケギニアでも同じだろ？」

「だ、だからって……」

「ふむ、信用出来ないか……なら……」ユビキタス・デル・ウインデ・風は偏在する『」

そして今度は風のスクウェアスペルである偏在を使用する。

その瞬間、全員が目を丸くした。

あのタバサでさえ驚いているようだ。

土のスクウェアかと思っただら風のスクウェアスペルを使っただ

からな。

「……………どうだい、これで満足かい？」……………」

俺がそう言うと、遂にぐうの音も出せなくなったのか例のルイズにいちやもん付けたデブチンは黙り込んだ。

そりやそうだろうな、無能とかゼロとかバカにしている相手が召喚したのが実のところ土と風のスクウエアメイジだったなんて……そりや認めたくも無いだろう。

だがな、俺のターンはまだ終わらないのさ。

最後の追撃、させて貰うぜ！

「……………これでわかったと思うが、ルイズはな最低でも土と風の両方がスクウエアランクのメイジを召喚出来るだけの才能は秘めてるって事なんだよ。そんな規格外な存在を喚よびだすび出すルイズが無能な訳無いだろ？ それにルイズは少なくとも<サモン・サーヴァント>と<コントラクト・サーヴァント>に関しては成功させている訳だから<ゼロ>では無い。ああ、ちなみにだけどな、ルイズとの契約の証であるルーンはちゃんと左手に刻まれている。<コントラクト・サーヴァント>は学院長とコルベル先生の目の前でやったかな、証人はその二人だ。もしもどうしても信用出来ないって言うならその二人に直接聞いてみる事だ。」……………」

場が静まり返った……………。

頃合を見計らい席に戻ると……………ルイズがもの凄い笑顔で迎えてくれた。

多分、今までさんざんばら侮辱して来た連中に仕返し出来てすっきりしたんだろうな。

とはいえ、この生徒は度量の狭いのが多いからなあ。

なんだかんだと難癖付けて来るかもしれんが、その場合は一切の遠慮無く相手をしてやるう。

どうせ、俺に直接喧嘩吹っかける度胸のある奴はいないだろうけど。

……  
……

その後の授業が終了し、各自部屋に戻って行った。

部屋に戻ってからは、ルイズから滅茶苦茶賞賛を受けた。

そりゃもう、ルイズの笑顔ったらなんと晴れやかな事か。

よほど溜まってたんだらうなあ。

それと、部屋に戻ると白帝が戻って来ていて親父からの伝言を受け取った。

内容は『好きに生きろ』だそうだ。

まあ、流石は親父だな、よくわかってるじゃないの。

ルイズにその事を説明し、改めて俺がハルケギニアで生きるのには問題ない事を話して聞かせた……未だに気にしているみたいだからな。

そして午後の授業までの間は、ルイズとの特訓である。  
昨日と同様の方法で特訓中。

今もルイズは爆発させているが、確実に規模は小さくなっているし、精神力の消費も減っている。

あ、ちなみにだが、俺は他人の精神力量と性質を感知する事が出来る。

まあ、リーヴスラシルの能力考えればそれも当然なんだけどね。  
なので今はルイズの精神力量を注視しながら特訓中な訳だ。

昨日みたいにぶっ倒れたら洒落にならん。

魔法の使い過ぎで倒れるのは、身体的には結構ヤバイからな。

「……ふう、なかなか上手くないわね」

「仕方ないって、こればかりは一朝一夕にはいかないからな」

「うん」

「ちゃんと爆発の規模は小さくなってるとし、使う精神力も絞れてきているのは間違いないさ」

「成功に近づいているって事よね」

「その通り、だから下手に焦って躓くより、じっくり確実にやろうや」

「ええ、そうね」

やっぱあれだな、ルイズは本来褒められて伸びる子なんだよ。

それなのに周りが、無能だのゼロだの言うから本来の才能を発揮出来なかったんだ。

これはこの学院の教師にも少々問題があるね。

ゼロなんて嘲笑されてるの知ってるだろうに、なんでそれを対処しないのかね。

まあ、ルイズの家柄の事もあんだろうけど、貴族社会ってなほん  
とややこしいもんだわ。

その辺りも何れなんとかしたいよなあ。

……  
……

その後も訓練を続け、亀の歩みかもしれんが着実に成果は上がっている。

最早目に見えて爆発の規模が小さくなってる。

現に最後の一回は、石が破裂しなかった。

こりゃ近日中に魔法を成功させる可能性が高くなってきた……お兄さんは楽しみだぜ。

## 《厨房》

んで、只今厨房で昼飯の最中だ。

いやはや、昨日もそうだったがやっぱりマルトーのおっさんの料理は絶品だぜ。

しかし、さつき料理を運んでくれたメイドさんの手を見たが、酷い<sup>あかぎれ</sup>皸を起こしていた。

水仕事だからしょうがないとはいえ、流石にあれば放置出来ないわ。

確か、ハンドクリームが<カバン>に入ってたはず。  
一応渡しておくか。

「あ、メイドさん」

「はい、なんででしょうか？」

「手荒れと皸が酷いようだからさ、これあげるわ」

そうしてハンドクリームを手渡す。

薬用品だから、<カバン>に入ってたみたいだ。

つか、この<カバン>、中の物を消費しても自動的に補充される  
ようで実質無制限に取り出せる。

なので誰かにあげても問題無いんだよね。

「あ、あの、これは？」

「一日二回、仕事の後に手全体に塗るんだ。そうすれば手荒れや皸  
を予防、改善してくれるぜ。まあ、言ってみれば手荒れや皸に対す  
る専用の秘薬みたいなもんだな。」

「そ、そんな高価な物、頂く訳には……」

「いいんだって、何時も美味しい飯食わしてくれてんだ、これ位当然  
だ。ああ、ちなみに料金なんて取らないし、言ってくれば補充す  
るからな。」

「で、でも……」

「いいから、受け取っておきなつて。一応他の皆と共同で使ってく  
れな。」

かなり押し付けた感じはするけど、まあこれで多少なりとも皸や

手荒れは改善する事だろう。

世話になってるんだから、これ位はしなきゃ罰が当たるってもん  
だわ。

しつつかし、ほんと、ハルケギニアじゃ平民の扱って酷いみたい  
だなあ。

なんで、納税者を蔑ろにするような真似が出来るのかね、俺には  
信じられんわ。

《コルベール研究室付近》

ルイズは午後の授業に参加している。

今回の授業は座学だそうで、使い魔は必要ないそうだ。

その為、俺は暇になったので、この際だから学院長から許可を貰  
っている風呂場の建設に着手する事に。

まあ、正方形の建物に窓を付けて、排水用の水路を付ければいい  
かな。

風呂場自体もそう大きくなっていいだろ、どの道入るのは俺一人  
なんだし。

水については、水場からゴーレムに運ばせればいいし、凝縮コンデンセーションで作  
ってもいいしな。

後は沸かす方法だけど、これは<錬金>で適当な燃料を作って沸  
かせばいいだろう。

つか、あれかな、湯の温度調節用に自動人形でも作るか……よし、  
そうしよう。

「さてと、先ずは<クリエイト・ゴーレム>」

作業用としてゴーレムを五体ほど作り出す。

「んで次は建物だが石造りでいつか」

材料を作るため<錬金>を連発し、大理石のブロックを複数作る。

「次に基礎を固めないとな」

地面を<錬金>し、平らに均してから基礎となる鉄杭を打ち込み、材料である石のブロックに同じだけの穴を穿つ。

んで、ゴーレムを使いブロックを積み上げ、隙間はこれまた錬金で結合させる。

さらに固定化と硬化を何十にも重ねがけする事で……漸く建物は完成だ。

次は湯の温度調節の為の自動人形か……自動人形についても向こうじゃ使われてたからな。

一応作った記憶もある事だし、それを思い出しながら……なかなか難しいな……むむむ、細かい部分が……この……もうちょい……出来たあ……！！

見た目はゴーレムと変わらないから、変に警戒される事も無いだろう。

いやはや、建物と自動人形の作製だけで四時間も掛かってしまった。

やっぱ知識と閃きだけじゃ駄目だ、今度からはもう少し計画性を



持とう。

「ふう……流石にこれだけの物を作ると結構手間かかるなあ」

「あ、あの、ミスタ・クサナギ……これは……」

「およ、コルベール先生か、風呂場だよ。俺専用のな、ああ、ちゃんと学院長に許可取ってるぜ。」

「す、凄いですな、これをお一人で？」

「ああ、まあね」

しきりに感心しているな、コルベール先生は。

まあ、普通は複数の土メイジがやるもんだからなあ。

「ちなみに、自動人形により常に温度は一定に保たれるって寸法よ」

「ほ」

「燃料に関しては俺が<錬金>するから一切金は掛からない」

「燃料ですか……それはどのような？」

「ああ、液体燃料とかだと火力強すぎるからな、単純な木炭さ」

ちゃんと木炭からの煙を排出する煙突も作ってあるからな、目に染みるような事は無いのさ。

それに木炭は作るの楽だしな。

「さてと、一風呂浴びるk『タケル！』ん？ ああ、ルイズか、どうかしたか？」

「どうしたじゃないわよ、何してるのよ、こんな所で！」

「ああ、風呂場作ってた」

「お風呂場って……これ？」

「そそそ、ちゃんと学院長の爺さんから許可は貰ってるからな」

「へへて、そうじゃなくて！ これから特訓の時間でしょ！」

「あゝもうそんな時間か、今から一風呂浴びようかと思ってたが、

ま、後ででいつか」

「ミス・ヴァリエール、ミスタ・クサナギ、特訓とは？」

「ああ、俺がルイズに魔法を教えるのさ」

「ほほう、それは興味深いですな、見学してもよろしいですか？」

「構わないぜ、いいだろルイズ」

「う、うん、コルベール先生なら」

「おっしや、んじゃ早速行くとするか」

### 《ヴェストリの広場》

んで、コルベール先生見学の元、これまた昨日と同様の方法で特訓を開始。

大分コツが掴めて来たのか、ルイズも精神力の調節を頑張っているようだ。

やっぱりルイズは天才だわな、たった二日でここまで精神力の扱いが上手くなるとはね。

これなら確実にコモンを使えるようになるだろう。

「ふむ、＜念力＞ですか」

「ああ、ただ普通の使い方とは少し違うんだわ」

「といますと？」

コルベール先生に、俺が考えたルイズの魔法が失敗する原因とその対処法に関する理論を説明。

かなり真剣に聞いてくれていた。

やっぱりこのハゲたおっさんは、生徒の事を大事に思ってるんだ

ねえ。

まあ、例のダンゲルテールだったけか、あの件については触れないで置こう。

何れはわかる事だろう。

その時どういう事になるかはわかんないけどさ。

「という訳なんだよ」

「なるほど、確かに仰る通りであれば……」

「ああ、しかも、ルイズは確実に成果を上げてる。現に特訓を開始した直後よりも、明らかに精神力の消費量と爆発の規模は小さくなってる。後は極限まで精神力を絞ればいけるはずさ。」

「……いやはや、凄いものですな。我々教師が幾ら考えてもわからなかったのに、こつも容易く原因と対処法を考え出すとは」

「要は頭の柔軟さだな。固定観念に凝り固まってたら進歩は出来ないうって事さ。」

「耳の痛い話ですな」

「まあ、ハルケギニアの魔法理論は、東方からすればかなり昔の理論だからな。つっても、東方はかなり広い地域だ、場所によっては魔法文化が無かったりするんだけどな。」

「なんと!」

そうなんだよな、俺の実家がある場所、地球で言えばアメリカ大陸に相当するであろう国にはちゃんと魔法文化があつて独自の進化を遂げている。

しかし、アフリカ大陸に相当する場所には、正式な魔法文化は無い。

まあ、独自の精霊信仰とかはあるみたいだけどな。

ちなみに、シヨゼフの使い魔であるシェフィールドの出身地には、

一応魔法文化そのものはあるが使える人間が非常に限定されているようだ。

その為、俺のいた国ほど魔法文化は発展していない。

まあ、海を渡って文化が伝播するには、まだまだ時間が掛かるだろうからな。

「しかし、一度行ってみたいですね、私自信が作り出した発明の力で」

「発明ねえ」

そついやコルベール先生って独学で内燃機関、つまりエンジンを作り出す天才なんだよな。

まあ、ハルケギニア人じゃあれの凄さは理解出来ないだろうけどな。

勿体無いよなあ、こんな人が教師だけやってるなんてさ。

世が世なら大発明王だぜ。

「今度暇なときにでも、先生の発明見せてくれよ」

「ええ、是非ご覧になって下さい、ミスタ・クサナギの意見も聞きたいですからな」

俺がコルベール先生と話している間も、ルイズは魔法を使い続け、着実に成功までの道のりを歩んでいる。

途中、俺が気が付いた事をルイズに伝えたと、逆にルイズからも改善案が出され、議論が白熱してしまった。

ルイズはあれかね、姉であるエレオノールと同じ研究者気質なのかもしれん。

まあ、座学はトップだしあり得る事だ。

何れエレオノールとは話をしてみたいね、研究者としての彼女と……その前にあの苛烈な性格なんとかして貰いたいけどさ。

……  
……

んで、今日の特訓もお開きとなり、時間的に風呂の時間なのでルイズは女子風呂へ、俺は自作の風呂場へ向かった。  
なお、自作の風呂場の内装は、完全な石作りだ。

本当なら檜風呂とかにしたかったけど、檜は作れないからな、致し方ない。  
代わりにとってはなんだが、日本酒を<錬金>で作り出しておいた。

成分がわかれば作れるからな、本当に<錬金>は便利だわ。  
一応、日本酒の成分については、生前に独自に学んでいたの覚えていた。

つか、生前に学んだ内容をどうしてこつも鮮明に覚えているのか不思議だが、恐らくはあの変態の差し金だろう。  
野郎は自分が楽しむ為なら労力を惜しまないタイプだからなあ。

「くうくうっぱ日本人は日本酒に限るぜえ！」

などとおっさん臭い事を言いながら、日本酒をあおり続ける。

ワインとかもいいけど、やっぱり風呂で飲むなら日本酒だよなあ。

今度露天風呂でも作るかね。  
勿論混浴で！

……

……

たっぷりと湯につかり、体も温まった。  
やっぱり風呂はいいねえ、心の洗濯だわ。

しっかしあれだなあ、せつかく日本酒あるから何かツマミが欲しいな……マルトーのおっさんのとこ行って残り物でも頼んでみるか。  
出来れば塩っ気のあるのが欲しいかな。

### 《厨房》

序に飯を食いに厨房へやって来た。  
俺が来ると、皆歓迎してくれる。

「マルトーのおっさん、ちと頼みたいんだけどさ」

「おう、何でもいいな」

「残り物でいいからさ、なんかツマミになるもんねえかな。出来れば塩ッ気があるやつでさ。」

「ふむ、ならこれなんてどうだ」

そう言ってマルトーのおっさんが出してきたのは……野菜とベーコンの炒め物だな。

ふむ、味見してみると……ほど良い辛味と酸味が効いてるな。

塩ッ気もそこそこだし、これなら丁度いいやな。

ありがたく貰って行こう。

「あんがと、これ貰って行くわ」

「おう、またツマミが欲しくなったら何時でも来な」

「そうさせて貰うわ。ああ、そうだ、今度いい酒持ってくるよ。」

「そりゃ楽しみだ、わははは！」

相変わらず豪快なおっさんだな、やっぱり付き合いやすい人だぜ。

さてと、ほんじゃルイズの部屋に戻るかな。

### 《ルイズの部屋》

「おいゝす、戻ったぜえゝ」

「遅かったじゃないの、タケル」

「ああ、マルトーのおっさんここでツマミ貰って来たんだわ」

「ツマミっ？」

「酒のツマミさ。ルイズも食うか？」

「うん、少しだけ」

「んじゃ」

こうして少しばかりの晩酌を楽しみながら、召喚されて二日目の夜は過ぎていった。

ルイズも今朝の教訓を活かしパジャマで寝てたのだが、暑いせい

か結局寝ている最中に脱いでしまったようだ。

幾らなんでも無防備過ぎる、もう少し恥じらいというモノを持たせる為にもしっかり教育しよう。

そう、俺は心に誓うのであった……



## 第三話（後書き）

風呂場の建設部分については適当です。

## 第四話

俺がハルケギニアに召喚、もとい、転生してから一週間が経過。その間、ルイズと俺は授業の合間や放課後に特訓を重ねている。

恐らく後一步のところまで来ているが、やはり最後の詰めに関しては流石にルイズとはいえはなかなか難しいようだ。

それでも諦めずに頑張っているので、恐らく近日中には成功するだろう。

そついや先日之夜、トイレに起きた時にキュルケの使い魔である『フレイルム』に捕まってキュルケの部屋に連れて行かれた。

キュルケの部屋に入ったら、なんとまあキュルケがネグリジエ姿で待ち受けてるもんだから、ついついルパンダイブしそうになった。

まあ、なんとか思いとどまったがね……つか、本当にあいつ18歳なのかとマジで疑いたくなるな。

結局その日は、俺のマイサンが覚醒してしまつて寝付く事が出来ませんでしたよ……ああ、生殺しは辛い……

んで、今日は『虚無の曜日』。

日本で言うところの日曜日であり、学院も休みなのだ。

本来なら街にでも出かけたところだが、ルイズの特訓をする事にした。

何せ後もう一步のところまで来ているからな、この調子を崩さず一気に成功させようって腹だ。

「いや〜しっかし、いい天気だわなあ」

「そうねえ、出来れば街にでも行きたかったけど」

「まあ、絶対調な今を逃すのは勿体無いからな、我慢の子だぜ」

「そうよね、後もう一步だもんね！」

「そうそう、その意気その意気」

出来れば早めにデルフリンガーだっけ、あれを回収しておきたいところではあるんだがな。

一応伝説の武器っばいし、あればあれで便利だろう。

まあ、別に無くてもいいけど。

ただ、話し相手としては面白いから欲しいっちゃ欲しいんだよね。

「ルイズ、そろそろ休憩しよか」

「わかったわ」

あまり根を詰めすぎてもまたぶっ倒れるからな。

ルイズは見た目通り、体力は少ないからなあ。

<念力>が使えるようになったら、体力強化も訓練メニューに追加すべきか。

あんまり無理はさせられないだろうけどさ。

「しかし、平和だ……」

「そうねえ……」

二人して、空を眺めながらぼけーとしている。

このマッタリした時間がなんともいえず心地いい。

なんというか、生前あれほどあくせくしていたのがバカみたいに

思えてくるな。

とはいえ、これから先、原作にあった出来事が起きるとなるとこ  
うマツタリとしている訳にはいかないだろうなあ。

何せこの世界はバイオレンスな出来事に溢れている。

一応思い出せる限りの原作の出来事を挙げてみると……。

- ・ギーシュとの決闘
- ・デルフ入手
- ・フーケとの戦闘
- ・アルビオン内乱
- ・ゼロ戦入手
- ・学院襲撃
- ・水の精霊との契約
- ・アンリエッタからの依頼
- ・ウェールズ死亡
- ・ワールドとの戦闘
- ・アルビオン脱出

後はガリア関係とロマリア関係か。

それに一番重要なのは、如何にして乳女神ことテファと接触する  
かだ。

テファとの接触は出来る限り自然な状況を演出しなければ。

まあ、原作の才人はアルビオン脱出時に発生する七万の軍勢との  
戦闘で一度心配停止状態になり仮死状態となっていたが、俺の場合  
は勝つ目算がちゃんとある。

その為にも、暇を見つけて準備をしておかないとな。

つか、ロングビルはどうすつかねえ。

襲撃なんて起こされても面倒だしなあ。  
先に接触しておくかね。

金が手に入れば、あいつも態々危険な真似するとは思えないし。  
まあ、割と好みではあんだよね、年上なら三十路までOKだし俺  
つて。

「そういえばタケルに聞きたかったんだけど」

「ん？」

「タケルが言うには私って才能あるんでしょ、なら私も杖を使わず  
に魔法使えるのかしら？」

「うーん、どうだろうな。ルイズの場合は元が特殊だからな。下手  
に杖なしにすると余計ややこしい事になると思うぜ。」

「それもそっか……残念」

出来なくは無いらさうけど、多分余計に面倒な事になる。

なんせ、ルイズの場合はより細かい精神力の操作が必要な訳だか  
ら。

下手に扱いなれていない手法に変えてしまうと、返って暴走する  
危険性が高まるだろう。

ルイズの魔法が暴走したら、それこそ死人が出てしまう。

「でもまあ、魔法発動媒体は別に杖に拘る必要は無いらさうぜ」

「そうなの？」

「ああ、指輪とか装飾品でもいいしな。要は精神力を流しやすい物  
ならいい訳だ。」

「へーそうだったのねえ」

「俺みたいに発動媒体がいらぬ奴以外の場合、ロバ・アル・カリ

イエじゃあれだけ、複数の発動媒体身に付けるのが普通だ。なんせ戦場で杖落としたのでもう戦えませんじゃ役に立たないからな。」

「言われてみればそうよね」

「だから落さない物や、見つけにくいものなんかを隠し持つんだわ」

「ハルケギニアじゃ考えられないわね」

「だろうな」

特にトリスティンの貴族は誇りだのなんだのと、面倒な拘りがあるからなあ。

戦闘の時にそんな拘りに縛られてたら、勝てるものも勝てないのにな。

もう少し柔軟な思考をして貰いたいもんだ。

ハルケギニアの考えを変えるには、先ず邪魔な存在としてプリミル教があんだよなあ。

あそこの神官共は、もうどうしようもない程の下種の集まりだし。ほんと、宗教が権力持つと碌な事にならないな。

それに今の教皇のヴィットーリオ・セレヴァレだっけか、あれは最早狂っていると思えない。

自分の行いは、ハルケギニアの全員にとっていい行いだと思いきっている、というか妄信している。

あれって多分、一種の精神的な病だろうなあ。

善悪の判断というより、そもそも悪という感情が無いんだろう。

だから、やる事成す事全て正しいと思ひ込んでしまっ。

本当に今の行いが正しいのかなど、自分自身の行いに疑いを持つて事が出来ないんだろうなあ。

そういった人間は、得てして差別や争いを気が付かずに生み出すからなあ。

困った奴だ……でもまあ、何れ嫌でも出会う事になるだろうけどさ。

……  
……

その後暫くの間特訓を続け、昼食の時間になったので一旦休憩とした。

今日は事前にマルトーのおっさんに頼んで弁当作ってもらっている。

マルトーのおっさんは弁当を作るのも上手いから楽しみなんだよ。なので、この場で食べる事にしたんだが……。

「で、なんでツエルプスターがいるのよ……！」

「いや、俺に聞くな」

「あら、いいじゃありませんのミスタ」

そう、なんでか知らないがキュルケがいるんだよ。しかも、タバサまで引き連れてきている。

どうなってんだこりゃ？  
教えた覚えは無いんだがなあ。

「そっいや、そっちの子は？」

「ああ、私の友人のタバサですの」

「……よろしく」

「ああ、よろしくな。俺は草薙猛、苗字のクサナギでも名前のタケルでも好きに呼んでくれ」

「……コク」

しっかし、本当に物静かというか、感情の起伏が感じられない子だな。

まあ、それも無理は無いか。

父親殺されて、母親ぶっ壊されて、未だに正気保ってるだけでも大したもんだ。

何れはこの子についてもなんとかしないとイケないんだよな。

「つか、弁当二人分しかないんだが……」

「大丈夫ですわ、ちゃんと用意して来ましたから、ねえタバサ」

「……コク」

「そっか、ならいいか」

「良くないわよ!」

「おいおいルイズ、何をそんなに怒ってるんだ?」

「だってツエルプストーなのよ!」

「いや、だから俺にはお前の怒る理由がわからん。喧嘩でもしてんのか?」

「私わたくしの実家のツエルプストー家と彼女の実家のヴァリエール家は、長い間の遺恨がありますの」

「遺恨?」

「ええ、それは……」

改めて聞いてみると……アホ臭くて涙が出るわ。

そらまあ、女取られたとか、婚約者の男取られたとか確かにムカ



ツクだろうけど、何も子々孫々に渡ってその遺恨を残さなくてもいいだろうに。

お前らの実家はどんだけ暇なんだと問いたい、問い詰めたい、小時間問い詰めたい……。

つか、一度張り倒したいな、両家の長を……。

「く、くだらねえ……んな事で子々孫々まで争うなんて、どんだけ暇なんだよお前らの家は……」

「くだらないって何よ!」

「俺から言わせれば、アホ臭い事この上ないわ。そら女取られたり男取られたりはムカツクだろうけど、子々孫々にまで残すような恨みじゃねえだろうに……んな事ばっかやってっから何時まで経っても進歩がねえんだよ。」

「けど!」

「なあルイズ、そういうくだらない恨み辛みを持ち続けて、お前ら永遠に争うつもりか?」

「それは……」

「いつかどつかでその恨みを飲み込まなきゃ、何時まで経っても争いは終わらないし進歩も出来ないぞ。親同士が仲違いしてるならまず娘のお前らが率先して仲良くする事で、和解させるよう努力しなきゃよ。子が間違いを犯したら親が子を叱るように、親が間違いを犯したら子が諫めるべきだ。それが『家族』ってもんだろう。」

俺も偉そうな事は言えないけど、やっぱり何処かで争いは止めないとな。

続けば続くほど、不幸な人が増えるだけなんだから。

難しいとは思っけど、ルイズとキュルケにはちゃんと仲良くして欲しいものだ。

お互い歩み寄ればきつといい結果になるはずだからさ。

「まあ、今すぐは無理でも時間を掛けてでもいいから、ちゃんとお互いの事を知って仲良くしな」

「……う、うん……」

「そう、ですわね……」

「んじゃま、暗い話は終わりにして弁当食べるか。今日はマルトーのおっさんの手作りだからな、期待出来るだろう。ほいじゃ、いっただきま〜す！」

うん、マルトーのおっさんの弁当やっぱいけるな。

今回は肉料理と野菜料理だけでなく、魚料理まであるのか。

こつちじゃあんまり魚料理って無いみたいだからなあ。

やっぱ日本人としては魚料理は欠かせないよな。

「……どした、タバサ？」

「……おいしそう」

「ふむ、食うか」

「……コクコク」

「んじゃほれ、あ〜ん」

「……あ〜ん」

なんだか、ひな鳥に餌やってるみたいだな。

しっかし、本当によく食べる子だな、この小さい体の何処に入ってるんだ？

明らかに容量オーバーしてんだけど……。

ゼ口魔の七不思議の一つだな。

……  
……

やっぱり食事は大勢で食べるに限る。

特にこういった休日の日なんかは、それだけでも楽しい。

こういった何気ない幸せってのが大事なんだろうなあ……いかに  
いかん、こんな事考えるなんて俺も年か？

まだまだ若いつもりなんだけどなあ。

「うっし、そんじゃ特訓再開すつか」

「ええ」

キュルケ達も見学している中、特訓の再開となった。

精神力の消費が大分抑えられて来たせいか、魔法を使える回数も  
増えている。

「なんだか、何時ものヴァリエールにしては派手さが無いわね」

「わざと抑えてるんだよ、その為の特訓だからな」

「そうなんですの」

「それにしてもキュルケさ、俺相手にそんな変に畏まった喋り方し  
なくていいぜ」

「あら、そう？ じゃあ、そうさせて貰うわ」

「はは、その方が気楽でいいやな」

そうやってキュルケと話している時だ。

何時もならルイズが〈念力〉を唱えた後は、すぐさま爆音が響く

のだがそれが無い。

最初は全員怪訝な顔をしていたが、我に帰って頭が動き出すと一つの結論に達した。

まさかとは思うけど……。

「お、おい、ルイズ、今！」

「……う、うん……」

確認してみると、石を置いた場所から十センチほど石が動いている……。

爆発も起きていないから、これはひょっとして……。

「い、石が動いてる……それに爆発もしてないって事は……」

「……せ、成功……したの？」

恐らく成功したんだろう……だが、一度成功したからといってまだ油断は出来ない。

もう少し試してみないと。

「多分成功だと思う……が、念の為だ、もう少し検証しよう」

「そ、そうね……偶然かもしれないものね……じゃ、じゃあ、やるわね」

「おう」

そして、何度か繰り返すも一度も爆発は起きず、遂には奥側に設置した輪の中に石を放り込む事に成功。

うん、確実に<念力>が発動している。

「……間違いない、<念力>が発動してる……」

「……じゃ、じゃあ……」

「ああ、そうだ、そうだよ！ やったなルイズ！ 遂に魔法成功だ

！……」

「……」

ははは、あまりの事に呆けてら！

そりゃそうだよな、十数年一度も成功した事のなかった魔法が遂に成功したんだ！

これほど驚き、そして何より嬉しい事は無いだろう！

ルイズにとって、何よりも願った瞬間なんだから！

「やった、やったんだよ！ ははは、ルイズ、やっぱお前は天才だ

！ ははは！！」

「……わ、私……私……魔法、出来たのね……」

「そうだよ！ バツチリく念力>が成功したんだ！」

「………や、やったああああああ！」

ルイズも両腕を挙げ大喜びだ！

俺も嬉しいぜ、遂にやり遂げたんだから！

「やったなルイズ、ははは、今日は目出度い日になったぜ、このや  
るうー！」

「きゃ、タ、タケル、ちょっと！」

「ははは、いいじゃねえか、俺も嬉しいぜ！」

嬉しさのあまりついルイズを抱き上げてしまった。

でも、本当に嬉しい。

召喚されてまだ一週間しか経ってないし、一緒にいた期間は非常

に短い我が事のように嬉しい。

いや〜もうこれはあれだな、お祝いしないと！

「……あのヴァリエールが魔法を成功……うそでしょ……」

「……間違いなく<念力>は成功していた」

「それも、彼のせいなのかしら……」

「……」

やっべ〜どうしよ、もう嬉しすぎて涙出てくるぜ！

後でコルベール先生と学院長の爺さんにも教えてやらないと！

「いや〜もう本当、我が事のように嬉しいぜ！」

「あり、がとう……うっ……くっ……」

「ほら泣くな泣くなって、せっかく目出度いんだもつと笑わなきや  
！」

「……ぐすっ……う、うん！」

「おっしゃ、今日はお祝いだな、街にでも繰り出してばあ〜と騒ぐ  
か！ キュルケとタバサも来いよ、一緒に騒ごうぜ！」

「あら、いいの？」

「何言つてんだよ、祝いは大勢の方がいいに決まってるじゃねえか

！ あ、そうだ、コルベール先生と学院長の爺さんにも報告しない  
とな！ きつと喜んでくれるぜ！」

「うん」

ルイズも本当に嬉しそうだな。

この顔を見ただけでも、この世界に来た甲斐があるってもんだ  
わ。

こんなに嬉しい気持ちになったのって何時以来だろうなあ。

ああ、ほんと、今日はいい夢が見られそうだぜ。

《学院長室》

「爺さん！」

「ほっなんじゃ、お主か、騒がしいのう」

「聞いてくれよ！ ルイズが魔法を成功させたんだ！」

「……ほ？」

「だから、ルイズが＜念力＞の魔法を成功させたんだ！」

「……なんじゃとおおおおお！！！」

そりゃ驚くよな、今までどの教師が教えても一度も成功する事が無かったルイズが魔法を成功させたんだもん。

この爺さんは教育者としては、本当に生徒を思う人だ。

きっと、ルイズが魔法を使えない事を気にしてくれていたんだと思う。

だからこそのこの驚きようなんだろうさ。

「ほ、本当に成功したのかの?!」

「ああ、間違いない、俺とキュルケとタバサが証人だ！」

「……そ、そうか、ミス・ヴァリエール、出来ればわしにもみせてくれんかの」

「あ、はい！」

爺さんの手元にあった紙くずを机に置き、＜念力＞でもってゴミ箱へ移動させる。

少しふら付いてはいるが、ちゃんとゴミ箱に紙くずが入ったのを見て、爺さんも納得してくれた。

「……うむ、すっかりと＜念力＞が発動しておるの」

「だろ！ いや／＼やっぱルイズは天才な上にセンスあるわ。まさか一週間でコツ掴むなんてさ！」

「こ、これはお主が教えたのかの？」

「そうだけ、ルイズの話聞いてさ、対処法を教えて二人で特訓してたのさ」

「そ、そうか……何はともあれミス・ヴァリエール、おめでとう。わしも嬉しいぞい。」

「あ、ありがとうございます！」

「んでよ、爺さん、これからルイズの初魔法成功を祝って街にでも繰り出してばあ／＼とやりたいんだけどさ」

「そうじゃの、これはお祝いせねばならんの、ほっほっほっ」

「そうそう、だからさ、爺さんとコルベール先生にも参加して貰おうかと思ってさ」

「そうじゃのう、とはいえ今から街に行くとおれじゃし、マルトーに頼んで祝いの料理を作っても貰おうかの」

「あ、それなら俺もいい酒を出すわ」

「ほほ、これは楽しくなりそうじゃの、では夕食の際に今日はここへ来なさい。マルトーにはわしから頼もう、ああ費用はわしが持つからの。」

「いいのか？」

「勿論じゃ、可愛い生徒のためじゃからの」

「流石爺さん、話せるな」

「ほっほっほっ」

その後はもう大騒ぎだ。

話を聞きつけたコルベール先生がすっ飛んできて、もう大喜び。

ルイズもまた泣き出してしまって、もう宥めるのに苦労したわ。



でも、ほんとよかったと思うぜ。

これが第一歩ではあるけど、あの感覚さえ掴んでおけば他のコモンマジックを使うのは応用で出来るはず。

系統魔法については、ルイズの体質上使えないが、何れは虚無に覚醒出来るから問題無い。

今の段階では確実にコモンマジックを扱えるようにするのが先決だ。

こりゃ今後の訓練にも熱が入るってもんだぜ！

「じゃあ、爺さん、俺達は一度戻るよ。夕食の時間になったらまた来るぜ」

「うむ、マルトーにはとびっきりの料理を用意するように頼んでおくぞい」

「ああ、頼むぜ、じゃな」

### 《ルイズの部屋》

いやしつかし、なんていうか興奮冷めやらぬとはこの事だな。ルイズもなんだか、そわそわしているしな。

「いや〜こんなに嬉しい気分になったの久しぶりだわ」

「私もよ、だつてやっと念願だった魔法が出来たんだもの、これもタケルのおかげよね」

「何、俺はきつかけに過ぎないって。ルイズの頑張りがあったればこそだ。」

「えへへ」

「あ、そうだルイズ、せっかくだしご家族にも手紙で伝えておきな  
つて」

「そ、そうね！ きつとお父様とお母様とお姉様達もお喜びになる  
わ」

「うんうん」

「手紙にはタケルの事も書いておきたいけど、いいかしら？」

「ああ、構わないぜ、出身とかも書いていいぞ」

「ありがとう」

これでヴァリエール家にも渡りが付く。

まあ、きつとあの家族の事だ、一家総出でお祝いするだろう。

……

……

その後、ルイズと話し合い、これ以降も特訓は続ける事とした。  
特訓の主な内容は、コモンマジックに絞り、安定して使えるよう  
にする事。

そして、より精密なコントロールを身に付ける事。

これらを目標として特訓を続ける事に決定。

コモンマジックも使いようによっては、結構便利だ。

<念力>だって、ただ物を動かす為のものじゃない。

何せ、生物には使えないなんて前提は無いからな。

<念力>で相手の首をねじ上げればそれだけでも戦いには勝てる。

それに、〈念力〉を板状のものに掛けてそれに乗れば……空中版スノボの完成だわ。

そうすりゃ、飛行フライが使えずとも空を飛べる。

まあ、これは結構コントロールが難しいだろうからまだルイズには厳しいかもしれないが、練習さえ重ねれば絶対に出来るはずだ。

こりゃ楽しくなってきたな。

それと、ルイズの特訓もだが俺も訓練はしておかないと。剣術と格闘術もそうだし、何より魔法の方も訓練しないと。

幾らチート能力とはいえ、何もしなければ衰えてしまう。

まあ、ルイズの方も一段落着いたし、俺も自分の訓練を始めるとしよう。

### 《学院長室》

夕食の時間となり、俺、ルイズ、キュルケ、タバサ、爺さん、コルベール先生が一同に介した。

目の前には、今まで見た事も無い様な料理が並んでいる。

うへ、爺さんかなり奮発したみたいだな。

こりゃ美味そうだな。

「うほ、いい料理だな」

「うむ、マルトーも腕を振るつたと言っておったからの。さて、皆も知ってる通り今日の集まりはミス・ヴァリエールの初魔法成功を祝しての集まりじゃ。遠慮はいらんぞ、好きなだけ食べてくれ。」

「と、その前にルイズから一言貰うか？」  
「へ？」

「ごういう時は、主賓が挨拶するもんなんだよ。ほれ、頑張れ」  
「えと……きよ、今日は私の為に集まってくれてありがとう。特に今回の成功のきっかけになってくれたタケルには……その、感謝してる。あ、ありがと……。」

うほ、いいデレルイズ、やらないか？  
て、またこのネタかい！

いやはや、やっぱデレ期のルイズは可愛いのがう。  
うん、お持ち帰りしたい！

「照れやがつて可愛いぞこんちくしょう！」

「ちよ、ちよっと、タケル！」

「いいじゃねえか、ハグさせる！」

「も、もうー！」

「ほっほっほっ。仲がええのう。」

「ほんとな、何だか兄妹みたいだわ」

「それでは乾杯しようかの、皆グラスは持ったな。では乾杯じゃ！」

「」「」「」「乾杯」「」「」

その後は飲めや歌えの大騒ぎ。

コルベール先生と、技術的な話で盛り上がり、爺さんとはエロ話で盛り上がる。

ルイズの方はと言えば、キュルケとなんだか盛り上がってるし、キュルケがそれにタバサを巻き込んでこれまた大盛り上がり。

もう收拾付かなくなってきたが、今日くらいは別にいいだろう、なんせ目出度い日だからな！

「いや〜しつかしほんと目出度いわ」  
「そうじゃのう、わしも教師の端くれとして嬉しい限りじゃわい」  
「ええ、そうですな」  
「まあ、これでルイズも自信を取り戻すだろうさ」  
「うむ、とはいえまだスタートラインじゃからの」  
「ああ、訓練は続けるよ。既に次の目標も立ててるしな。」  
「ほう、それはそれは……熱心な事じゃのう」  
「一応使い魔だしな」

使い魔だからってのもある。  
ただ、それだけじゃないけど。

ルイズもからかっていると面白いし、何よりもあの子は根は素直でいい子だ。

そんな子を放置するのは流石に忍びないからな。

「ヴァリエールもいい使い魔を手に入れたわよねえ。私も欲しいくらいよ。」

「タケルはあげないわよ」

「ふふ、でも女としての勝負ならどうかしらね」

「ふふん、今はまだあれだけど、私だって成長するんだから。タケルから豊胸と美肌の為の体操教わったもの。実際にもう効果が出始めてるのよ。」

「美肌?! 何よそれ、教えなさいよ!」

「ふふん、教えてあげない」

「ちよつと、ヴァリエール!」

「……私も彼には興味がある」

「あら、珍しいわね、タバサがそんな事を言うなんて」

「……二系統のスクウェアなんて存在は滅多に聞いた事が無い」

「タケルが言うには、火と水もらしいわよ」

「うっそお、本当なの？」

「うん、それに剣術と格闘術もやってるって。後、医学もやってるらしいわ。」

「随分と多才なのね、ミスタ・クサナギって」

「……」

何だかあつちはあつちで随分と盛り上がったるな。

しかも、ルイズの奴、俺の事あんま言わないで欲しいんだけどね。

特に医学関係をタバサに教えるのは今の段階では勘弁して欲しいが……まあ、何れバレルだろうしいつか。

多分その内、タバサ側から接触して来るだろうな。

母親治して欲しいってさ。

まあ、タバサの母親を治すのは勿論構わない。

だけど、治す前に色々やらないといけない事がある。

オルレ안의屋敷からの逃走経路の確保やら、滞在先の確保、それに生活資金。

そういった諸々の問題を解決しない事には、迂闊に手は出せない。しかも、タバサも母親もあのガリア王家の象徴とも言える青い髪をしているからなあ。

フェイスエンジが何か使って誤魔化さないと、それこそガリア王家と戦争する事にもなりかねん。

だもんだから、タバサの母親の件については慎重にやらなければな。

「ねえ、ミスタ・クサナギ」

「ん？ どしたキウルケ？」

「ヴァリエールが言つてた体操、私にも教えてくれないかしら」

「別に構わないぜ」

「ちよつと、タケル！」

「別にいいじゃねえか、隠すようなもんでもないだろ」

「それはそうだけど……」

「んじゃやり方だけだな………という方法だ」

「へ〜随分珍しいやり方ね」

「まあな、俺が考えたもんだし。ああそれと、他の奴には教えるなよ、一々聞かれるの面倒だからさ。」

「ええ、わかつたわ」

「まあ、効果が現れるには早い奴で一週間、遅い奴だと二週間程度かな。こればかりは個人差だからな。」

「そうなのね」

まあ、体質的な面もあるからな、一概には言えないんだけど。

キウルケのように、元々素質があるなら多分すぐ効果は出るだろう。

美肌については、わからんけど。

とはいえ、肌の質はいいみたいだからねえ、確実に効果は出るだろう。

「にしても、ミスタ・クサナギは多才よね」

「そうかね」

「そうよ、だって四系統全部スクウェアなんて普通あり得ないわよ」

「まあ、要はやり方次第って事さ」

「……クイクイ」

「ん？ どしたタバサ？」

「私も魔法を教えて欲しい」

「出来れば私も教えて欲しいわね」

「ふむ、別に構わんが。いいだろルイズ。」

「……しょうがないわね、いいわよ。でも、私の特訓に手抜かないですよ。」

「わあってるって。メインはルイズになるがそれでいいか？」

「ええ、構わないわ」

「……」

「なら、明日からの特訓の時に一緒にやるか」

「お願いね」

「よろしく」

「おう」

宴も酣の頃を過ぎ、今日の祝いの席はお開きとなった。

いやはや、楽しかったぜ。

最後の方は、皆酔っ払ってしまっ……特にルイズとタバサは

酒はあんまり強くないのか、既に寝息を立てている。

ので、ルイズとタバサを運んでいる最中だ。

「こうして寝顔見ると、両方とも可愛いんだけどねえ」

「ふふ、そうね」

「と、タバサの部屋はここか、んじゃ後任していいか？」

「ええ」

「ほいじゃ、また明日な」

「ああ、ミスタ・クサナギ」

「ん？」

「明日からよろしくお願いね、ふふ」

「おう」



しっかし、こうしてるとほんとルイズは妹みたいだな。  
全くだらしない顔して寝やがってもう……やれやれだぜ。

さてと、ルイズ寝かしつけたら俺も一風呂浴びてくるかね。  
やっぱり酒飲んだ後の風呂はまた格別だからな。

## 《風呂場》

「さてと、一風呂浴びるかね」

「ミスタ・クサナギ」

「お、コルベール先生じゃねえか、どうしたんだ」

「いえ、私もそろそろ風呂に行こうかとね」

「なら一緒にどうだい、たまには男同士裸の付き合いってのもいい  
だろ」

「そうですね、ではご一緒させていただきますよう」

「おう、俺の自慢の風呂だぜ、楽しんでくれ」

そうして偶然にもコルベール先生と風呂に入る事になった。

ちなみに俺の作った風呂は、十人位なら余裕で入れるほど広い。

それに屋根の部分はガラス張りにしてあるので、夜空を見ながら  
というなんとも風情ある風呂なのだ。

ちなみに、コルベール先生の研究室からの匂いについてはちゃん  
と対策済みだ。

せつかくいい気分なのに、妙な匂いが入ってきたらたまらん。  
いい気分が壊れちゃうよ。

「どうだい、俺の作った風呂は」

「いいですなあ、心が和みますぞ」

「だよなあ」

「ところで、東方のメイジであるミスタ・クサナギに一つお聞きしたい事がありましたな」

「何だい？」

「魔法をどう思われますかな」

「魔法をどう思うかか……また難しい質問だな」

「ええ……」

「俺が思うに、魔法ってな人の役に立てるべきだな。せつかくこんな便利な力があるんだから、やっぱり生活を豊かにする為に使うべきだろ。勿論それは貴族の為だけじゃなく、広く『国民』の為に使うべきだと思うぜ。やっぱり皆同じ大地に生きる同じ『人間』なんだからな。貴族も平民も変わりやしないさ。」

「……そう、ですな。ミスタ・クサナギはお若いのに素晴らしいお考えをお持ちのようですな。我々トリステインの貴族では、そのような考えは出来ませんな。」

「まあ、何千年も支配階級にいれば、そうなるのも仕方ないかもしれない。でもよ、やっぱり誰かが変えなきゃいけないんだよ。でないと何時まで経ってもハルケギニアは進歩しない。」

「仰る通りですな、いやはや、何れは貴方の国を見てみたいものです」

「そうだな、暇出来たら行こうぜ。コルベール先生ならきっと人々の役に立つだろうさ。」

「はは、そうありたいものですな」

《一方その頃のルイズは》

「う……ううん……あ、そっか、私寝ちゃったんだっけ」

少し騒ぎすぎたかしらね。

でも、皆も喜んでくれて本当に嬉しかったわ。

こんなに嬉しい気持ちになったのって、何時以来かしらね。

ほんと、タケルには感謝しないと。

「そっだ、お父様達にお手紙書かなきゃ」

え〜と……。

【お父様、お母様、お姉様達、お元気ですか。ルイズは元気です。】

ん〜と……。

【今回は是非お知らせしたい事があって、こうしてお手紙を出す事にいたしました。】

タケルの事もちゃんと書かないといけないわね。

東方出身の事も書いていって言ってたし。

【使い魔召喚の時に、私は東方出身のメイジを召喚しました。名前は『クサナギタケル』です。タケル自身は四系統全てを使いこなす程のメイジです。しかも、医療関係についても凄い知識を持っているみたいです。】

次に魔法使えた事を書こうかしら。

きつとお父様達も喜んでくれるわ。

【そのタケルが私の魔法が爆発するという事を聞いたところ、その原因を掴んでくれて、魔法を成功させる為の訓練をしてくれました。そのおかげで訓練から一週間した今日、遂に魔法を成功させる事が出来ました。】

後、お祝いしてくれた事も書かなきゃ。

【タケルは自分の事のように喜んでくれて、私の魔法成功をお祝いしようと友達や先生を誘ってくれて……皆でお祝いしてくれました。凄く嬉しかったです。つい嬉しくて泣いちゃいましたけど。】

それと、タケルが私に才能があるって言ってくれてる事も書いておこう。

【タケルは私には凄い才能があると言ってくれています。何れは凄いメイジになれるってずっと励ましてくれています。私ももっと魔法が使えるようになるために頑張ります。お父様達もお体には気をつけてくださいね。ルイズより。】

さてと、後はこれを伝書梟で飛ばしてと……皆喜んでくれるといいなあ。

さ、今日はもう寝よう、明日も頑張らなきゃね。

## 第五話（前書き）

5 / 26

ルイズとタケルの、学院の休みについての話の部分を少し修正。  
時期的に夏休みはおかしいので、独自の休みを入れました。

## 第五話

現在ルイズは〈念力〉についてはほぼマスターしたようなので、より繊細な精神力のコントロール訓練に入っている。

訓練内容は、〈念力〉を使いド二工銅貨を立たせる訓練だ。

実はこれ、結構難しい。

手でやるだけでもバランスが難しいのに、それを〈念力〉で行う場合非常に繊細な精神力のコントロールが必要になる。

しかも、集中しないとすぐに倒れてしまうので、集中力の訓練にも繋がるのだ。

ルイズの欠点は短気ですぐに頭に血が昇る事だからな。

その辺りの欠点を克服する為、このようなチマチマした作業を訓練として取り入れている。

同時に〈ライト〉の精神力にも着手した。

この精神力は、光源の強さ、持続時間、熱量を調節する事が出来る。

ので、まずは持続時間を秒単位で調節する訓練を行っている。

これもまた、精神力の精密コントロールの訓練だ。

これと〈念力〉の方の訓練が出来るようになれば、精神力のコントロールは相当なものになるだろう。

とはいえ、これらは基本中の基本の訓練だから何処まで行っても終わりは無いんだがね。

何れは毎日の日課とする為のメニューも作成せねばなるまい。

ルイズだけでなく俺自身の訓練も開始している。

訓練内容は幾つかあり、〈格闘術の型の訓練〉、〈演舞〉、〈剣術の型〉などなど。

勿論魔法の方も訓練している。

訓練メニューは魔法の同時高速使用とルーンを省略する訓練だ。これが完璧になれば、実戦でかなり役に立つ。

それと本日よりキュルケとタバサも特訓に参加する事になった。予定している内容は、キュルケは精神力の無駄を無くす事、タバサはルーンの高速詠唱の訓練。

これはそれぞれの特性に合わせた訓練だ。

キュルケはトライアングルクラスで非常に火と相性がいいが、どうにも精神力がだだ漏れ状態なんだよな。

なので、その漏れている精神力を集め圧縮する事で、より大きい威力にしようという狙いだ。

タバサの訓練法は一種の早口言葉だ。

早口言葉を淀みなく言えれば、ルーンを高速で詠唱する事が出来る。

そうなれば、詠唱の長いスペルでも時間を短縮出来るからな。

「お、キュルケとタバサ、来たか」

「こんにちわ、ミスタ・クサナギ」

「……こんにちわ」

早速訓練を開始する為、それぞれに訓練メニューを説明。

監督する為、俺も偏在を使い四人に分かれる。

本体の俺は自分の訓練を、残り三人の偏在はそれぞれの訓練を監督する事にした。

こういう時に偏在は便利だわな。

## 《ルイズの訓練風景》

「あゝもう！ 上手くないわねえ！」  
「ほらほら、もう短気起こしてどうすんだよ」  
「だって〜」  
「ルイズの欠点はその短気だ」  
「うっ……わかってるわよう……」  
「ならぐだぐだ言わずに訓練するっ！」  
「はあ〜い」

《キュルケの訓練風景》

「ほら、また精神力が無駄に漏れてるぞ」  
「そ、そんな事言っても……難しいわよこれ……」  
「もっと精神力を圧縮するんだよ、そうすれば同じ魔法でも格段に威力が上がる」  
「何かコツとかないの？」  
「自分にあつた圧縮のイメージを持つ事だ」  
「イメージね……」  
「例えばさ、食い物とかでもいいんだよ。俺は練り物をこり固めるイメージだし。」  
「……なるほど」  
「まあ、自分がイメージしやすい物を見つける事だ」  
「わかつたわ」

《タバサの訓練風景》

「最初の早口はこれな【青巻紙赤巻紙黄巻紙】」



「青巻紙赤巻紙黄みゃき……痛い」

「舌嚙んだか……どれみせてみな」

「あつ……」

「まあ、大丈夫だろ、腫れてる様子もないしな」

「……役に立つの、これ？」

「ああ、早口言葉を淀みなく言えるようになれば、ルーンの高速詠唱が出来る」

「……」

「そうならば、威力は高くてもルーンが長すぎて使いにくい魔法でも実戦で使えるようになる」

「……わかった」

「まあ、焦らず頑張ろう」

「……コク」

こんな感じで訓練をしている。

ちなみに本体の俺は、太極拳の型の訓練中だ。

貰った能力のおかげか、体自体に染みこんでいるようで淀みなく型が出来る。

とはいえ、もっと頭に叩き込まなきゃいけないから反復練習あるのみだ。

《一方その頃ルイズの実家ヴァリエール家では》

「カリーヌ、カリーヌはおるか！」

「どうなされたのあなた、大声をだしてはしたないですよ」

「ルイズから手紙が届いたのだ！」

「そんなに慌てる事でもないでしょうに」

「いいから、読んでくれ！」

夫から渡された手紙を読むと、あの子が魔法を成功させたと書か

れていた……

私わたくしや夫、それに多くのメイジが教えても一向に成功する事のなか  
つたあの子が魔法を……

それに使い魔に人間を、しかも東方のメイジを喚よびだび出したなんて

……あの子も規格外ですわね。

それにしてもあの子が魔法を……なんて喜ばしい事なのでしょう

……

「やはり、烈風と謳われた君の血を最も濃く継いでいるのはルイズ  
だったのだな！」

「そう、ですわね……」

ああ、これこそ始祖ブリミルのお導きなのでしょうか。

「しかし、使い魔として東方のメイジを喚よびだび出すとはな」

「ええ、しかもその方のおかげで魔法が成功したようですわね」

「うむ、これはヴァリエール家としてその方に礼を尽くさねばなる  
まい」

「そうですわね、娘を救っていただいたのに何もしないようでは貴  
族として恥ですわ」

「全くその通りだ」

それにしても東方のメイジですか……一度手合わせしてみたいも  
のですわね。

「しかし、いきなりお呼び出しするのも失礼だな」

「ええ、そうですわね、ならば先にルイズに手紙を送り私わたくしが使者と  
して参りますわ」

「ふむ、そうだな」

「勿論その方のご都合に合わせておいたしましょう」

「当然だな、その方の都合も考えずにお呼び出しするのは失礼だからな」

「二週間後に学院は長期の休みに入るはずですわ、その時なら恐らく大丈夫でしょうから」

「うむ、ならば休みに合わせて準備を進めるとしよう」

「わかりましたわ、あなた」

「それと、今日は祝いだ、皆を集めて祝杯を挙げよう！」

「あらあなた、お仕事はどうされるのですか？」

「今日位はよいではないか、目出度い日なのだから！」

「いけませんわよ、私もお手伝いいたしますから、ちゃんと終わらせましょう」

「相変わらず君は厳しいな、よし、気合を入れて仕事に掛かろう」  
「ええ」

ふふ、今日は本当に目出度い日になりますわね。

私達わたくしヴァリエール家にとっては記念日ですわ。

きっと、他の娘達も喜ぶ事でしょうね。

《場面は主人公達へ》

「そついやルイズ、ご家族に手紙は出したのか？」

「うん、昨日の夜出しておいたわ」

「そか……て、あの酔っ払った状態で書いたのか、変な事書いてないだろうな」

「大丈夫よ……多分……」

「おいおい、不安にさせないでくれよ」

一体全体何書いたんだルイズは……下手な事書かれるとやばそうな気がするんだが。

まさかとは思うが、ルイズのおかんが出てくるとか無いだろうな。

流石にチート能力とはいえ、烈風との直接対決とかは嫌だぞ。

「あ、そうだ、タケル」

「ん？」

「後二週間したら学院休みに入るわよ」

「そうなのか、時期的に夏休みかね」

「うん、というよりブリミル教で定められてるのよ」

「そうなんか」

てことはあれか、夏休みとかつて訳じゃないのか。

それもそうか、春の召喚の儀式だったんだし夏な訳ないか。

まあ、春といっても結構暑いんだよな。

やっぱり気候は日本とは違うね。

しかし、よく考えてみるとすぐさま夏休みが来るっていうのにそんなに休みばっか入れて大丈夫なんか？

元日本人としては、どうも不安でしょうがないんだがな。

そういや、そろそろ日用品とかも買いに行かないとなあ。

何せ着の身着のままの状態だから、服や日用品も買い揃えないと。それにせっかくだから序にデルフも買わないと。

「うん、そろそろ服とか日用品とか買いに行かないとなあ」

「そうよね、着の身着のままだもんね」

「ああ、そうなんだよな」

「でも、今から行くと帰りが夜になるわよ」

「それなら大丈夫だろ、白帝の能力使えば直ぐだ」

「あ、そっか」

「行きだけ馬車で行けばいいだろうしな」

「そうね、なら準備して行きましょうか」

……

こうして街に繰り出す事になったんだが……案の定というかなんと  
いうかキルケとタバサがいる訳でして。

ま、人数多い方が面白いからいつか。

### 《ブルドンネ街》

へ〜ここがトリステインの城下町か……建物自体は綺麗なんだけどそれ以外がなあ。

雑然としている上に、路地に入れば汚物が散乱している始末。

これじゃ疫病発生してもおかしくないぞ。

下手すりゃペストとか発生しそうだな。

「先ず何処に行くの？」

「そだな、先ずは金を換金出来るところかな」

「なら行政府ね、あそこに換金所があったはずよ」

「んじゃ、先ずそこに行こう。キルケとタバサもいいか？」

「ええ、いいわよ」

「……コク」

「換金したら服と日用品、それと武器だな」

「武器？」

「ああ、俺は本来は剣術もやるんだが、召喚されるとき剣を持って無くてな。それにハルケギニアの武器には興味あるしな。」

恐らくRPG的な感じだとは思っけどね。

剣や斧、槍とかが主流だろうな。

一応銃もあるみたいだけど、未だマスケット銃の段階だしあまり精度も良くないみたいだしな。

「でも、タケルの場合は剣なんて必要ないんじゃないの？」

「確かにそうなんだが魔法だけに頼ってたら、本当の戦場では生き残れないさ。だからこそ、俺は剣術や格闘術もやってる訳だしな。」

「案外タケルって慎重よね」

「戦場に一度でも立てばな、どれだけ生き残るのが大変かわかるもんだわ」

とはいえ、俺は実際には戦場に立った事は無いけどね。

しかし、何かのきっかけで魔法が使えない事だっており得るし、戦場なんて極限状態の場所じゃ一体何が起きるかわからない。

だとしたら、用心しすぎるって事は無いからな。

……

換金所で<錬金>により作った金きんを無事に換金。

純度100%だったものだから、合計で2000エキューにもなった。

結構な量を作っておいたからな、これだけあれば必要な物は全部買えるわな。

「いや〜ホクホクだな」

「いいなあ……」

「ルイズも何か欲しい物あんのか？」

「えと……編み物の道具と服とか」

「んじゃ、俺の買い物終わったら買いに行くか」

「いいの?!」

「ああ、構わんさ、どうせあぶく銭だ」

「やった」

うづん、俺ってばやっぱりルイズに甘いのかねえ。

どうも末っ子感が強くて、つつい甘やかしてしまっな。

まあ、金については金をきんをく錬金くして換金すれば何時でも手に入るからいっか。

「それと、キュルケとタバサにも飯奢るわ」

「あら、ありがと」

「……大盛り」

「ははは、わかったわかった、たらふく食いな」

その後、四人で服屋や日用雑貨の出店などを回って歩いた。

結構な量になったし、ルイズも編み物の道具や服を買ったので荷物を両手で抱えてる。

それと途中、キュルケが化粧品、タバサが本を欲しがったので買ってやってしまった。

あれだね、女に強請られると断れないな。

世の男共はこうして女に買いでいくんだらうな。

んで、細かい買い物は終わったのでいよいよ武器屋に来ている。

ここに確かデルフリンガーがいるはずなんだよな。

「ふ〜ん、これがハルケギニアの武器か……」

「貴族様、家は全うな商売しておりますぜ」

「ああ、そうじゃねえんだ、俺の趣味でな剣を見に来たのさ」

「そうですかい」

「ねえ、タケル、これなんかは？」  
「ん？」

そうしてルイズが差し出して来たのは……いかにも儀礼用といった感じの剣だ。

確かに固定化と硬化は掛かっているが、元が鈍らだから多分一〜二度ですぐ折れるな。

「流石ご婦人、お目が高いですな」

「あゝルイズ、そりゃ儀礼用の剣だ、実戦じゃ役に立たんよ」  
「そうなの？」

「ああ、それに無駄な装飾が多すぎる、ぶっちゃけいらん」  
「へ〜」

『おう、よく分かってるじゃねえか、兄ちゃん』  
「ん？」

「おい、デル公、てめえ！」

あゝデルフね、そういやあその樽の中にいるんだったな。  
んじゃ、デルフと話するとしますかね。

「ふむ、インテリジエンスソードか」

『おうよ！ 兄ちゃんかなりの使い手……て、本物のく使い手かよ！ こりやおでれーた！』

「どづい事？」

「恐らくルーンの事だろうな」

『おい兄ちゃん、俺様を買え！』

「ふむ……いいだろ、おっさん、この剣貰って行くわ、幾らだ？」

「へえ、厄介払いですから、50エキューで結構です」

「わかった、ほら」

「毎度どうも、この鞘に入れて下されば大人しくなりますんで」



「わかった」

しかし、このおっさんも剣の価値がわかってないね。  
一目見ればわかるのになあ。

まあ、インテリジェンスソードだから扱いに困るってのはあるだろうけど、50エキユーなんて格安で売るとはね。

こっちとしては儲けもんだわ。

しかし、ほんと、こうして見るとなんだかRPGの武器屋だな。

ん、あれは……あれって、プロテクターじゃないのか？

なんでこんなところにあるんだ？

「おっさん、これは？」

「へえ、何でも東方から流れてきたとかで」

「ふくん、これ幾ら？」

「20エキユーでさ、買い手がつかないもんで」

「なら、これとそこにあるナイフ二本買っわ」

「へい、毎度！」

いやはや、期せずしていい物手に入ったな。

本来なら世界扉ワールドドアで日本に行って買えばいいんだけど、その場合、金を換金するのに身分証偽造したりとか面倒な事ばかりだからな。

こっちで手に入る物は、こっちで手に入れた方が楽だわ。

何れ暇なときにでも日本に行って、武器やらなんやら必要な物を揃えられますかね。

「でもタケル、そんなポロツちいのよりもっと綺麗なの買えばいいのに」

「いや、見た目は錆びてるが、こいつなかなかの剣だ」

『兄ちゃん、剣の心得あるみたいだな』

「ああ、剣術やってるんでな、それに片刃なのも丁度いい」  
『はは、今度も使い手はかなりいい使い手みたてえだな！ よろしく頼むぜ兄ちゃん！』

「ああ、こちらこそな」

さてと、デルフも手に入れた事だし目的は果たしたな。

後は晩飯食って帰るだけか。

飯はそこらの飯屋で食べればいいだろ。

……

晩飯食って帰るだけだと思ったのだが、タバサが食べる事食べる事……本当に何処に入ってるんだあの量は。

その上ルイズとキュルケがまた喧嘩始めるもんだからもう、宿めるのに苦労した。

あの二人の喧嘩は、最近じゃ本気じゃなくてじゃれ合いみたいなもんだからそう気にする程でも無いと思うがな。

にしても、タバサは食いすぎだ。

ぶっ倒れるまで食う必要無いだろうに……少しは加減しろっての。

「全く、無理して食うから」

「……勿体無い」

「やれやれ、そんじゃ時間も時間だし帰ろうか」

「わかったわ」

「そうね」

白帝を喚び出しさくつと帰還。

流石に四人乗せるのは少々きつかったみたいで、白帝もグロツキ

「だ。  
それに荷物もあるからな、ちと無茶させ過ぎたか。  
でもまあこれで何時でも白帝で街に行ける様になつたわけだ。  
そう滅多に行くような場所じゃないだろうけど、何かと便利だろ  
うな。」

### 《ルイズの部屋》

んで、ルイズの部屋に戻つて来たのだが、なんとというかルイズが  
垂れている……お前は垂れパンダか！  
可愛いからいいけどさ。

「おいおい、寝るならちゃんと風呂入つて来いよ」  
「うう〜だつて疲れたんですもの」  
「しょうがねえなあ……」

仕方ないからキュルケに頼んで風呂入れて貰うか。  
俺も風呂入りたいたいしな。

「お、キュルケ丁度よかつた」  
「あら、どうしたの？」  
「家のルイズが風呂入るの面倒臭がつてさ、悪いけど入れてきてく  
れないか？」

「はあ……しょうがないわねえ、ほんとお子様なんだから」  
「悪いな、風呂から上がったら部屋に突っ込んでいてくれりゃいい  
からさ」

「わかつたわ、ただし貸し一つよ」  
「あいよ」

そうしてキュルケはルイズを浮遊<sup>レレテーション</sup>で運んでいった。  
つか、これじゃ丸つきりルイズのおかんじゃねえか。  
全くもう、ほんと手間掛かるんだからな、あのちびっ子は。

### 《女子風呂場》

「あ〜う〜眠いわ〜」

「せめてちゃんとお風呂入って汗流しなさいよ……………」

「だって〜」

「本当にもう……………手間が掛かる子ね……………ほら服脱ぎなさい」

「うう〜わかつたわよあ〜」

これじゃ母親じゃないの全くもう……………はあ、なんだかつい先日まではいがみ合っていたのに、今じゃこれだものね。

これもミスタ・クサナギの影響かしら……………ふふ、でも悪くはないわね。

「それにしても貴女、少し胸大きくなったんじゃない？」

「多分タケルが教えてくれた体操のせいじゃないかしら」

「やっぱり効果あるのね」

「それに、タケルがくれたシャンプーとリンスも凄いわ、枝毛が減ってるもの」

「凄いわねそれ、ちょっと貸して頂戴よ」

「……………少しだけよ」

「わかつてるわよ、全部は取らないわよ」

しかし、ミスタ・クサナギもほんと凄いわね。

こんな物まで作るなんて。  
今度私も貰おうかしら。

《変わってこちらは主人公》

そっぴや、ギーシュとの決闘イベントってどうなるんだろうなあ。  
今の状況じゃ発生しそもないんだが……

まあ、発生したとしても負けるつもりはないんだが、出来ればギ  
ーシュとは友達になりたいよな。

あいつも本音の部分じゃ悪い奴じゃないし。

それにだ、あいつが何時までもドットのままというのはどうにも  
解せない。

だって、ゴーレム七体同時操作なんて芸当やってるのに何時まで  
もドットのままというのはなあ。

多分、一皮向ければすぐさまラインに上がれると思うんだよな。

一応何かしら訓練メニュー考えておくべきかもしれないな。

さて、そろそろ上がるかね。

……

ルイズの部屋に戻って来たはいいんだが……腹出して寝てやがる

……たくもう、風邪引くだろうに……

何処までお子ちゃまなんだかね。

やれやれ、手間の掛かる妹が出来たもんだわ。

「あら、ミスタ・クサナギも戻ったのね」

「ああ、悪いなルイズの面倒見てもらって」

「いいのよ」

「しっかしまあ、ほんと手間が掛かるわ」

「クスクス……ほんとね」

「うう〜ん……暑い……」

「ああもう、また毛布を蹴飛ばして……風邪引くつてのにもう……」

「ふふ、本当に兄妹みたね」

「手間の掛かる妹だな」

「それじゃ、私も失礼するわ、また明日ね『タケル』」

「おう」

初めて名前で呼んでもらえたな。

少しは気許してくれたって事かね。

ま、いいか、明日も早いし今日はもう寝るか……おやすみ〜Z Z

Z……

## 第六話

只今ルイズは授業中。

その為、使い魔である俺は暇なのである。

暇な時間を利用して他の使い魔達と話しをしていたのだが、出る  
わ出るわ主人の悪口。

やれ腹いせにぶたれただの、やれ罵声を浴びせられただの……随  
分とまあ酷い扱い受けてる模様。

このまま使い魔達がやさぐれなきゃと心配になって来るぜ。  
ちなみに家の白帝は、基本放任主義なので無理難題を押し付けた  
りするような事はしない。

まあ、そのせいか結構放浪癖があるみたいで、気が付いたらいな  
い事が多い。

呼べばちゃんと来るから余り気にはいないがね。

しかし、使ってみて改めて思ったがヴィンダールヴの能力は案外  
便利だ。

何もしなくても幻獣や動物と普通に話せるんだから。  
こりゃ色々と使い道がありそうだ。

さてと、それじゃせっかくデルフを入手した事だし剣術の型でも  
練習しておきますかね。

デルフの形状からすると、西洋剣術よりも日本の剣術の方が合っ  
てるだろう。

元日本人の俺としてもそのの方が嬉しいのだがな。

『おい相棒』

「ん？」

『お前さん、随分変わった剣技を使うな』

「ああ、これは東方にある流派だからな」

『そついや、東方出身なんだったな』

「ああ」

型を確認しながら素振りを繰り返す。

試してみたが、やっぱりガンダールヴの能力もあつてか非常に軽い。

まあ、元々肉体的にはバグキャラの肉体だ。

デルフ程度の重さなら別にどうって事ないわな。

しかもだ、例の<生命力>がネギまで言うところの<気>に該当する。

なので<気>での肉体強化も可能。

試しに肉体強化した状態で、<発勁>を打ち込んでみたら……練習用に<錬金>の魔法で作った岩が木っ端微塵に砕け散ってしまった。

威力あり過ぎだわ……人間相手に放つたら確実に相手は死ぬ。

潰れたトマトなんて見たくはないから、使用する場合は注意しないと。

「ふう……」

『しっかし相棒は教える事がほとんどねえな』

「そりゃな、結構長い間剣術やってるしさ」

『格闘もやってんだろ？』

「ああ、一応な。戦闘中に武器無くなつたから戦えないじゃ役立た



ずだしな」

『はは、ちげえねえな!』

しかし、ルイズの授業中はほんと暇だ、早めに何か仕事貰わないとこのままじゃニートになっちまう。

流石にこの年でニートは不味いからなあ。

恥ずかしいってよりも、人間としてどうなのよって感じだし。

「さてと、そろそろルイズの授業も終わる頃だな」

『お、迎えに行くのかい』

「ああ、じゃないと拗ねるからな」

『はは、違うないな!』

……

昼休みという事もあり、生徒は思い思いに過ごしている。

俺達と言えば、何時も通りのメンバー。

なんだか最近、俺とルイズに加えキュルケとタバサの四人でいる事が多くなってきている。

なんでだろうねえ、まあ友達が増えるのは俺としても嬉しいけど。

「なんか、このメンバーでいる事が多いな最近」

「そういえばそうね」

「いいじゃない、面白いし」

「……コク」

何がどう面白いのか少々疑問ではあるが……まあ突っ込むだけ野暮ってもんかね。

しかし、こうして見ると案外と生徒は多いんだな。  
どっかで見えた感じのある顔もあるんだけど、よく覚えてない。  
ごめんよ、モブキャラの皆さん！

「やあ、麗しきバラよ」

突然現れたこのキザな台詞を放つ男は……あ〜やつぱりギーシュか。  
しつつかし、原作でも登場当初は半端なくキザだったけど……流石  
にこれは無いわあ。

よく恥ずかしげも無くそんな台詞吐けるな……痛すぎるだろ。  
しかも格好がまた……ププツ

「何か用かしら」

「ああ、ボクが用があるのは君ではないよ<ゼロのルイズ>  
「……なんですって！」

あちゃ〜いきなりルイズが切れたな。

ほんともう、沸点低いんだから……しょうがねえなあ。  
もつと徹底的に短気を治す訓練しないと駄目だなこりゃ。

「では、私わたくしに用かしら、ミスタ・グラモン」

「そうさ、ボクが用事があるのは君さ、ミス・ツエルプストー」  
「それで、どういった御用時ですか？」

「ああ、君のような美しいバラがそのような男と共にいるのは相応  
しくないと思ひましてね。こうしてお誘いに参った次第ですよ。」

つまりは、俺に邪魔だからどっか行けって事か。

確かにギーシュは顔だけはイケメンだけどその他諸々が、ねえ。  
つか、自信過剰もここまで来ればある意味尊敬出来るわ。

「そ、わたくしだけ私は貴方みたいな男に興味ないの、タケルみたいに実  
力のある男性が好みなのよ、ふふ」

そこで俺を引き合いに出しますかキユルケさんよ。

まあ、実力があるって認められてるのは嬉しいんだけど、出来れ  
ば放置しておいてくれるとありがたいんだよな。

ほら見る、ギーシュが顔真っ赤にしてるじゃないか。

こりゃ確実に難癖付けて来るぞ。

ああ、面倒臭い……

「……ボクの誘いを断り、こんなどこの馬の骨ともしれない男を選  
ぶのかね」

「ええそうよ、少なくとも貴方よりずっと魅力的なもの」

「……！！！！」

あゝこりゃ駄目だ、確実に決闘イベントフラグが立ったな。

はあ、出来れば決闘イベントなんて面倒臭い事の上無いから回  
避したかったけど……て、よく考えるとこの流れおかしくねえか？

確かギーシュとの決闘イベントってシエスタが香水拾った後のい  
ざざが原因で起きるんだよな？

今回全くと行っていい程に、シエスタ絡んで来てないんだけど……  
……どうなってるんだ？

明らかに原作とは流れが違うが……これも俺がいる事による弊害  
ってやつなのか？。

だとすると、今後のイベントも時期のずれとか色々と問題が起き  
そうだなあ。

ああ、面倒臭い……

「……そうか、ならば……おい……その男」

「あん？」

「このボクと決闘して貰おう」

「は？ なんでそうなるんだよ、面倒臭いからパス」

「ほう、逃げるのかね」

「つか、お前じゃ相手にならないって。お前はドット、俺スクウエア、さてどっちが有利だ？」

ドットとスクウエアじゃ、言ってみれば五歳児が大人に喧嘩売るようなもんだ。

まあ、あの伝説の五歳児なら勝てそうな気もするけど……

とにかくだ、ドットとスクウエアじゃ魔法の威力も天と地ほどの違いもある。

しかもだ、俺は肉体的にはバグキャラな訳で、魔法使わなくても肉体だけでも十分に勝てる

故にギーシュと決闘なんぞする理由が全く無い……つか、するだけ無駄なんだよな。

「ふん、例えスクウエアだろうと、ボクが負けるはずがない。このグラモン家四男、ギーシュ・ド・グラモンが！」

こいつ、この時期ってこんなにもバカなのか？

一体どこからその自信というか、当てのない根拠が出てくるのか……

幾らボンボンとはいえ、流石にドットとスクウエアの違い位はわかるだろうに。

これもあれかね、家訓の『命を惜しむな名を惜しめ』に毒された結果かね。

今のままだとギーシュは将来確実に戦場で命を落とすな。

「一体全体どこからその根拠が出てくるのやら……」

「それにだ、<ゼロのルイズ>の使い魔など、所詮は程度の低い使

「い魔だ」

「ああ、ルイズにスイッチ入れやがったな……こりゃ完璧にルイズが切れるな。」

「はあ、ほんと、面倒臭いやっちゃんなあ……」

「……タケル」

「あ〜なんとなくわかるが……何だルイズ」

「私からの命令よ、構わないから徹底的にやっちゃんなさいっ！」「……やっぱそうなる訳ね……」

「はあ、しょうがねえか、一応使い魔である以上は主の命令には従わないとな。」

「とはいえどうしたもんかなあ。」

「剣術使うのもあれだし格闘オンリーでいいか。」

「魔法使ったら、すぐケリが着いてしまうからな。」

「それだと多分納得しないだろうし。」

「一応ハンデありって事で、俺は魔法を使わずにやるわ。いいだろルイズ？」

「そ、そうね、それ位はね……」

「……君はボクをバカにしているのかね」

「いんや、純粋な実力差だ、はつきり言っただれでもまだ足りない位だ」

「いいだろう、後悔するなよ！」

「あらら、行っちゃったよ。」

「しかしどうすっかなあ、本気でやる訳にもいかないし、かといつて手を抜きすぎるのもルイズが納得しないだろうし……一回だけ技>使うかね。」

ああ、そうだ、せっかくだし今回の決闘を利用してルイズを小バカにしているガキ共を黙らせるか。  
序にギーシュのこれからの為にも、あいつの慢心と誇りとやらを徹底的にぶち壊すとしましようかね。

《ヴェストリの広場中央》

さてはて、広場中央にやって来たが、なんだかやたらとギャラリイがいるな。

皆揃って暇なのかねえ。

「逃げずに来たか……」

「逃げる理由が無い」

「……減らず口を」

普通に考えれば、ドットとスクウェアじゃ勝負にならん事位すぐわかるもんだが……全く、誇り高いのもいいけど自分の実力をちゃんと理解しないと駄目だろうになあ。

このままだと色々不味いし、ここはギーシュの目を覚ましてやらないとな。  
今後の為にも。

「では、一応作法に則り名乗りを上げよう、ボクは『青銅のギーシュ』。ワルキューレを持ってお相手させていただきます」

ギーシュがバラの造花を一振りすると、地面からゴーレムが七体出現。

原作通り、全部青銅製か……しかし、どれもほぼ同じ造形だな。

それに、ワルキューレなんて名前の割りに造形が甘いな。もつとこう、拘るべき部分てのがあるだろうにな。

「草薙猛、二つ名は無い。今回は格闘で相手させて貰う。」

丹田に力を込め、腹を胎に変える。

すると、体中に力が湧き上がるのを感じる。

<気>でもって肉体強化をした今の状態ならば、青銅製のゴーレム程度は余裕で破壊出来る。

とはいえ間違ってもギーシュに当てない様にしないと。確実に殺してしまうからな。

「ねえ、ヴァリエール、彼、本当に大丈夫なの？」

「タケルがやれるって言ったなら大丈夫よ」

『問題ねえさ、相棒とあの坊やじゃ天と地の実力差だ』

「……ミスタ・グラモンじゃ勝てない」

なんかギーシュもボロクソに言われてるな。

まあ、今のギーシュじゃ仕方ないか。

あの妙な自信と慢心が消えれば、きつといい奴になるだろうし確実に成長出来ると思うが。

まあ、ギーシュの立身出世の為にもここは心を鬼にしてボコリますかね。

「では、ミス、合図をしてくれるかね」

「しょうがないわね……それじゃ……始め！」

合図と同時にゴーレム二体が迫る。

とりあえず、一番近い所にいる一体を突きで破壊！

続けて二体目を回し蹴りを使い、胴体を真っ二つにして破壊。

当然の如くというか、こちら側にダメージは無い。  
しかも、<心眼>が発動していてゴーレムの破碎ポイントがわかるので物凄く楽に破壊出来る。

「……素手で青銅のゴーレムを砕いたわね」

「……ほ、ほら、大丈夫だって言ったじゃない」

「……凄い」

「……バ、バカな……青銅製のゴーレムを……素手で……」  
「だから言ったる、ハンデだってな」

まあ、素手で青銅製のゴーレムを砕く人間なんぞ会った事無いだろうからな、腰が引けるのも仕方ないか。

でも、自分から売った喧嘩なんだからもう少し頑張らなきゃ駄目だろう。

じゃないと愛しのモンモンにも嫌われちまうぞ。

さて、時間も勿体無いしさっさと残りのゴーレムも破壊するかね。

「んじゃ、続けていくぞ」

「くっ！ い、いけえ、ワルキューレ！」

今度は五体同時か……もう少し困むとかやりやいいのに真正面から突っ込ませるなよ。

こりゃゴーレム操作だけじゃなくて、兵の動かし方とかも勉強させないと駄目だな。

せっかく実家が軍閥の家系なんだから、もっと軍略系の勉強しときゃいいのにな。

「ほい！ あらよつと！ ほいさ！ あ、どっいー！」

ゴーレム四体を破壊。



にしてもやってみて改めて実感したが、目もラカンと同じ構造してる為なのかゴーレムの動きが止まって見える。

いやはや、流石はバグキャラの代名詞ラカンだ、凄いもんだ。

「最後の一体は<技>で破壊しようか……いくぞ！ <斧刃脚>！」

最後の一体は派手に<技>を使ってぶっ壊したんだが……少々やりすぎてしまった。

危うくゴーレム突き抜けてギーシュに当たるところだった。

あのまま当たってたら、ギーシュは確実に死んでたな。

つか、ただの<斧刃脚>で衝撃波が発生するなんてどんだけだよ。バグキャラここに極まれりって感じた。

にしても少し調子に乗りすぎたな、ギーシュも泡吹いて気絶してるし……反省反省。

「どうやら相手は気絶したみたいだな」

「ふふ、この決闘、タケルの勝ちね」

「そうね、まあ私にはわかっていただけ」

「……面白かった」

ルイズ達には随分と好評みたいだな。

周りの連中も静まり返ってるな。

丁度いい、今のタイミングで周りの連中に釘さすか。

今後同じように喧嘩売られても面倒なだけだし。

「それと、一応念の為周りの連中に言っておくが、俺の主をあんまりバカにすると温厚な俺も終いにはキレルからな。そんなときや一切の手加減無しにぶちのめすからな。」

ほんの少しばかり<気>を解放して睨みつけてやったら完璧にビ  
ビっちまったようだ。

我先にと蜘蛛の子を散らすように逃げていきやがった。

しかも決闘を煽ってた連中まで逃げ出してるし……ギーシュは放  
置かよ、哀れだな、もっと友達は選ばないと駄目だぜ。

「にしても、最後の凄かったわね」

「ああ、ありやく技だ。つっても少しやり過ぎた気もするがな。」

「……確かにそうね、当たってたらただじゃ済まなかったわね」

「……確実に死ぬ」

まあ、確かに<気>で強化した技が当たったら何も防御の術が無  
い普通の人間じゃ死ぬわな。

基本的にメイジは肉体を鍛えていないのが多いからまず耐えられ  
ないだろう。

俺から言わせれば、<魔法>だけ使っても意味は無いんだけどね。

「それはそうと、あいつどうするよ？」

「ほっといていいんじゃないの」

「そうね、関わるだけ時間の無駄よ」

「……おなかすいた」

なんか三者三様の意見だな……タバサだけ明らかに違うんだけど。

つか、三人ともある意味非常に辛辣なご意見ですな。

流石にこのままじゃ可愛そうだし、何より今後の為にもフォロー  
だけはしておかないとな。

「お〜い、起きろつてばよ」

「……う、うう……」

「目が覚めたか、色男」

「……ヒッ！」

「そう怯えるなよ、別に何もいやしないよ」

あれほどまでに実力差を見せ付けられると怯えるのも無理は無い  
か。

ただ、今後の為にもギーシュがここで潰れて貰っては困るからな。  
やれやれ、俺もほんとお人好しだな。

「ギーシュだったよな」

「あ、ああ……」

「どうだ、自分がどれ程に自惚れていたか身に染みてわかっただろ  
？」

「……」

「ま、すっかり反省するこつたな。それともしも強くなりたいと思  
うなら、ちゃんと自分のどこが悪くてどこがいけなかったのかを考  
えた上で俺のここに来な。ほいじゃな。」

まあ、ここで誘っても反省する時間が無いからな。

ちゃんと自分で自分を省みる時間をあげないといけない。

じゃないとギーシュの為にならない。

あいつもしっかり自分自身を見直せば、間違いなく伸びる。

その為にも今はあえて突き放さないとな。

《一方その頃学院長室》

「やはり勝ちましたな……」

「そつじゃのつ」

学院長室では、オールド・オスマンとコルベール先生の二人が遠見の鏡を使い決闘を見ていた。  
というのも、学院長がコルベール先生より幾つかのとんでもない報告を受けた為である。

先ず第一に、召喚当日にタケルが使つて見せた瞬間移動が間違テレポルトいなく虚無の魔法であるという事実。

次にタケルの左手に刻まれたルーンが始祖の使い魔の石柱を担う<ガンダールヴ>である事実。

これらを聞いた時、学院長は頭を抱えてしまった。

何せタケルは始祖の魔法さえ使いこなす上に、刻まれたルーンは一騎当千の神の盾。

それらの情報とルイズの家柄を総合すれば、ルイズ自信が始祖の生まれ変わりである可能性が高くなる。

この事が王宮にでも知れようものならば、最悪の場合ゲルマニアと戦争になりかねない。

更にロマリアなどに知られれば……聖戦の始まりとなってしまう。

生徒の幸せと成長を何よりも望むこの二人が、そんな事を許すはずも無い。

例え王家に叛意有りとみなされようと、ロマリアに異端の烙印を押されようととも生徒を戦場等に送る事は出来ない。

そう考えた二人は、暫くの間はこの事を秘密にしつつルイズとタケルを監視する事にしたのである。

「しかし、素手だけでメイジを倒すとはの」

「ええ、まさかあれほどは……」

「これは益々もって王宮や神官のアンポンタン共には知られる訳にはいかんの」  
「そうですね」

こうして密かに学院長とコルベル先生による二人を守る為の策略が始まる。

二人もタケルを気に入っている為、出来る限りの事はしようと固く誓うのであった……

### 《ルイズの部屋》

再び場面は変わりルイズの部屋……なんだが、なぜかキュルケとタバサがいるんだよな。

何時の間に部屋に来るほど仲良くなったのかね。

まあ、仲良き事は美しきかなとも言ういしい事ではあるよな。

「なんか物凄くナチュラルにキュルケとタバサがいるな」

「あら、いけなかったかしら？」

「うんにゃ、俺としては大歓迎……て、ルイズとタバサは何してんだよ」

ルイズとタバサの方を見ると……ああ、豊胸体操やってんのか。涙ぐましい努力だねえ……二人とも絶壁どころか抉れてるからなあ。

正直、本当に育つのか不安が無いと言えば嘘になるんだよな。

「なんだ、豊胸体操してんのか」

「い、いいじゃないの……」

「……コクコク」

「まあ、二人共ペチャパイだもんなあ、ははh『ゴソッ』『ドゴソッ』」

ぐ、ぐおおおお……ルイズの奴、何も辞典を縦にして殴らなくても……タバサは杖で殴ってくるし……

滅茶苦茶痛いんですけど……

「次に同じ事言ったらもつと酷いわよ……」

「……同じく」

「……すみませんでした……もう言いません」

や、やっぱりあんまり軽口は叩くもんじゃないな。

今後は気をつけないと命に関わるかもしれん。

くわばらくわばら……

「あら、可愛そうに、私が慰めてあげるわタ・ケ・ル」

「うひゃ！ 首筋に息掛けるなよ！」

「うふふ、照れちゃって可愛い」

「ちよつと『キュルケ』！ 私のタケル取らないでよ！」

「あら、使い魔とはいえ恋愛は自由よ」

「……同意」

何だか女同士の話になってるな。

こりゃ入り込む余地は無さそうだな。

暫く放っておくか。

それにしても、もう既にほぼ原作から乖離しているのは間違いないな。

こうなって来ると、原作知識は大まかな流れとある程度の人物像

把握程度にしか役に立ちそうにないな。

『あゝあゝ聞こえるかのう』

『その声はド変態かよ、なんだもう話す事なかったんじゃ』

『……もうええわい……少しお前さんに伝える事があつての』

『あんだよ』

『虚無魔法の世界扉ワールドドアで行く先はお主の考え通り原作で<才人>のいる<地球>の<日本>なのじゃが、せっかく行けるのに何も出来ないではわしがつまらんでな、お主の戸籍やらなんやら一通り必要な書類などは用意しておいたぞい。ああ、勿論金も用意してあるし、住む家も用意しておいた。例の<カバン>の中に必要な書類などは全て入っているので取り出すがよい。』

な、なんだつてえええ！

それなら向こうで色々と仕入れる事が出来るじゃねえか！

日用雑貨とか服とか、こっちでは手に入らない物が簡単に手に入る。

それに、あっちじゃ二束三文の雑誌とかでもこっちじゃかなり貴重な品物になるはず。

そうなりやかなり暮らしが楽になるぞ！

『ちなみにじゃが、<カバン>の中に向こうの物を入れる事は出来んぞ。それはあくまで医療器具を入れる為の物じゃ。』

だとすると、大量に持ち込むのは無理だな。

とはいえ、こっちには浮遊フレイティションとかあるから荷物運びならなんともなるな。

『更に言うと、向こうでは<魔法>や<気>といった所謂<神秘的な力>は使えぬ。元々そうだった土台の無い世界じゃからの。』

『でもよ、それだと帰れなくならね?』  
『それは大丈夫じゃ、用意した家に世界扉を固定してある』  
『なるほど、ちなみにどれ位の大きさの物が通れる?』  
『そうじゃのう……バス一台分位かの』  
『マジか』  
『ただし、生き物はお主以外は通れんぞ』  
『ふむ……当然か』

下手に向こうの生物持ち込んだら、それこそ生態系の破壊に繋が  
りかねないな。

まあ、バス一台分通るって事なら普通乗用車なら問題なく通るだ  
ろう。

となれば、ハルケギニアで初の車の輸入業とかもいいかもな。  
あくまで限定生産的な感じで。

しかし、魔法が使えないとなると大きいものとかを持つてくるの  
は結構至難だな。

大き目のバッグとか色々用意しておかないとなあ。

まあ、当面の間は日用品とかそういった物が主流になるだろう。  
流石に今の段階で車とか武器関係は色々と問題があるからな。

『以上が伝える事じゃ。何かお主から言う事はあるかの?』  
『<カバン>なんだが、腰に付けるポーチに変えてくれね?』  
『ふむ、まあいいじゃろ、明日には変えておく』  
『あんがとよ』  
『ではもういいかの?』  
『ああ』  
『また何かあれば話しかけるかもしれん、それまでさらばじゃ』



言うだけ言って消えやがった……つか、もう話す事は無かったはずなんだが、適当な奴だな。

とはいえ今回の事『だけ』は感謝してやるう。  
これで色々と便利になるからな。

「……タケル！ タケルつてばー！」

「お、おお、すまんすまん、少しぼーとしてたようだ」

「もう、そろそろ夕食の時間よ」

「ああ、わかった」

次の暇なときにも早速<日本>に行つてくるかな。

家の場所の確認と、その他諸々必要な書類などの確認、きん金を換金して<円>に換えると。

やべ、なんかわくわくして来るな！

……

それから食事を取り各自風呂に入つて来て、再度ルイズの部屋へと戻つて来た。

のだが、またもやキュルケとタバサがいんだよな。

しかもだ！

三人とも湯上だもんだから、こうなんとも言えない色香が漂っているのだよ！

キュルケのうなじを見た瞬間、危うくマイサンが暴走するところだったぜ！

まあ、気合で抑えたけどな！

「つかよ、お前ら少しは男がいるって事を自覚しろよ……」

「あら、いいじゃない」

「そうよ、タケルなら変な事しないでしょーし」

「……コク」

「あのなあ……男は例外なくスケベなんだぞ、無防備な姿晒してる  
と襲われるぞ」

「うふふ、タケルなら大歓迎よ」

「ちょ、ちよつと！」

「……」

やれやれ全く賑やかなこつて。

でもまあ、出会った当初よりもルイズは明るくなったし、キュル  
ケやタバサなんていう友達も出来たしいっかな。

三人とも何時の間にやら名前で呼び合うようになってるし。

これならルイズが孤立する事も無いだろう。

懸念事項の一つは解消された訳か。

後は野となれ山となれって感じかね。

その後も三人のおしゃべりは続き、何時の間にやら寝てやがった。  
仕方ないので三人ともベッドに放り込んでおいたが……一体全体  
何時の間にこんなに仲良くなったんだかね。

まあ、女三人寄れば姦しいとも言っし、やっぱり変な色眼鏡が外れ  
れば仲良くなるのも早いのかね。

『相棒も大変だな』

「全くだ、なんで世話するのが三人に増えてんだか」

『はは、違えねえな！』

「とりあえず俺も寝るわ」

『おう、お休み、相棒』

《次の日》

「う、うう〜ん……」

何だかこつちに来てからというものの、起きるのが大分早くなつてしまつたな。

しかしまあ、なんつゝ姿して寝てるんだよこいつらは……  
こんな姿見たら百年の恋も冷めるつてもんだわ。

「おい、お前ら起きろ、もう朝だぞ」

「あ、後もう少し……」

「あふう……まだ駄目よお」

「……お肉」

「どんな夢見てんだこいつらは……」

やれやれ、一体全体どんな夢見てるんだかな。

これが虚無の曜日だったらこのまま寝かせておいてもいいが、生憎と今日はちゃんと授業のある日だからな。

年長者として遅刻を許す訳にはいかんだ！

「そおい！……」

「うきやあ！……」

「あん！……」

「……痛い」

「ほれ、目覚めたかよ、さっさと洗顔して飯食つて来い」

三人揃つて寝ぼけた顔しやがつて……俺はお前らのオカンか！

これじゃ当分の間、のんびりは出来そうも無いなあ。

喜んでいいのやら悲しんでいいのやら……まあ、キュルケの寝姿

を見たのはラッキーだがな！  
うん、ご馳走様でした！

……

ルイズ達の授業中は毎度の如く暇な俺である。  
しかも今日の授業は二つ連続の授業の為、時間がかかる。  
なので、いい機会だから世界扉ワールドドアを使いく日本>に來ている。  
勿論デルフはおいで來てある。  
下手に持ち込んだらデルフの意識が消えるとも限らないので。

「しかし、世界扉ワールドドアの出口がこつちでの家だとはな、これもあのド変態の仕業か」

そうなのだ、世界扉ワールドドアの移動先がく日本>での自宅だったのだ。  
おかげで自宅を探す手間が省けた。  
ちなみに自宅は東京にあるので、物資の調達には事欠かない。

「とりあえず近場を少し歩いてみるか」

……

少し近所を歩いてみたところ結構大きなデパートがあり、一通りの物はそこで揃うと判明。

それにくカバン>の中にあつた通帳の内容を見たが……あのド変態はどうやら金銭感覚は完全に狂っている。

何せゼロが11個も付いてるんだぞ！  
そんなに何に使えと言うのだ！

「……まあいいか、そう頻繁に来る訳でも無いし」

余り深く考えるのはやめておこうと結論付け、デパートではノートと筆記用具それと下着類とラフな服装を購入。

最初にやるべき自宅の確認も終えているので、ルイズ達が戻って来る前にハルケギニアへ帰る事に。

消耗品関係が無くなったら、また買いに来るとしよう。

### 《ルイズの部屋》

俺が戻ってから十分ほどしてからルイズ達が戻って来た。

案の定三人一緒なのだが……もう突っ込むのはやめにする。

「ミス・ヴァリエール、よろしいですか？」

「あれ、ミス・ロングビル、どうされたのですか？」

「ご実家からお手紙が届いております」

「あ、どうも」

実家からの手紙というと……ルイズが魔法成功の事を書いた手紙か。

変な事書いてなきやいいんだが。

「どんな内容だ？」

「ちよっと待って今読むから……」

ルイズが手紙の封を切り内容を読み始めると、みるみる内に顔が青ざめていく。

なんだ、そんなにやばい事が書いてあるのだろうか……て、あっ！  
ルイズの奴ぶっ倒れやがった！

「お、おい、ルイズしっかりしろって！」

「う、うう〜ん……」

「手紙読んだだけで気絶するって……どれだけショッキングな事書かれてるんだ」

「……ねえ、読んでみたら？」

「そ、そうだな……ルイズ、悪いが中身確認させて貰うぞ。え〜と何々……」

【親愛なる私の娘ルイズへ。魔法が成功したとの報せを貴女から受け、お父様も含め一家全員非常に喜んでいきますよ。】

「この内容からすると、お母さんあたりからか？」

「そうね、恐らくは」

「……」

【手紙を受け取った当日はもう一家総出で宴になってしまいましたわ】

「なんとなくその光景が目には浮かぶな」

「ふふ、そうね」

「……」

【貴女の姉二人も我が事のように喜んでいきます】

「へ〜姉ちゃんいるのか」

「そつえばそつね」  
「……」

【そこで、貴女を魔法成功へ導いて下さった貴女が召喚したという東方のメイジ殿に我が家としてもお礼をせねばなりません。その為、そのお方を我が家にお招きし宴席を設ける事にいたしましたわ。】

「俺をルイズの実家に招く？」

「あらまあ」

「……凄い事になりそう」

【お招きに当たり失礼があつてはいけませんので、わたくし私自らが学院へ赴き、そのお片のご都合などを伺う事といたします】

「なんとまあ、お母さん来るのか」

「これは騒ぎになるわね」

「……」  
「ク」

【お伺いする際は、わたくし私だけではなく長女のエレオノールも同行しますからそのつもりで】

「姉ちゃんまで来るのかよ！」

「あららあ……」

「……大騒ぎ」

【なお、宴席の日取りとしては学院の長期の休みの期間にと考えておりますわ】

「そついや、後一週間ちよつとで長期の休みに入るんだつたな」

「そつね、期間は一ヶ月よ」

「……暇になる」  
「確かに結構長いな」

【ああ、それと、一緒にお祝いして下さい。たお友達も一緒に招待しますわね】

「キュルケとタバサをか……やばくね？」

「確かに不味いかも……」

「……コク」

【お伺いするのはこの手紙が届いた日の翌日となります、準備をしておくように、いいですわね】

「明日かよ！ 急すぎんでしょうが！」

「こ、こうしちゃいられないわ、ドレスとか用意しないと！」

「……忙しい」

【では、貴女と会えるのを楽しみにしていますよ、貴女を愛する家族一同より】

な、なんだかどえらい事になって来たぞ。

ルイズと俺だけならまだしもキュルケとタバサも招待するとかっ！  
絶対何か起きると確信できる。

しかも、あの烈風のカリン本人だけでなく、長女のエレオノールまで来るとは。

これじゃルイズが気絶するのも無理ないわな。

早めに学院長に報告して対策を練らねば！

ほんと、第二の人生は波乱万丈だな。



## 第七話

ルイズの実家からの手紙に書かれていた事への対策の為、学院長室に乗り込んだ。

まあ、対策といってもこれと言って特別な事をする訳では無い。

ありのまま、普段のままをみせようという事に決定。

理由としては無理に誤魔化そうとしたり演技すれば、返って怪しまれるだろうという結論に達したからだ。

確か爺さんの言う通り。

遠いところをせっかく来てくれるというのに誤魔化すのは良くない。

まあ、普段のルイズのだらしなさ辺りを見られると、お叱りの一つも受けそうだがな、主にルイズが。

ルイズにもその方向で腹を決めるように通達。

かなりブルっていたが、なんとか腹を決めたようだ。

そして遂に日付は変わり、烈風の襲来する日。

昼食を済ませた俺とルイズは出迎えの為、正門で待機中である。

### 《学院正門》

「そっぴや何時頃来るんだろう」

「多分、もう直ぐだと思っけど……」

「まだビビッてるのかよ、自分の母親と姉だろ。それに祝いに来るつてのに怖がる必要は無いだろう。」

「そ、それはそうなんだけど……昔からの癖なんだもの……」

こりゃ相当根深いんだな、ルイズの母親と姉への恐怖心は。推測の域を出ないけど、多分二人はルイズの為を思い厳しくしてたんだろう。

だが、ルイズ本人からすれば嫌われてると思っただろう。結構あんだよなあ、幼い頃にあんまりにも叱られると嫌われてると勘違いする事が。

ルイズの場合、正にそれが起きてしまい、今までフォローされて来なかったもんだから多分トラウマになってるんだろう。だからこそ、二番目の姉にあれ程まで懐いてたんだろうな。

「まあ、家族に会うだけなんだから、そう気張らずにリラックスしとけて」  
「う、うん」

ルイズのこういった一連の行動原理についても、一度じっくり家族の人達と話し合ったほうがいいか。

今後の事もあるし、早めに矯正しておかないと不味い。

まあ、あの娘には激烈に甘い親父さんの事だ、なんとかすんだろしゅ。

……

それから暫くして竜籠の一団がやって来た。

籠にはヴァリエール家の紋章が書かれているので間違いは無いだろつ。

さて、鬼が出るか蛇が出るか。

「お久しぶりね、ルイズ」

「おちびも少しは大きくなったわね」

「お、おおお、お久しぶりです、お母様、エレオノール姉さま」

いきなりそんなガチガチでどうすんだっつもの。

「っつかし……うん、やっぱりルイズの母親と姉だわ、見事な絶壁！  
なしてこの人からカトレアさんなんていう巨乳女神が産まれたの  
か……生命の神秘だ。」

「帰り際にも豊胸体操教えておくかね？」

「胸がでかくならずとも、美肌の効果もあるからやって損は無いはず。」

「ルイズ、そちらの男性はどなたですか？」

「ふん、自己紹介もしないだなんて……無礼な男ね」

「えと……手紙にも書いた私が召喚した使い魔です」

「え？」

「あら〜姉ちゃんの顔が見る間に真っ青になってくぞ。」

「そりゃそうか、手紙には失礼の無い様になって書かれてたし、多分  
そのように言い含められてんだろうな。」

「それをいきなりやつちまった訳だから……怒られるかもなあ。」

「こりゃ面倒避けるためにも先に自己紹介しとこう。」

「俺は草薙猛、ルイズに召喚されたロバ・アル・カリイエ出身のメイジです。今はルイズの使い魔をしています、どうぞよろしく。」

「これはこれは、娘がとんだご無礼を。ルイズの母でカリエヌ・デジレ・ド・マイヤールと申します。以後お見知りおきを。」

「……エ、エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールよ、見知りおきなさい」

あれまあ、強がって。  
明らかに膝が笑ってるぞ姉さんよ。  
案外この人も可愛いもんだな。

「エレオノール、貴女、我が家の恩人に対して」

「で、でも、お母様！」

「まあまあ、こんな場所で立ち話もなんですし一先ず移動しましよ  
う」

「そうね、そうして下さるかしら」

「ふ、ふん！」

「ほらルイズ、何時までも固まってないで行くぞ  
う、うん」

ルイズはあの調子だし、どうしたもんかなあ。

まあ、別に俺はルイズの都合に合わせていいだけだし何時でも  
いいから何も問題は無いが。

果たしてルイズがちゃんと話せるのか非常に不安になって来た。

### 《ルイズの部屋》

なんだろうな、この異様な雰囲気は……なんで家族が久しぶりに  
会っただけなのにこれ程までに異様な雰囲気をかもし出すんだよ。  
明らかにおかしいだろうが！

お前ら喧嘩でもするつもりかよ！

「時に……」

「ああ、苗字のクサナギでどうぞ」

「では、ミスタ・クサナギ、この度は娘が大変お世話になりましたわね」

「いや、俺はきっかけを与えただけですよ。実際に努力したのはルイズですからね。褒めるなら彼女を褒めてやって下さい。」

物凄く優しいそうな人じゃないか。

原作通りの人柄ならわかるけど、今のこの人を何でルイズはここまで怖がるのか理解出来ん。

小さい頃に悪戯でもしたんかね。

「そうですか、よく頑張りましたねルイズ」

「はい、お母様」

「それはそうと、ミスタ・クサナギ」

「はい？」

「ルイズから聞いているかと思いますが、実は……」

話の内容は、俺をルイズの実家であるヴァリエール家に招待したという例の話について。

俺としては都合も何も無いので、ルイズに合わせる事になった。

というか、幾ら何でも一族挙げての祝宴なんて……そこまでするんかいな。

まあ、ルイズが漸く魔法を成功させたってのは俺も嬉しいけど。なんとというか、顔に似合わず結構豪快なんだな。

「それとルイズ」

「あ、はい」

「一緒にお祝いして下さいったお友達も連れていらっしやい」

「……えと、その……」

ああ、二人をどう紹介したらいいか迷ってる訳か。

特にキュルケの紹介は難しいのかね。  
つか、こつちを泣きそうな目で見んなってば！  
しょうがない、助け舟出すとするか。

「実はその事なんですけど、よろしいですかね？」

「あら、何でしょうか」

「祝いに参加したルイズの友人の内の一人はツエルプストー家の息女なんですよ」

「なんですって?!」

あら、予想に反してお母さんの方の反応が薄いな、お姉さんは随分と激しく反応してるが。

もしかして、ルイズが怖がってるのは姉の方なのか。

とはいえ、ここまで怒る理由がわからん。

そりゃ過去にはヴァリエール家とツエルプストー家は色々あっただろうけどここは学院なんだぞ。

その学院内で学友同士が友達になるのは当たり前。

別にキュルケ自体は凄くいい娘なんだし何も問題は無い。

家柄だけで人を判断するなんてナンセンスだ。

「キュルケは非常にいい娘ですし、普段も仲いいですよ」

「そうでしたか、ルイズがツエルプストー家の息女と友人関係に…

…

「でもお母様、相手はツエルプストー家ですわ!」

「別に構わないでしょうに、学院じゃ同じ生徒ですよ」

「貴方は黙ってて頂戴、これはヴァリエール家の問題よ!!」

だから、俺もルイズの使い魔である以上は無関係じゃねえっての。  
いい加減そこそこわかれよ、やれやれ面倒な女だ。

つか、ヴァリエール家の問題だって言うなら、少しは解決する努

力をしたのかね？

何時までも恨みを持ち続けるのは問題を先送りにしてるだけなんだが。

「エレオノール、いい加減になさい、はしたないわよ」

「でも、相手はヴァリエール家の誇りをいく度も傷つけたツエルプストーリー家ですわ！ そんな相手との交際など認める訳には！」

なかなか頑固だな、ルイズのお姉さんは。

まあ、それも仕方ないのかもしれない、公爵家長女としての重圧やら貴族としての誇りやら色々あって自分を押し殺してるみたいだからなあ。

原作小説を読んだ訳じゃないが、どうやら心根の部分では優しい人のようだし。

仕方ない、ここは一つ考え方の訂正に乗り出しますかね。

「ちなみに、和解するように言ったの俺ですから」

「なんですって?!」

「親同士が和解出来ないなら、まず子供である二人が和解しろとね。大体これからの時代、何時までも古い因習に囚われる時代じゃないですよ。そんなもの時代錯誤もいいとこだ。」

「わ、私達が時代遅れだとしても言いたいのかしら……!!」

「うん、全くその通り」

「あ、ああああ、貴方って人はああああ!!」

「いい加減になさいエレオノール」

「で、でもお母様!!」

「彼の言う事ももつともなのよ、我々貴族も何時までも古い因習にしがみ付いて利権を貪るばかりでは駄目なのですよ。現にトリステインはそのせいで衰退の一途を辿っているのですから」

「し、しかし！」

「流石は公爵家夫人だね、よくわかってらっしゃる」

「ミスタ・クサナギとは是非その辺りも含め、しっかりとOHAN  
ASHIをさせていただきましよう」

「そうですねえ、まあ、ルイズの普段の生活態度とかも報告しない  
といけないですし」

「ちょ！ タケル！？」

「ははは、俺だけ被害を受けてなるものか！」

「う、裏切ったわねえ！ このこのー！！」

「ふははは、使い魔と主は一蓮托生、ルイズも道連れじゃ！」

あらあら、随分と仲がいいようね。

まるで兄妹のようだわ。

ふふ、この方なら本当にルイズを任せてもいいかもしれないわね。

「まあ、ルイズの生活態度についてなどの細かい事については実際に夫とも会っていただいて詳しいお話をいたしましょう」

「そつすね、そうしましょう」

「では、学院が休みに入りましたら早急にお迎えに上がりますわ」

「了解です、ルイズにも準備させておきますよ」

「ええ、お願いしますわね、では私はこれわたくしで失礼いたします、エレ  
オノール行きますよ」

「……はい、お母様」

やれやれ台風一過って感じだわな。

しかし、あのお姉さん結構堅物だなあ。

見た目はいいんだから、もう少し柔らかくなれば婚約破棄される  
事も無いだろうに。



いやはや、ありゃ性格で損してるわ。

「はあ……」

「何ため息ついてんだよ」

「だって、最後の方はお姉様ずっと睨んでたわ……絶対家に戻ったら怒られるわよ」

「別に何も怒られるような事してないだろ、胸張ってりゃいいの。まあ、張る胸無いけど。」

ま、少しばかりでっぱて来てはいるようだけど、まだまだ目に見える状態じゃないからな。

というか、ルイズが巨乳になる姿って……駄目だ想像出来ない。

「……タ〜ケ〜ル〜どうしてあんたはそうなのよっ！ このこの！」

「ははは、もっと背伸ばさないと届かないぞ」

「ううううう！ 絶対背伸ばして踏んでやるわっ！」

「その前に俺が大きくなってやるさ」

にしても、原作でもそうだったがルイズの姉は厄介な性格してそうだ。

実家に行った時は絶対に絡んで来るだろう。

一応対策考えておくべきかもしれん。

ま、おべっか使うつもりはないけどな！

「んじゃま、学院長の爺さんにも報告して来るか」  
「そうね」

「ちわくす、爺さん報告に来たぜ」

「おお、待ったぞい」

「タケルって、随分と学院長と仲が良さそうね」

「そりゃ男同士だし」

「そうじゃの、ほっほっほっ」

あれかね、エロシンパシーでもあんのかな。

なんか凄く親しみ易いんだよな、この爺さん。

ま、それはさて置き報告するとしますか。

……

「という訳で、休みに入ったらルイズの実家に行く事になったよ」

「なるほどのう、しかし、ある意味とんでもない事じゃな」

「何が？」

「あのヴァリエール家とツエルプストー家が和解出来るかもしれん  
のじゃぞ。これは歴史的に見ても大きな出来事になるじゃろう。」

「そんなもんかね」

「でも、お姉様が何と言うか……」

「あの人頭硬そうだもんなあ……ルイズも苦勞するわな」

「タケルも人事じゃないわよ、絶対お姉様タケルに絡むわよ」

「だろな、まあ、論破する自信はあるし、何より喧嘩しに行く訳じ  
ゃねえんだから大丈夫じゃね？」

「それは、そうだけど……はあ、また怒られるのかしら」

「そう気を落とさぬ事じゃ、ミス・ヴァリエールは何も悪い事はしておらん。胸を張って実家に報告しに行きなさい。」

「はい、学院長」

そうそう、ルイズは何も悪い事してない、つかむしろいい事してんだからな。

無い胸張ってどんと構えてりゃいいのさ。

「……なんか不愉快な事考えなかつた？」

「いんにゃ、何にも」

最近鋭くなつて来たなルイズも……やっぱ女の勘は恐ろしい。

まあ、事実を考えただけなんだがな、うけけ。

さてと、学院長への報告も終わったし部屋に戻りますかね。

### 《ルイズの部屋》

夕飯やら風呂やら色々と済ませて部屋で寛いでいるのだが……

「相も変わらずキュルケとタバサがいるな、もうあれじゃね、お前から二人もここの部屋に移れば？」

「そうしようかしら」

「……そうする」

「ちよつと！ 幾らなんでも四人は狭いわよ！」

「なら、キュルケの部屋と繋げるか、壁ぶつ壊せばいいし」

「……流石にそれは不味いでしょ」

「何、ルイズが卒業するまでだ。つーわけで実行！」

「ちよ！」

《突貫工事で壁を除去中……暫くお待ち下さい》

「ああ、本当にやっちゃった……」

「まあ爺さんには後で言っておくさ」

「……大丈夫かしら」

「ま、大丈夫だろ、部屋自体は壊してないし、戻すときは壁だけ戻せばいいんだからそう難しくはねえって」

「こういう事は事後承諾の方が承諾貰い易い。」

「まあ、あの爺さんだ、この程度の事は大目に見てくれるだろう。」

「それに俺が勝手にやった事だから、怒られるなら俺だけで済むしなあ。」

「やっぱりこの三人には仲良くして貰いたいし、うん、お兄さんは応援するぞ！」

「ああ、そうそう、それとキュルケとタバサ」

「何かしら？」

「？」

「ルイズの実家への招待だけど、お前らも招待するってさ。んで、休み入ったらすぐ向かえに来るって。」

「あら、そうなの。なら準備しておかなきゃ。」

「……わかった」

「まあ、あれじゃね、友達の家でお泊り会みたいなものだし気楽でいいんじゃない？」

「そうもいかないわよう……お姉様がいるんだし……」

「そっちは俺とルイズで対処するしかねえだろ。つか、幾らあの姉さんでも態々両親が招待した客に手出すほどアホじゃねえだろうよ。」

「流石にそれは無いだろうからな。」

つか、そんな事したらそれこそヴァリエール家の恥になっちまう。招待した客に対して礼儀も弁えずに追いつ返しとしたなんて、貴族でなくても恥だから。」

まあ、あの姉さんも話せばわかってくれるとは思いつし、多分問題は起きないだろう。」

「……なんだかフラグっぽいような気がするが、あまり深く考えないようにしようっと。」

「つーわけで、明日からはその為の準備をしよう」

「そうね」

「ええ、わかったわ」

「……コク」

「ほいじゃ、今日は遅いしもう寝よう」

「そうね、そうしましょ」

「ええ、それじゃ寝ましようか」

「……コク」

さてはて、色々なSSで書かれている魔の巣窟ヴァリエール家は一体どんな所なのかねい。

半分は楽しみだけど、もう半分は嫌な予感がするな。

具体的にはお母さんとの決闘とか……絶対起きるよな、定番のイベントだし。」

つか、出来る事ならカトレアさんに会いたいよなあ。

あの天然お姉さん……俺の超好みだし、ニシシ。

ビバ！ 巨乳なお姉さん！

てわけで、カトレアさんに会えるのを夢見て今日は休むとしますかね。」

んじゃ、お休み  
Z  
Z  
Z

## 第八話

明日から学院が休みになるという事で、俺とルイズ、それからキルケとタバサの四人はヴァリエール家に遊びに行く為の準備に追われている。

俺は準備と言っても特に何も無いし、着替え位なので問題ないんだが……女性陣の荷物が多い事多い事。

つか、ルイズは自分の家に帰るだけなんだから、んなに持つてく必要無いだろうに。

やれやれ、どうしてこう女ってな身支度に時間掛かるかね。

「つか、お前らの荷物だけで馬車一台埋まるぞこれ」

「え、これ位普通よ」

「そうよ、女は色々と物入りなのよ」

「………退屈」

「いやまあ、キルケとタバサはまだしもルイズは別に持つてく物なんて無いだろ実家なんだし」

「そうでもないわよ、途中で食べるお菓子とか飲み物とか本とか色々………」

お菓子里に飲み物つて……それだけでこの量にはならねえだろ普通。  
どんだけ食い意地張ってんだよ。

「………太っても知らねえぞ」

「うっ………自重しとくわ」

「そうしろ。そういや、ルイズの家族構成ってどうなってんだ？」

「えとね、お父様とお母様、それとエレオノール姉さまにちい姉さまね」

「姉二人か……女系家族なのかね」

「そうかも」

ちい姉さまつてのはカトレアさんの事か。

今回会えるようなら速攻で治療してしまおう。

その為だけに医療技術関係のチートを買ったんだからな。

「あ、そうだ、タケル、ちい姉さまの事なんだけど」

「ああ、二番目の姉ね、その人がどうかしたか？」

「実は重い病気なのよ、それでタケルなら治療出来ないかなって」

「ふむ、症状見てみないとなんとも言えないな」

「なら、診察して貰えないかしら」

「勿論構わんさ」

「頼むわ、今まで誰も原因すらわからなかったから」

「おう、任されよ」

うっし、これでカトレアさんとの接点が出る！

後はどうやって口説き落とすかだが……あの勘の鋭い人の事だからなあ。

下手に邪な気持ちを抱くと見破られそうで怖い。

つか、下手すりゃ俺が転生した人間だったのもバレるかもしれない。  
い。

まあ、そうになったらそうなたで別に構わないけどさ。

「それじゃ、明日に備えて今日は早めに寝るとしよう」

「そうね、それがいいわね」

「ええ、それじゃ準備を済ませましょう」

「……」

て、まだあんのかい！

一体どれだけの荷物を持っていくつもりなんだよ。



馬車に入りきるのか不安になって来た。

《翌日》

んでもって次の日。

今日から学院は休みに入るので、ほとんどの生徒が実家に戻るらしい。

しかし、俺達四人は向かえを待たなければならないので、こつしてのんびりしている訳である。

「こつ人がいないと学院も静かだなあ」

「そうねえ」

「何時もは賑やかですものね」

「……静かで落ち着く」

何時頃迎えに来るのか聞いておくべきだったかね？

まあ、焦つてもしょうがないしのんびり待ちますかねい。

「あ、あれじゃないかしら」

「え〜と……そうね、私の家の紋章があるし間違いないわ」

「つか、馬車じゃなくて竜籠か」

「……その方が早い」

「そらそうだな」

つか、なんか前回より多くね？

前回は竜籠が一台だったけど、今回五台もいるんだけど。幾らなんでも多すぎる気がする。

「なんで五台もいんだよ」

「多分荷物用じゃないかしら」

「ああ、そういう事か」

そんな事を話していると竜籠が着陸し中からルイズのお母さんが出てきた。

「ルイズ、お出迎えご苦労様ね」

「はい、お母様」

「ミスタ・クサナギも」

「どうも」

「それと、そちらが」

「はい、ルイズの友人の」

「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーですわ、ヴァリエール公爵夫人」

「……タバサ」

「そうですね、家の娘と仲良くしていただいておりますがとうございませう」

「ふふ、とんでもないですわ、私こそルイズと仲良く出来て嬉しいですもの」

「……コク」

社交辞令っぽいけど、どっちも本心なんだろうな。

思ってたよりずっと穏やかな雰囲気だ。

これなら向こうについても親父さんとは問題なさそうだ。

「それでは早速出発いたしましょう、荷物を載せなさい」  
「了解です」

……

荷物を載せ終わり、現在は空の旅を満喫中。

ルイズのお母さん曰く、特別早い竜籠を用意したらしく数時間で到着出来るらしい。

いやはや、随分と手間掛かってるねい。

「て、ルイズ大丈夫かよ」

「……ぎぼぢわゝるゝいゝ」

「酔った訳ね……ほら背中さすってやる」

「……ありがとう」

ルイズは飛行はまだ使えないからなあ。

空を飛ぶのは慣れていないんだろう、酔うのも仕方ないか。

ああ、そうだ、酔い止め飲ませておくか。

「ルイズ、これ飲め、酔い止めだ」

「……うん」

「それ飲んだら少し休んでろ」

「……そうするわ」

さてとルイズはこれでいいとして、キュルケとタバサは大丈夫そうかな。

まあ、二人は飛行も使えるから空を飛ぶのはある程度慣れているんだろう。

何れルイズにもその辺りの訓練させておかないと。

こりゃ、訓練メニュー作り直すべきかもしれないなあ。

そんなこんなで、適当に休みながら過ごしていたら何時の間にか

らヴァリエール家の屋敷に着いたようだ。

つか……でかつ！

何だよあのでかさ、門から屋敷までどんだけあんだよ！  
なんつー無駄な設計だ。

「……でか過ぎだろ」

「そうかしら、大貴族の屋敷なんてこんな物よ」

「キュルケの実家もこんなんか？」

「ええ」

無駄が多すぎるっつーに！

どうしてこう貴族ってのは儉約をしないかね。

無駄を省いた機能美こそいいと思うんだけどなあ。

ああ、やっぱりこの感覚は日本人的感觉なんだろうなあ、貴族の  
感覚はわからんわ。

「そろそろ着陸いたしますわ」

「了解です」

さてと、それじゃそろそろルイズ起こして準備しますかね。

### 《ヴァリエール家屋敷》

遠目から見てもでかかったが、近くで見ると尚更でかいな。

つつても、思ったほどバケバしくはない。

なんというか、清潔なというか、そんな感じだな。

こりゃ思ってたよりもまともなのかもなあ。

「ではこちらへ」  
「おっじゃましま〜す」

うほ、すげー広い！

これじゃまるでヨーロッパの小さい城みたいじゃないか。  
なんとというか、ブルジョアジーって奴なのかね。

ああ、妬ましい！

「では、私は夫わたんこに到着を報せて参ります。皆様は客間わたくしでお待ち下さいね。ジエローム、お客様を客間へご案内下さい。」

「畏まりました奥様、では皆様、こちらへ」

「ルイズは一緒に来なさい」

「あ、はい、お母様」

「んじゃルイズ、また後でな」

「ええ、また」

### 《客間》

執事の爺さんに案内され客間に来たが、ここは結構調度品などが揃っている。

恐らく客に失礼が無いようにって事なんだろう。  
壊さないように気をつけないと。

「ふい〜それにしても結構な長旅だった」

「そうねえ、少し腰が痛いわ」

「……お腹すいた」

「後で食事位出るだろうから我慢しとけて」

「……ぐすん」

腹が減ると切なくなるのはわかるけど、何も泣かなくてもいいでしょうに。

なんだか途轍もなく罪悪感を感じる。

俺、別に悪い事してないよね、事実を言っただけだよな。

なのに何故にこうまで息苦しいのだ。

ルイズ、早く戻って来てくれ……

《一方その頃ルイズは》

「お父様、お久しぶりでございます」

「うむ、元気そうで何よりだルイズよ。どれ、こっちへ来て父にもっとよく顔を見せなさい。」

「はい、お父様」

「うむ、やはりルイズは可愛いな、流石は私の娘だ」

と、そういいながらルイズを抱きしめるヴァリエール公爵。  
ヴァリエール公爵は一見厳格そうに見える。

のだが、娘に対してはその実かなり甘いのである。

現に今も端から見ても親バカ全開である。

「あなた、ルイズを可愛がるのは後にして下さいな、お客様をお待たせしていますのよ」

「お、おお、そうであつたな」

「全く、娘の事になると何時もこれなんですから、少しは自重して下さいと困りますわ」

「そう言うなカリーヌ、久しぶりに会えたのだからな」

どうやら妻に対しても結構甘いようである。  
というか、やはりヴァリエール家は女性の力が強いようである。

「してルイズよ、手紙は読んだが遂に魔法を成功させたそうだな」  
「はい、タケルのおかげです」

「そうか……その御仁には出来る限りの礼をせねばいかな」

「多分、過剰なお礼は断ると思いますけど」

「む、どういう事だ？」

「えと、タケルは余り物欲というかそういったのが薄いみたいなんです」

「ほっ」

「だから金銭でのお礼と違って、多分受け取らないんじゃないかな」と

「ふむ、ならばどうするか」

「私達で考えるよりもタケルに直接聞いた方がいいかもしれません」

「そうだな、では会食の時にでも尋ねてみるとしよう。ではルイズ、その御仁とご友人を連れて来なさい」

「はい、わかりました、お父様」

### 《客間》

「にしてもまだかね、そろそろタバサが限界っぽいけど」

「そうねえ、目が不味い事になってきてるわ」

「……」

やばい、既に言葉も発しなくなって来ている。

こんな事なら何かお菓子でも持っておくんだった。

こういったキャラの場合、空腹が限界に達すると大抵の場合暴走するからなあ。

ルイズ、頼むから早く来てくれよ。

「皆、お待たせ」

「ちよつと、遅いわよルイズ」

「ごめん、お父様と話してたから」

「それより早く飯にしてくれ、タバサがやばい」

「あ、うん、多分この後会食になるからもう少し我慢して」

「だそうだタバサ、もう少しで美味しい飯に有り付けるから気合で我慢しろ」

「……コク」

飯が食えるとわかったからか、辛うじて頷く事は出来たようだな。この分なら、タバサの理性はギリギリなんとか保ちそうか。

じゃ、ここでこうしてもあれだし、ヴァリエール公爵と面会しに行くのでしょうか。

何事も無ければいいんだけど。

「じゃあ行きましょう、こつちよ」

「ああ」

こうして、一抹の不安を覚えながら一路ヴァリエール公爵と面会に向かうのであった。



## 第九話（前書き）

6 / 26

大幅修正、元の文章は活動報告に記載しています。

更新が遅くなり申し訳ありません、引越しやら出張やらでまともに時間取れませんでした。  
少し短いですが九話開始です。

## 第九話

さて、これからヴァリエール公爵一家との面会なんだけど、その前にタバサの状態がマジやばい。

既に目が据わってる……。

流星に時間立ち過ぎだ。

「ルイズ急いでくれ、マジでタバサがやばい」

「う、うん、ここよ、食事はもう用意されてるはずだから」

「タバサ、もう少し我慢しろ、そしたら好きなだけ食っていいから」  
「……」

返事が無い、ただの屍のようだ……。

つか、タバサってここまで腹ペコ少女だったっけ？

なんだかこの世界の住人で、ギャグ方向で修正かかってね？

まあ、その方が楽しし面白いからいいけど。

### 《屋敷・食堂》

「お父様、連れて参りました」

「ご苦労、ルイズ」

おうおう、あの人がヴァリエール公爵か、渋いな！

ああいう渋いおっさんてのはやっぱいいね、見た目優男よりも俺はああいった渋みがある方が好きだぜい！

と、んな事考える前に挨拶しとかなきゃ。

「初めまして、ルイズの使い魔として召喚された『クサナギタケル』  
です。呼び方は苗字のクサナギ、もしくは名前のタケルでどうぞ。」  
「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエ  
ルプストーですわ」

「……タバサ」

タバサがかなり危険な領域に入ってるのは間違い無さそうだ。  
こりゃ俺達の分は無くなりそうな予感。  
まあ、後でまた何か食べばいいか。

「ルイズの父、ラ・ヴァリエールと申す」

「ルイズの姉、カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・

ド・ラ・フォンテーヌですわ」

「私とエレオノールとは既に自己紹介は済んでおりますわね」

「そうっすね、んで、申し訳ないんですけど、タバサが限界っぽい  
で先に飯食わせて貰っていいすかね？」

「おお、これは失礼、ささ、好きなだけ食べてくれ遠慮は要りませ  
ぬぞ」

「だってさタバサ」

「……食べる！」

タバサはそう言った瞬間、物凄い勢いで食べ始めた。

つか、あれどうやって食べてるんだよ！

お前の胃袋はブラックホールかなんか？！

「だゝもう、そんな焦って食うなって、誰も取りやしねえってば！」

「……んぐっ?!」

「いわんこっちゃんえ、ほら、水飲め！」

「……んくんく……パクパクッ！」

「駄目だこりゃ……」

こりゃ相当腹減ってたのか……暫く放っておくしかないか。  
やれやれ、一応後で胃薬でも用意しておくか。  
流石にこんだけ食べると腹壊しそうだし。

「あ〜とりあえずタバサは放置で……」

「そ、そうね……」

「さ、流石にびっくりしたわ」

「俺も驚いた……つか、こっちの話なんて耳に入っていないなありや  
「そうね……」

タバサの食いつぷりに一同唾然としてしまい、少々場が凍りついた。

まあ、そりゃそうだよなあ、普通貴族の子女があんな食い方する  
事無いだろうし。

驚くのも無理ない……つか俺だつてびびったわ！

たくもつ、ほんと、こいつらは色々と手間がかかるんだからなあ。

「ところでミスタ・クサナギ」

「なんですかね？」

「妻から報告を貰っているが、ルイズとそちらのミス・ツエルプス  
トーが友人関係となるきっかけを作ったのがミスタと聞いたが、そ  
れは事実なのかね？」

「ええ、その通りですよ。何か問題でもありますかね？」

「問題大有りに決まってるでしょう！ それがどうい……」

「エレオノール、下がっていなさい」

「で、でも、お父様！……はい……」

「すまんな、娘が粗相をしまして」

「いいえ、別に気にしませんので」

「そうか、では正直に話して欲しいのだが、君から見てヴァリエー

ル家とツエルプストー家の現状をどう思うかね」

「やっぱヴァリエール公爵としてもツエルプストー家との間の因縁については気にしてるんだねえ。」

「そりゃ領地が隣同士なのに何時までもいがみ合ってるのも疲れるだろうし、当然と言えば当然か。」

「まあ、俺の言う事で何が変わる訳でも無いだろうけど、きっかけにでもなればいいし、ここははっきりと俺の考えを述べておこう。」

「んじゃ正直に話しましょう、かなり無礼な内容になりますけどいいですね？」

「構わぬ」

「ルイズとキュルケにも言いましたけど、第三者の意見として率直に言えば下らないの一言ですね。大体誰の恨みか知りませんが、女取られたなんてのはそいつ自身の器量が足りないせいです。それを子々孫々まで残すつてのは……同じ男として情けないとしか言いようがありませんね。」

「確かに……」

「それに親が子を叱るように親が間違いを犯しているなら子が諫めるべきだと思います。それが家族つてものでしょう。貴方たちはそれをしなかったからすると今まで来てしまったんでしょう。」

「……うむ……耳の痛い話だ」

「だからこそ、ルイズとキュルケが仲良くなる事は二人にとってだけではなく、今後のヴァリエール家とツエルプストー家の関係にも役立つんじゃないかと思ひ、仲直りさせたわけです」

「そうか……ミスタは若いのに随分と周りを見ているのだな」

「別に特別な事じゃありません。というか、ハルケギニア人の悪い癖として目の前の事しか見ようとしないんですよ。物事はもつと多角的に見なければならぬのに、ただ目の前にある事実しか見ない、それだから物事の本質を理解する事が出来ないんです。だからルイ

ズの事も誰も気が付かなかったんですよ、ちよつと見方を変えればすぐわかる事なのにね。」

「……確かに、そうだな……全く持って反論の余地が無い」

「まあ、これはあくまで第三者の意見であり、俺自身の意見でもあります。絶対という訳でもないですし、参考程度にして置いてください。」

「いや、ミスタの言う事は尤もな事だ。それに気が付いていれば今までルイズをあれほど苦しませる事も無かつただろう。」

ルイズの魔法についても、少し考えればわかる事だったのにさ。

誰も彼もが、一辺通りの型にはまった考え方しか出来ないから今まで誰も気が付かなかったんだよ。

もう少し思考を柔軟にして、物事の本質を捉えて貰わないとね。

でもまあ、ヴァリエール公爵はカリーヌ夫人は随分とマシだとは思うが……エレオノールはあれだけど……。

「……ちよつと貴方」

「なんすかね？」

「幾らなんでも無礼すぎるんじゃないかしら、仮にも公爵であるお父様に向かって……」

「エレオノール、よしなさい。彼の言っている事は尤もな事なのだ。」

「でも、お父様！」

やれやれ、誇り高いのもいいけどもう少し場を考えようよ。

よもやここまで頭固いとは思わなかったぜ。

矯正するにも時間かかりそうだねえ、このエレオノールという人は。

「私は認めません、こんなどこの馬の骨とも知らない男に！」

「エレオノールお姉様、タケルを悪く言わないで下さい！」

「おちびは黙ってなさい！」

「いいえ、黙りません！ タケルは…… タケルだけが私を見てくれたんです、タケルがいなかったら私は今でも一人で苦しんでいたんです！」

「……！」

「だからタケルを悪く言うのは、たとえお姉様であっても許しません！」

「……これはおでれーた！」

ルイズがエレオノールに盾突いたぞ！

しかも俺をかばってくれるなんて…… お兄さんは嬉しいぞ！

「わ、私は認めないわ、絶対に認めませんからね！！」

そうやってエレオノールは出て行ってしまった。

まあ、彼女自身もルイズについてはずっと悩んできたんだろう。

研究者として出来るだけの事もしてきたんだろうけど…… それでも結果を出せずに苦しんでいたんだろうなあ。

それを突然現れた男に解決されちゃイラつくのも無理は無い。

彼女については時間をかけるしかあるまい。

「すまぬな、娘が無礼を言ってしまった」

「気にしてないですよ、多分あの人もルイズの事をなんとかしようと頑張っていたんでしょう。それを突然現れた男に解決されて悔しいんじゃないですかね。まあ、時間を掛けるしかないでしょう。」

「うむ、そう言ってくれるとわしも気が休まるよ」

「私もですわ、エレオノールも本来はいい娘なんですけど、誇り高いのが災いしまして……」

「男が寄り付かない？」

「ええ、今でも破談記録を更新中でしてね……」

そりやまあんな性格してちや破談になるのも無理ないわな。  
ドMな奴ならまだしも、一般的な感覚じゃ付いていけないだろう。  
かくいう俺もあの手の高慢な女は駄目だが。

「男の理想を言えばカトレアさんみたいな女性っすからねえ」

わたくし  
「私？」

「ええ、やっぱり優しく朗らかで、そして何より……胸の大きさ！」  
「そ、そんな、いやですわ、ミスタったら……」

だつてさ、アニメで見たよりも明らかにでかいぞ……確実にメ  
ートル級いってんじゃないかね？

やばい、マジで触ってみたい。

つか、揉みたい！

挟まれない！

「タケケル、あんたつて人はああああ！」

「俺としてはあの双子山は見逃せんのだああああ！」

「ちい姉さまをスケベな目で見るなああ！」

「ふはははは、巨乳万歳！」

「タケルったら、そんなに触りたいなら私に言ってくればいいの  
に」

「キュルケ、あんたもタケルを煽らないでよ！」

「あ、ら、ルイズはまだまだ小さいからタケルを満足させる事はで  
きないわねえ」

「わ、わたしだつて、少しずつ大きくなってるもん！」

「あらルイズ、それはどういう事かしら？」

うほ、予想外にカーリヌ夫人が食いついたぞ。



やっぱり自分の絶壁加減が気になるのかね？

「あゝ実はですね、俺がルイズ達に美肌と豊胸の為の体操を教えただんですよ。実際ルイズ達は少しずつではあるけど効果が出てますね。」

「美肌と豊胸ですか……勿論私にも教えてくださいますね、ミスタ・クサナギ。」

「いいつすよ、別に隠す事でもないですから。ただ、俺に教わるよりルイズに教えて貰ってください。親子のスキンシップとして。」

「タ、タケル?!」

「序にルイズの普段の生活態度とかも確認なさってはいかがですかね……うけけ……」

「そうですね、そういたしましたよ」

「あ、あの、お母様？」

「さ、ついてらっしゃい、オホホホ」

「い、いやああああ!」

ルイズが引きずられていったな……うけけ……。

やっぱりルイズをからかうのは面白い。

アニメや原作じゃあれだったけど、この世界のルイズは本当に当たりだわ。

「……ま、まあ、とりあえず、ミスタ・クサナギにはまだルイズの魔法を成功させてくれた礼を言っていなかったな。父親として娘を救ってくれた事、心から礼を言わせてくれ。」

うわお、公爵ともあるう人が頭下げてるよ。

こりゃあれじゃないのかね、トリストイン始まって以来の珍事じゃないかろうか。

何せ公爵なんて、言ってみれば準王家に当たる家柄の当主が幾ら

東方で貴族であったと言ってもハルケギニアじゃ地位も無い人間に  
対して頭下げるなんて。

きつとあれだな、明日は槍が降るね。

「よして下さい、俺はきつかけを与えただけで努力したのはルイズ  
自身です。俺なんかには頭下げる必要は無いですよ。その分ルイズを  
褒めてやって下さい。」

「娘を救ってくれたのだ、親としては頭を下げる位は当然の事なの  
だよ」

それを当然と言えるのが凄い事なんだと思うけど。

ここまで言われたら、礼を受け取らない訳にはいかないよな。

「……わかりました、草薙猛、公爵からの礼、確かに受け取りまし  
た」

「うむ、重ねて礼を言う、ありがとう」

「俺も使い魔ですからお役に立てて何よりです」

これはヴァリエール公爵の評価というか印象を上方修正しておく  
べきだろう。

幾ら娘の事とはいえ、こうまで素直に頭下げられるとは……。

貴族のプライドとかあるだろうに凄い人だ……結構尊敬出来る人  
なのかもしれない。

ルイズもいい父ちゃん持ったじゃないか。

「ああ、それとルイズから頼まれた事がありましたカトレアさんの  
治療をして欲しいと」

「な、治せるのか？」

「治せるかどうかは詳しい症状を聞かないと、何とも言えません」

「そ、そうか……」

「それで、詳しい症状なんですけど、カトレアさん幾つかお聞きしてもいいですか？」

「あ、はい」

「病気だと聞きましたけど、具体的にはどういった症状なので？」  
「それが……」

カトレアさんから詳しく症状を聞いたところこうだ。

- ・ 吐血を伴う激しい痛み
- ・ 秘薬や魔法により一時的に回復はするも時間経過により症状が  
ぶり返す

・ 魔法を使うとより症状が悪化する

吐血を伴う激しい痛みか……癌とかなのか？

にしては、秘薬で治ったにも関わらずまたぶり返しているってのが気になる。

単純な病気では無さそうな感じだ。

こりゃもう少し詳細に調べる必要があるか……。

「どうなのかね？」

「単純な病気じゃないのは間違い無いですね。正直な話、秘薬で治った後も症状がぶり返しているのが少々妙な話ではあるので。」

「確かに……治療に当たらせただけの水メイジも同じ事を言っていた……」

「しかも、気になるのは魔法を使うと確実に悪化するという点です。魔法の使いすぎで疲れるという事はあっても、吐血を伴うような事は余程の事がない限り起きないはず。」

「そうなのだが、現にカトレアは……」

「……もう少し調べてみますよ、幸い暫くはここにいる事になるみたいですし。とりあえず今日のところは長旅で疲れちゃったでしょうし、本格的な診察や治療は明日以降という事で。」

「そうか、頼む」  
「はい」

カトレアさんの病気はなんとしても治さなければならぬだろう。何せその為に態々医療関係のチートを希望したんだし。とはいえ、恐らく病気じゃないっぽいよなあ。魔法使うと悪化するって事は、多分魔法や精神力関係だろう。明日にでも詳しい診察をしてパパッと治そう。

《一方その頃のエレオノールは……》

やってしまったわ。  
仮にもルイズを救ってくれた恩人に対してあの態度……後で絶対にお母様からお叱りを受けるわ。

はあ、本当にどうして私わたくしはこうなのかしら。  
何時も何時も素直になれずに、結局皆離れていくのよね。

今回の事だって、ミスタ・クサナギに感謝しなければならぬの  
にあんな事を言うだなんて。

ああもつ、おちびにも嫌われたかもしれないし……はあ、本当に  
憂鬱憂鬱だわ……。

《再び主人公へ》

カトレアさんの治療についてある程度の算段を付けた後、俺とキ

ユルケはヴァリエール家の面々と楽しく話していたのだが、タバサだけはその横で一心不乱に食べ続けていた。

つか、一体何時まで食う気だ！

もう既に五人前越えてるぞ……タバサ、恐ろしい娘！

んでまあ、タバサにより料理が食い尽くされたので会食は一旦終わり。

部屋に戻りのんびりする事に。

### 《屋敷：客間》

客間に来て見たが、いやはや凄い。

調度品一つとってもかなりの値打ち物だ。

まあ、客間って事もあって見栄え良くしているんだろうけど。

にしても、ここの調度品だけで一体幾らするんだろう。

「にしても、予想外にルイズのお父さんとお母さんはいい人だな」

「そうね、私もヴァリエール公爵があそこまで物分りのいい人だとは思わなかったわ」

「……以外」

もつとこう、厳格な人かと思ってたけど結構人情味のあるいい人だわ。

母親であるキャリア又夫人も、案外とつつき易いし。

この家族なら別段付き合うのも問題ないわな。

「……た、ただいま」

「お、ルイズ、お帰り。その様子だと大分絞られたみたいだな。」

「あ、あんたのせいでしょうが！ このこの！」

ルイズの駄々っ子パンチを受けながら、俺は今後について考えている。

とりあえず、カトレアさんの治療を完遂させるとしてその後だけど……出来れば早めにワルドに接触しておきたいんだよねえ。

あいつの望みって確か聖地に行く事らしいから、俺ならすぐ連れて行ける。

そうなりゃあいつと敵対する必要性が無くなるから、今後色々と便利になる。

それに出来ればエレオノールさんも、なんというかもう少しなんとかしたい。

彼女自身も根っこの部分じゃ悪い人じゃないだろうしさ。

まあ、彼女については追々考えていくとしようかね。

後はあれだな、レコンキスタをどうやって鎮めるかとテファの救出にタバサの母親の件だな。

レコンキスタは……あれかな正面から特攻掛けてボテくりこかせばいいかね。

ラカンと同等の力があれば、恐らくは問題無いだろう。

それまでに地球製の武器を仕入れてもいいし。

テファについては……先にフーケに接触してさっくりと救出してしまおう。

最後のタバサの母親の件だけど、これについては故郷にいるエルフに協力して貰って治せばいいか。

多分奴ならなんとか出来るだろう……性格破綻してるけど……。

「にしてもあれだなあ、休みの間ここにいるのはいいとして何すっかね?」

「そうねえ、一日中のんびりしてるのもあれよねえ」

「……食べる」

常人の五倍は食ってるのに、まだ足らんのか！  
一体どういふ体の構造してんだよ！

「いや、タバサよ、食っちゃ寝ばつかしてたら太るぞ」

「……うっ」

「そ、それは嫌ね……」

「つつたつてキュルケ、お前運動不足で腰周りに少し肉が付い来てるだろ」

「え?!」

「ほれ」

俺がキュルケの腰周りの肉を掴むと……明らかに贅肉が。

キュルケはあれかな、体質的に肉が付き易いのかもしれん。

このまま放置するとヤバイから、ダイエットの方法を覚えておくか。

唯でさえ貴族の食事は油物が多いからなあ……。

あの食事を続けてたら、生活習慣病になりやすそうだし。

「あ、あうあう……」

「あゝこりゃいかなあ、早めに落さないと落ちなくなっちゃう。後でダイエット方法教えてやつから頑張りな」

「た、頼むわね……」

「タバサは……あんだけ食ってるのに贅肉が付いてないな。こりゃ体質かね。」

「……良かった」

「とはいえ、油断していると危ないからな、気をつけるこつた」  
「……わかつた」

と、そんな事を話しているとカリーヌ夫人がやって来た。  
なんだか物凄くいい笑顔してんだけど……なんかあったんかね？

「お、お母様、ど、どどどどうされました？」

「いえね、ミスタ・クサナギからもルイズの普段の行動についてお聞きしようかと思いましたがね」

「ふむ、普段のルイズですか……」

どうすつかねえ……ありのままを話すと多分、というか、ルイズは確実にお仕置きだよな……。

うん、やっぱり親御さんに隠し事はいけないよな！

包み隠さず話そうか……うけけ……。

「勉強に関しては座学トップですし問題無いですね」

「そう、それは何よりですわね」

「しかしですねえ、普段の生活態度が……特に寝起きなんかはもう目も当てられないくらいです……」

「あら、それはどういふ事かしら？」

「タ、タケル?!」

「実はですね……」

普段の寝起きの悪さや寝相の悪さ、それに好き嫌いの多さ等々、ルイズの普段の生活態度について包み隠さず説明。

更にルイズの奇行を話して聞かせた。

ルイズの奇行が何かと言えば、ある日の夜中に俺を突然たたき起こした訳なんだがその理由が……『トイレ』だもんなあ。

多分寝ぼけていたんだと思うんだが、その際突然その場で脱ぎ出してそのまま粗相しそうになったもんだから速攻でキュルケをたたき起こしてトイレに放り込んで貰ったが……流石に俺もあれにはビびったわ。



ありや寝ぼけてるとかって時限の話じゃない。  
明らかに奇行だ。

俺からそれらの話を聞いたカリンさんは、物凄い笑顔に青筋を浮かべながらルイズを無言で引きずっていった。

ありやお仕置き程度では済みそうもないな。

確実にルイズの頭の中ではドナドナが流れていただろう。

いや〜いい事した後って気持ちいい、うけけ。

「ルイズ、大丈夫かしら？」

「親御さんに隠し事する訳にはいかんだろう。これであいつの寝相の悪さとか諸々が治ればいいんだけどねえ。」

「そうねえ」

とはいえ、ルイズの奇行が治るとは思えないのが悲しいところではあるのだが。

夢遊病の気でもあんのかねえ。

一度診察した方がいいかもしれん。

考えておこう。

「寝相の悪さで言ったらキュルケもだけどな」

「そうかしら？」

「下着姿で寝るのはまだしも、暑いからといって男も一緒にいる部屋で真っ裸になるのは流石に……」

「あら、タケルは私の裸見れて嬉しかったんじゃないの？」

「……いやまあ、確かにご馳走様というか、眼福というべきか……  
て、そうじゃなくてだな！」

「ふふ、大丈夫よ、タケル以外の男性に肌を見せるような事しないわ」

え〜つまりそれって……襲ってもOK牧場って事ですかあ！  
それならそれで早く言ってくれよ、遠慮なく突撃するから！  
流石にこれ以上のお預け食らうとマイサンも限界だからな！

「たく、そんな言い方されるとマジで襲っちゃうぞ」

「その時はタケルもツエルプストー家入り決定ね」

「結婚前提かよ?!」

「ふふ、タケルなら絶対お父様にも認められるもの、大丈夫よ」

つか、もしやキュルケって俺がキュルケに気があるの気が付いて  
るのか？

こういった事は女性の方が聡いのは間違いないだろうけど……今  
までバレるような行動してたかな？

……バレバレか。

「……もしかして……気づいてる？」

「当たり前じゃない、貴方が私に気がある事位とっくに気が付いて  
るわよ」

「……うわお」

「それにね、タケル、私だって貴方の事が『好き』よ」

「うえ?!」

ちよ、そこどころk w s k キボンヌ！

「タケルってちょっとエッチなところはあるけど、何だかんだ言い  
ながら優しいじゃない、何時も私達の事を考えてくれてるし」

「いやまあ、そりゃな……」

「それに、貴方ほど自然体で接する事の出来る男性は居ないもの」

「そりゃまあそうだろうな、俺相手に畏まる必要なんて無いだろう  
し」

「ふふ、そんな貴方だから私は好きになったのよ」

「まいったねこりゃ、見透かされてたとは……俺もまだまだ修行が足らんな」

「当然じゃない、こういう事で女に勝てる訳ないでしょ」

「……恐れ入りました」

いやはや、なんともはや、そんな風に想われていたとは。

男冥利に尽きるってもんだねい。

俺がキュルケを好きになったのは勿論見た目も好みばっちりだつて事もあるが、一番は中身の優しさなんだよな。

言動や行動は派手かもしれないが、キュルケはなんとというかかなり母性的なんだと思ううんだよな。

ガリアの関係者と知りながらタバサの傍に居続けた事とか、学院襲撃の際に体張ってコルベル先生を守った事とかさ。

ああいった優しさってのは、誰でも持てるものじゃない。

だからこそ大事にして貰いたいもんだ。

……

その後数時間してルイズが戻って来たが……真っ白に燃え尽きていた。

燃え尽きる程に絞られれば恐らくは改善に向かうだろう。

……何となく無理な気がひしひしとするが……まあ気にしないでおこつ。

とりあえず、ルイズは今日一杯再起動しそうもなく、タバサはタバサで腹いっぱいになって昼寝モードに入ってしまったいやる事無くなつたのでキュルケとのんびり過ごす事に。

まああれだね、どうせ休み一杯ここにいる訳だし、多分カリーヌ

さんから決闘なり挑まれたり忙しくなるだろうから今の内に休んで  
おじじい。

んでは、今日のところはお休みなして。

## 第九話（後書き）

今回はあくまで休暇の導入部分です。

カリーンとの決闘は何れ書く予定です、その際できる限り派手な戦闘にしたいと考えているのですが、戦闘描写をどうしたものか非常に悩ましいところなので、また更新が遅れるかもしれないですがどうかご容赦下さい。

なお、ルイズの奇行については……やりすぎましたかね？

本作ではルイズは子供っぽい娘として位置づけていますので、これくらいやっとなかなか……。

まああれです、年の離れた妹が兄に甘えるような感じですかね？

出来る限り本作では血生臭い事は避けて、ほのぼのというかそんな方面でいきたいと考えています。

んでは！

## 第十話

ルイズの実家に到着してから、既に一週間が経過。

この一週間にカトレアさんの診察を何度か試し、その際採血や医療器具使つての体内の調査もしてみたが、悪化しているような部分や腫瘍なども確認する事が出来なかった。

故に幾ら調べても病気と断定する事が出来なかった。

ただ一つだけ気になるのが、体内の細胞が程度の差こそあれ必ずダメージを受けているという事。

細胞にダメージが残るとなると、相当酷い外傷を受けるか本当に重病に掛かったような場合だけだろう。

ご両親にも聞いてみたが、カトレアさんが産まれてから大きな外傷を伴う怪我をした事も無い様だったし、かといって今のカトレアさんは病気では無いと思われる。

そうやって来ると、考え方を変えねばならないのだろうけど……。  
細胞にダメージが残る……魔法を使うと悪化する……病気の類では無い……。

……うん。

どうなってるんだろう、病気でも無く外傷も無く細胞にだけダメージが残るとなると……考えられる事は……。

……あ。

たった一つだけ可能性が無い訳じゃない。

でも……俺が想像している通りだとすると……カトレアさんて、ある意味では物凄い稀有な体質しているという事に……。

とりあえず、リーヴスラシルの能力を使ってカトレアさんの精神

力を確認してみる必要がある。  
よし、皆に説明しておこう。

### 《大広間》

「という訳で、色々と診察させて貰った結果、病気では無いと考えられる訳なんです……」

「……私は治らないのですね……」

「……ちい姉さま……」

「こらこら、まだ治らないと決まった訳じゃないでしょう。」

姉妹揃ってそんな顔しないでくれ。

物凄く罪悪感湧いてくるから……」。

「いや、治らないと決まった訳じゃない。現状の症状と診察した結果、それと魔法を使うと悪化するという事実から一つだけ思い当たる事があるんだ。」

「……それは？」

「それを説明する前に、先に予備知識として説明しておく事があります。少し長くはなりますが、質問などは後ほどに。」

「ええ……」

人の精神力について、こんな感じで説明。

- ・ 一般的に精神力には『プラス』と『マイナス』の性質がある
- ・ 精神力の性質はどちらか一方のみである。
- ・ これは生まれ持つもので、生涯変わる事は無い
- ・ 性質の違いによる優劣は存在しない

この内容についてはハルケギニアには存在しない理論なので、皆完全には理解し切れてはいないようだ。

とはいえ、ある程度は理解してくれていると思われる。

それにだ、今しがたリーヴスラシルの能力を使いカトレアさんの精神力を見てみたが……予想通り、『プラス』と『マイナス』の両方の精神力が存在する。

しかも、『プラス』側が大きすぎてバランスが全く取れていない。これじゃ魔法を使う際に反発が起きるのも無理は無いし、魔法を使えば悪化する訳だ。

この症状は魔法や秘薬じゃ治せないわなあ……。

「とまあ、大まかに言うところこんな感じですね」

「うむ、そのような事実が我々の精神力にあつたとは……」

「普通の人ならプラスかマイナスのどちらからなんですが……カトレアさんの場合は少し異なりまして……」

「……と、言うこと？」

「物凄く珍しいのですが、カトレアさんはプラスとマイナスの両方の精神力を持っています」

「なんと……」

「しかも、その二つがバランス取れていない。故に体内で暴発し細胞単位でダメージを与える訳です。これでは魔法や秘薬では一時的に回復はしても根本的な回復は出来ません。」

「……そ、そんなあ……」

確かに普通なら悲観するところだろう。

諦めてしまっだろう。

駄菓子菓子！

今この場には俺がいるのだよ！

俺のリーヴスラシルの能力を使えばあら不思議、『マイナス』の



精神力の性質を『プラス』に変更する事が出来る！

そうすれば、今のカトレアさんの問題も万事解決！

後はダメージの残った細胞を魔法や秘薬でゆっくりと回復させつつ、今まで失った体力や筋力を取り戻していけば大丈夫なのさ！

うっし、落ち込んでる皆さんに早速説明しよう！

《説明中……説明中……説明中……》

「……じゃ、じゃあ、タケルの力を使えばちい姉さまは……」

「カトレアは……治るのか？」

「もうバッチリ！ まあ、今までのダメージとかも蓄積してるんで、完璧に治るには多少時間は掛かるでしょうけど、間違いなく健康体になれますよ！」

おゝ皆の顔に生気が戻って来た。

そりゃそうだよなあ、もう半ば諦めてた症状が治るかもしれないんだし。

喜ぶのも無理はない。

エレオノールさんも凄く嬉しそうだしさ。

うん、これは気合を入れねば！

「……タ、タケル……あんたって人は……どんだけ最高なのよおおー！」

「ふははははは、俺の辞書に不可能の文字は無いのだ！ ちゃんと塗りつぶしてあるからなっ！」

うっし、それじゃ早速にでも始めるとしよう。

とはいえ、吸収する際は細心の注意を払って実行せねば。

間違つて『プラス』の精神力も吸い取らないように気をつけねば！

「うっし、それじゃカトレアさん、早速ですが始めるとしましょう。途中苦しいとかがあったら、右手を挙げて合図をお願いします。」

「は、はい、わかりましたわ。ミスタ・クサナギ、どうかよろしくお願いします。」

「わしからも頼む、どうか娘を……」

「お任せ下さい、バツチリ治しますから！」

おっしや、一つ気合入れてやったりしますかっ！

《精神力変換作業中……暫くお待ち下さい》

ぶふう……こりや思った以上に神経使うな……。

一度にやろうとすると、どうしても余計な部分まで吸い取ってしまつ。

戦場とかで使う場合は、そんな事気にする必要は無いだろうけど、今回に限っては絶対に余分な部分を吸い取る訳にはいかない。

しんどいけど、ここは一つ漢を見せねばっ！

「……タ、タケル……大丈夫……？」

「あ、ああ、しんどいけどなんとか……もう少しなんでカトレアさんも頑張ってください」

「は、はい……」

やばいな、此処に来てカトレアさんの体力の低さがネックになり始めたか……。

とはいえ、今の状態で魔法や秘薬なんぞ使ったら、それこそ何が

起きるかわかったもんじゃありません。

苦しいだろうけど、ここは耐えてくれ、カトリアさん……。

「ちい姉さま……」

「もう少し……後ほんの少しなんで、耐えて下さい……」

「は、はい……」

……

……

……

おっしや、吸い取り作業完了！

後はこれを変換して……体内に戻すつと！

だがここで失敗こくと大変だから、慎重にやらねば！

……

……

……

「……ふう……完了だ、これでカトリアさんの体内の精神力は全て『プラス』の性質に変わった……」

「……それじゃ、ちい姉さまは？」

「ああ、原因となっていた部分が改善したから恐らくもう血を吐くような事は無いだろう。ただ、今は大分疲れているだろうから一先ず休ませておいて、詳細については後で診察しよう。」

「う、うん、わかったわ……」

「それじゃ公爵、夫人、カトレアさんを休ませておいて下さい」  
「う、うむ……」

「いっや〜今回はマジで疲れた……」。

「よもやここまで神経使う事になるとわ……」。

でもまあ、これでカトレアさんは救えた訳だから、この世界での  
第二目標はクリア出来た。

後はテファだけ……テファに関してはまだ手を出す事は出来な  
い。

テファに関しては、アルビオンに行く時になるだろう。

……まあ、その時はあのアンリエッタと会わなきゃいけないんだ  
が……俺あいつだけは駄目なんだよなあ……

そもそも王族なんて、所詮は政治の道具でしかない訳で……優雅  
な生活と引き換えに自由を切り売りしているようなもんだろう。  
にもかかわらず自由恋愛したいとか……もうね、アホかとバカか  
と……

その上、親友を内戦地に送り出すわ、私怨で戦争吹っかけるわ……  
…王族うんぬんの前に人間として終わってる。

あれに会った時にボロクソに言っつてしまいそうな自分が怖い……  
多分言うだろうけど。

……ま、まあ、あのアホの事はなるべく考えないようにしよう。

序に出来る限り、関わらないようにもしておこう。

絶対に碌な事にはならん。

知らないけどきつとそう！

とりあえず治療も完了したし、カトレアさんについての今後の事を説明しておかねば。

何せ体力の低下がヤバイ……恐らくは細胞が受けているダメージと、今まで床に臥せっていてまともに運動していなかったせいだろう。

なので今後暫くは体力作りと、細胞が受けたダメージの回復に努めてもらう必要がある。

これには家族全員の協力も必要だし、しっかりと説明せねば！

「え〜と、それではカトレアさんの今後について説明します」

「ちい姉さまの今後？」

「ああ、調べたところ細胞単位でのダメージと体力の低下が不味い状態なんだ。このままだと日常生活にも影響が出かねない。なので、今後カトレアさんには俺が作る運動メニューをこなして貰い体力作りと体内環境正常化に努めて貰う。」

「運動メニュー？」

「そそそ、といつてもいきなり走りこみとかは無理だから、先ずはこの広い屋敷の庭を毎日一定の時間散歩して貰う。んで、ある程度体力が付いたら走りこみやストレッチ等をして貰う。まあ、ぶつちやけた話もう体の方は治ってるから、後はゆっくりとやっていけば問題ねえさ。」

後はあれかな、食事にも気をつけた方がいいだろう。

何せハルケギニアの貴族の食事って……脂っこいのが多い。

あんなの毎日食ってたら、確実に生活習慣病になってしまう。

特にカトレアさんのように体力が低くて、なおかつ運動不足の人は余計にだ。

「しかし、もう諦め掛けていたカトレアの病気がこつも容易く治る

とわ……」

「そうですね、あなた……私ももう半ば諦めていましたのに……」

「ルイズは本当にいい使い魔を見つけたようだ」

「え、えへへ……」

そう言われるのは嬉しい限りやね。

とはいえ、原因を取り除いただけであって今までのツケがある以上楽観する事は出来ない。

しっかりと体力作って、健康な体になって貰わないと。

……

カトレアさんの今後の運動療法や食事制限等について細かく説明。娘の事なので、ヴァリエール公爵も夫人も物凄い真剣に聞いてくれていた。

後は実際にカトレアさんが目を覚まして診察をするのみ。

とはいえ、今日のところは目を覚ましそうも無いので各自部屋でゆっくりする事に。

### 《ルイズの部屋》

「いやはや、ほんと疲れたわ……」

「お疲れ様、タケル」

「ああ」

「それにしても、タケルってほんと何でも出来るわね」

「そうでもねえって……ああ、そうだ、カトレアさんの治療の事は

言いふらすなよ、色々面倒だから」  
「わかってるわよ」

ロマリアのクソ坊主共に知られでもしたら些か面倒だ。  
別に喧嘩売ってくるなら買うけど……そうなると周りの人にも迷惑が掛かる。

学院長の爺さんやコルベール先生、勿論ルイズやキュルケ、タバサにだって迷惑が掛かる。  
それだけは絶対に避けなきゃならん。

とはいえなあ、何れはロマリアのアホ教皇から難癖付けられるだろうなあ。

それまでに何とか味方を増やさないと。  
ヴァリエール家はもう味方に付けたも同然だし、後はガリア王家とアルビオンか。

アルビオンに関しては、アホ姫関係で向かう事になるだろうしその時にでも恩を売っておけばいい。

ガリア王家に関しては、タバサ絡みで力チ合う事になるだろう。そうなったらそうなたで、ジヨゼフのアホをなんとかすりゃいい。

記録は俺自身使えるし、なんとでもなるだろう。

ま、その前に、タバサの母親の治療やら滞在先やら色々と準備せにゃならんけど。

「……タケル、一つ聞きたい」

「ん〜どしたタバサ」

「心が壊れた人間を治す事は出来る？」

うへ、今の段階でその話出すのか。

間違いなく母親の事だよなあ。

うーん、ここで答えておくべきか悩むが……でもまあ、あれか、どうせその内治す訳だし治せるって道だけは示しておこう。

まあ、今すぐは無理だけど。

何せ準備が何も出来ていないからなあ。

「症状がどういったものかわからん以上、治せるかどうかの判断は出来んよ」

「……エルフの毒にやられた」

「あゝもしかして、水の精霊の力を混入したあれか」

「……知っているの?!」

「ああ、成分とかも知ってる。俺が予想している通りの毒なら、結構簡単に解毒できつぞ。」

「……!!」

あれって、所謂制約ギアスの効果を濃縮したようなもんだ。

制約ギアスは人の心を操るけど、あの薬はもっと踏み込んだ効果で心と  
いつか精神のバランスを崩壊させ更には記憶障害を引き起こさせる。  
確かタバサの母親って、人形をタバサと思いついて入っているみたいだ  
から、恐らくは間違いないだろう。

解毒する場合、普通のやり方だと非常に手間掛かるけど、ディスペル  
使える俺がいる以上は簡単。

体内の制約ギアスの魔法効果ディスペルを解除使って消せばいいだけだし。

後は精神を安定させる薬草なんかで、ゆっくりと治療すればいい。  
とはいえねえ、今すぐに治療するのは……。

「つか、んな真剣に聞くなって事は……もしかして身内がやられてん  
のか?」

「……母様が……」

「なるほどねえ……」



「……お願い、母様を……」

「うん、治すのは構わんが、どうしてエルフの毒なんぞ受けたんだ？」

「……」

「なんかやばいのか？」

「……それは」

やっぱり幾らタバサでも、なかなか言い出せないか。

そりゃそうだよなあ、下手すれば親友達を巻き込むかもしれないんだし。

ずっと渴望し続けている事とはいえなあ……。

はあ、ほんと、やるせないもんだわ。

「流石に事情を知らないままってのは正直難しいぞ」

「……」

「でもまああれだ、俺は基本的にタバサの味方だ、それだけは覚えといてくれ」

「勿論私だってタバサの味方よ」

「私もよ」

「……ありがとう」

「まあ、心の整理をしっかり付けて、それから言えばいい。そんなきや全力全開で力になってやる。」

「……うん」

タバサの母親を治療したら、白帝に頼んで実家に連れてくてもいいんだが。

でもそうになると、色々ややこしい事になりそうな予感がする。

潜伏するなら、現状ではゲルマニアが一番いいだろう。

何せガリアともタメ張れる位の大国な訳だし。

トリストインじゃ……正直厳しい。

その辺りも含め、一度きつちりと話し合った方がいいだろう。  
お互いの為にも。

「とりあえずあれだ、タバサの件については、何れきつちり話し合おう」

「そうね、その時はツエルプストー家も助力出来るようにお父様に頼んでみるわ」

「私も、お父様達に頼んでみる」

「てわけだタバサ、しっかりと身の回り固めてそれからきつちり話し合おう」

「うん、わかった」

「うっし、そんじゃ今日のところはこの話はお終い。カトレアさんが起きるまで一休みしておこう。」

「ええ」

「そうね」

「……コク」

カトレアさんについては、樂觀は出来ないが原因自体は排除出来たしなんとかなるだろう。

タバサについても、潜伏先やらなんやら細かい事を決めればどうとでもなる。

後はまあエレオノールの事やらワルドの事やら色々あるけど、とりあえずあれだ、今はゆっくり休もう。

あれこれ悩むのはまた明日からしておこう。

はあ、ほんと、悩み事は尽きないねえ……。

## 第十一話

カトレアさんの治療から、一日が経過。

そろそろ彼女も起きる頃だろうから、皆を連れて診察に行くとしてよう。

恐らく問題は無いだろうけど、念には念を入れておかねば。

何せ今までが今までだったし。

「んじゃ、そろそろカトレアさんも起きる頃だろうし診察に行くか」

「ちい姉さま、大丈夫かしら……」

「問題は無いと思うぞ。まあ、診察といっても念の為さ。」

「そう……ならいいんだけど……」

ルイズも案外心配性だなあ。

とはいえ、今までが今までだったし、ルイズにとっては大事な姉である以上は無理も無いだろう。

エレオノールさんも、もう少し素直になればねえ……ルイズからももつと懐かれると思うんだが。

まあ、彼女の場合は色々柵やらなんやらあんだろうし、既に二十七歳である以上今更生き方を変えるのは難しいだろうなあ……。

せめて彼女の性格を受け入れられる漢がいれば、彼女も変わると思うんだが……。

難しいよなあ……。

とまあ、そんな事を考えながら、途中でヴァリエール公爵夫妻と合流し、一路カトレアさんの部屋へ。

「カトレア、入るぞ」

「はい、お父様」

部屋に入ると既にカトレアさんは起きていた。

見たところ顔色もいいし、体調も良さそうではある。

後は各種検査をして、問題が無ければ明日からでも体力作りの為の運動をして貰おう。

「ちい姉さま！」

と、そんな事を考えていたらルイズが飛び出しカトレアさんに抱きついた。

そのままあの豊満な胸に顔を埋めている……ルイズちょっとそこ代われ……。

見るとルイズは肩を震わせている。

まあ、大好きな姉だからなあ、心配だったんだろう。

しかし、いい光景だねえ。

お兄さんも、ついつい貰い泣きしたくなってきちゃうぜ。

「どうやら体の具合は良さそうですね」

「ええ、凄く体が軽い感じですよ」

今まで反発しあってたものが無くなって、体内環境が正常になり始めたからだろう。

という事は、精神力の方は上手い事体に馴染んでいるようだ。

これなら問題は無いと思うが、念には念を入れて診察だけはきっちりしておこう。

「問題は無さそうですけど、一応診察だけはきっちりしておきましょうか」

「うむ、わしからも頼む」

「はい、お願いいたしますわ」

「了解、ほれルイズ、嬉しいのは分かるが診察するからちよつと離れてくれ」

「う、うん……」

「後で好きなだけ甘えとけて。ああ、ちゃんとエレオノールさんにも甘えておけよ、あの人だってお前の事心配してたんだからな。」

「わかつてるわ……昨日酷い事言っちゃったもの、謝らないと」

「大丈夫だろう、あの人がお前を嫌うなんて月が落ちてもあり得んだろ」

「ふふ、そうね、エレオノール姉さまはルイズの事が好きだもの」

「ほれ、カトレアさんもそう言ってるし」

「うん、エレオノール姉さまともちゃんと話してるわ」

「おう、そうしてやんな。それじゃ診察しますね。」

「はい」

診察を開始したところ、血流は問題なし。

聴診器で呼吸も確認したが、これまた問題なし……その際少しだけカトレアさんの下着が見えたのが役得だった。

んで、脈のチェックや扁桃腺、その他諸々チェックしたが異常無し。

後は体力を付けていけば、ダメージを受けている細胞の方も自然治癒していけよう。

うん、これなら今後命に関わるような事は無い。

いやはや、よかったよかった。

「うん、診察の結果、どこも異常無し。後は体力を付けて自然治癒力を高めていけば、ダメージを受けている細胞の方も徐々に回復す

るでしょう。」

「それではカトレアは……」

「ええ、命に関わるような事はもう無いと断言出来ます。まあ、今後の生活では適度な運動、栄養のバランスの行き届いた食事、それとしっかりとした睡眠を取る事が重要ですね。」

「そ、そうか……カトレアが……」

「タケル……ちい姉さまを助けてくれて、本当に、ありがとう……ぐすっ……」

「どういたしまして。て、ほら、せつかく目出度い日なんだからルイズが泣いてちゃ駄目だろ。しっかり笑顔でいなきゃ。」

「う、うん！」

うむ、やっぱりルイズの笑顔は素晴らしい。

こりゃ俺もルイズの事、随分と気に入ってるんだなあ。

ああ、なんか、ワルドなんかに渡したく無くなって来た。

つか、嫁に出したくない！

「私わたくしからもお礼を……本当にありがとうございます……ミスタ・クサナギ」

「いいんすよ、まあ、せつかくだしルイズと一緒にいてやってください。俺はその間に公爵達に今後の事を説明しておきますんで。いいですよ、公爵。」

「うむ、貴殿には色々と聞いておかねばなるまい」

「ええ、そうですね、あなた」

「ほんじゃ、別室で話すしましょう。ルイズ、しっかり甘えておけよ。」

「うん！」

ふう、カトレアさんはこれでなんとかなるだろう。

運動やらなんやらは、公爵達の監督の下やって貰えばいいだろう

し、そう問題になるような事もあるまい。

となれば、直近での懸念事項としてはワルドの奴をどうするか……。

あいつって、原作でも色んな二次創作でも結構悪役的な扱いが多かったりするけど、俺はそうじゃないと思うんだよねえ。

多分だけど、母親が狂人として扱われてしまい、あいつ自身大事にしていた母親の名誉を回復しようと急ぎすぎたんじゃないかと思う。

だから、手段を選ぶ事が出来ず、最終的にはレコンキスタなんていう負けフラグ満載の組織に身を置いてしまったんじゃないかと、そう思う。

であればだ、あいつが求めている聖地に連れて行き、聖地というのがどういったものであるのかを教えてやる必要があるだろう。その上で、今後の身の振り方なんかも一緒に考えてやらなきゃならんだろう。

何せあいつ、マジで相談出来る友達とか少なそうだし。

なら、俺位はあいつと腹割って話せるような友達になってもいいんじゃないかと思う。

それであいつの考え方や生き方を変えられるとは思わないけど、やらないよりはマシだろう。

何とか、あいつに接触を持てればいいんだがなあ……。

## 《大広間》

ヴァリエール公爵と夫人に、再度今後のカトレアさんの生活につ

いて説明。

今後暫くの間は、屋敷の庭を一定の時間散歩して貰う。

それが体力的に疲れなく行えるようになったら、今度は屋敷の周りを歩く事や筋トレ、ストレッチ等も加えていくように説明。

その際、魔法の使用は一切厳禁とするように付け加えておいた。

ハルケギニアのメイジって、直ぐに魔法に頼るもんだから、筋力の低下が起こり易い。

重い物を運ぶにも浮遊レビテーションを使うし、少しの距離でも飛行フライを使うもんだから、あまりにも筋肉を使う機会が無さ過ぎる。

これでは筋力も低下するし、病気にもなり易くなってしまう。

それを防止する為にも、今後暫くの間は一切の魔法使用を禁止するようにした。

これには公爵も夫人も同意してくれていて、自分達も運動不足甲斐性の為にと実践していくとの事。

まあ、恐らく翌日辺りに筋肉痛で地獄見る事になりそうではあるけど。

「しかし、貴殿には本当に礼を尽くしても足りぬ。ルイズはおるかカトレアまで救って頂いたとなるとな。」

「いいんですよ、どちらも俺がそうすべきと思ってやった事です。それに、ルイズは凄くいい娘ですよ、一緒にいて楽しいですし。」

「そうか……重ねて礼を言う、本当にありがとう。」

「私わたくしからもお礼を。娘を救って頂き、ありがとうございます。」

「どういたしまして。まあ、これからも俺はルイズの傍にいますよ。」

「そうか、きっとルイズも喜ぶだろう。」

しかし、お二人と話していて思ったが本当にルイズもご両親に



恵まれていると思う。

貴族としてある程度厳格でなきゃいけないんだろうけど、一皮向けばこの人達は凄くいい親だ。

他のトリステイン貴族も、この人達みたいなのが多ければ、きつともっといい国になるんだろうけどねえ。

ほんと、憎まれっ子世にはばかるとはよく言ったもんだわ。

……

それから二つ三の注意事項や細かい事を話し合い、今後、長期の休みの際などに俺が診察を受け持つ事に決定。

何かあれば、鷹便等で一報して貰う事に。

余程の事が無ければ問題ないだろうとは思うが、念には念を入れておかねばならない。

何せ俺の信望する巨乳三女神の一人である以上、万が一なんて事があつてはならんからなっ！

さてと、公爵達との話し合いも終わった事だし、客間に戻ってキユルケ達とのんびりしてますか。

《一方その頃、ルイズとカトレアは……》

タケルのおかげでちい姉さまも元気になったし、ほんと、頭が上がりないわね。

今度何かお礼でも考えておこうかしら？

でも、タケルってあんまり欲しい物とか無さそうだし……うん……。

「ねえ、ルイズ」

「何でしょうか、ちい姉さま？」

「ミスタ・クサナギの事だけ……ルイズはあの方の事は好きかしら？」

「ふえ?!」

ど、どどどど、どうして突然そんな事を?!

そ、そりゃ、タケルには色々やって貰ってるし感謝もしてる……。

あいつが居なければ、今でも私は魔法が使えずに苦しんでいたと思う。

で、でも、だからって、好きかどうかなんて……。

あう……。

「ふふ、焦らなくてもゆっくり答えを出せばいいと思っわ。私も応援するから。」

「えと……はい……」

「ふふ」

タ、タケルは私の事……どう思ってるんだろう。

色々世話も焼いてくれてるし、嫌いつて事は無いと思うんだけど……。

でも、今までの私への接し方を見ると、何だか妹っぽく思われる感じがするのよね。

……やっぱりおっぱい大きくないと駄目なのかなあ。

今の私はまだまだちっちゃいし……けどあれよね、私だって豊胸体操で少しずつ大きくなってるし、ちい姉さまがあれだけ大きいんだもの、妹の私だって素質あるはずよ!

見てなさいよタケル!

絶対ギャフンと言わせてやるんだからねっ！

《再び場面は主人公へ》

何だかルイズが進んではいけない方向に進み始めている気がしたが気のせいだろうか？

とりあえず、暫くの間はする事が無いのをどうすべきか考えねば。ルイズ達とマターリ過ぎすのもいいんだけど、正直一ヶ月もの間マターリしているとニートまっしぐらな気がしてならん。

何か考えないとなあ。

にしてもだ、これだけ早い段階でカトレアさんの治療を終わらせヴァリエール家とも繋がりが出来ているとなると、もうほぼ原作通りのスケジュールでは進まないと考えた方がいいだろう。

こうなってくると原作の流れを完璧に無視ぶっこいて、重要そうなイベントは自分からクリアしていくべきかもしれない。

ならば、直近で重要と思われるのは水の精霊との接触とゼロ戦の取得、後は最後の乳女神であるテファとの接触か。

水の精霊との接触は、タバサの件も含めて確実にこなすべきだろう。

ゼロ戦に関しては、ガソリンも地球に行けば余裕で手に入るし、これまた手に入れさえすれば後はどうとでもなる。

一番の問題はテファとの接触かあ。

アニメだとテファとフーケの接点が無かったけどこの世界ではどうなのかなあ。

フーケも美人だし、放っておくのもあれだから一応接触して味方

に引き込むかね。

学院襲撃されても色々と面倒だし、俺自身シュヴァリエなんて興味無いし。

つか、下手に目立ってアンリエッタと無駄な接触をする事になるのは避けねばならない。

あれはもうあれだ、ウェールズになんとしても押し付けるべきだ。なので、アンリエッタからの依頼をルイズが受けた際にアルビオンへ行く事になったら、問答無用で貴族派を潰そう。

その為にも、何とかしてワルドと接触して奴を味方に付けたいよなあ。

うーん、何かいい方法はじゃーものか。

「失礼いたします、お夕食の準備が整いましたので、皆様食堂まで起こし下さいませ」

「ういゝす、キュルケ、タバサ、行こうか」

「ええ」

「……コク」

## 《食堂》

食堂に着くと既に公爵夫妻とルイズにカトレアさん、それとエレオノールさんも席に着いていた。

俺達も席に着き夕食が始まった。

何というか相も変わらずタバサが物凄い勢いで食べている。

キュルケは何というか上品な食べ方だ。

ルイズは……ああもう、また口の周りに付けてるよ。

やれやれ、本当にもう手間のかかるやつちゃ。

「ほらルイズ、口の周り付いてるってばよ」

「ふえ？」

「こつち向け、拭いてやつから……たくもつ、ほんと手間掛かるやつちゃな」

しかしまあ、こうしてルイズの世話焼いてるのも悪くないと思えるようになって来たよなあ。

何て言うか、ルイズの行動見ると本当に可愛く思える。

あれかね、俺ってルイズに惚れたか？

……よく考えてみれば何だかんだで一番長く一緒にいるのルイズだし、そうなのかもしれないなあ。

とはいえ、三大乳女神は諦めたりはしませんよ、絶対に惚れさせてみせますともさ！

まあ、キュルケは俺の事好きだって言ってくれてるし、後はカトレアさんとテファだけどこつちも俺の漢気見せて何としても落としてみせよう。

つか、もうあれじゃねえかな、ルイズとキュルケとタバサは三人共俺の嫁って事でいいんじゃないやなかるうか？

別に誰に遠慮する必要も無いし……よし決めた、三人共俺の嫁！でもまあ、行き成りそれを言ってもあれだしもつと時間を掛けて三人とより親密になってから打ち明けよう。

「それはそうとルイズよ」

「はい、お父様」

「先ほど手紙が届いたが、三日後にワルド子爵が来るそうだ」

「ワルド様が？」

……マジすか？

そりゃ願っても無いチャンスじゃないか！

奴に接触し、問答無用で聖地まで拉致ってしまえば奴の裏切りフラグを叩き折る事が出来るだろう。

後は奴をこちらの味方に引き込んで、レコンキスタのスパイにすれば……。

うっし、ここは何としても奴と接触を持たなくては！

その為にも……。

「ルイズ、ワルド子爵って誰だ？」

「えと……その……」

「ルイズの婚約者ですよ、まあ口約束程度のもですけど」

「何と?!」

「ルイズ、貴女婚約者なんて居たの？」

「う、うん……」

何だかあんまり嬉しそうじゃないな。

原作じゃもっとう憧憬のお兄様！

的な感じだったと思っただけど……違うのかな？

公爵夫妻も何だか乗り気じゃないっぽいし……どうなってんだ？

「しかし婚約者が来るつてのに、あんま嬉しそうじゃないな」

「……婚約者つて言っても実感ないんだもん。どっちかと言うと年の離れたお兄様つて感じだし。」

「へーそうなんか。んで、そのワルド子爵つてどんな人なのさ？」

「えと、グリフォン隊の隊長で風のスクウェアメイジなの」

「ほうほう、それだけ聞くとかなりのエリートじゃないのか？」

「そうだけど、でも、最近は会ってもいないし」

「ふむ、なるほど」

そりやまあ、幾ら婚約者でも長い間会ってもいないんじゃないか。

しかし、仮にも婚約者ならちつとは面倒見りやいいのになあ。

とはいえ、俺がいる以上はルイズは嫁にはやらん！

ルイズを嫁に欲しくば、俺を倒してからにするがいい、ふうははははは……いかにかん、少し思考が変な方向に。

……

その後は皆で楽しく夕食を共にした。

途中タバサがまたもや喉を詰まらせたりなど、細かいハプニングはあったが概ね平和だった。

食事の後は思い思いに談笑。

俺は同じ漢という事で公爵と話していたが、結構この人も苦労が絶えないらしく色々な愚痴を聞いた。

やれ周りの貴族は浅はかな連中が多いだの、王族は王族で責務を放棄している為に役に立たないだの……。

いやはや、まさか公爵の口から王族に対する不満が出るとは……。公爵も本当に気苦労が耐えないねえ……。これじゃ何時か確実に胃潰瘍になるか頭ハゲる。

ストレス解消の為に、ヘトヘトに疲れるまで運動して、一杯引っ掛けながら風呂入ってグッスリ寝るように伝えておいた。

普通に病気に掛かるより、ストレスを溜め込んで病気になる方がより危険だし。

……

その後、部屋に戻り各自風呂を済ませ就寝時間となった。

三日後にはワルドが来るみたいだし、その時に奴と接触して何としても味方に引き入れなければ。

ここが今後の勝負の分かれ目だぜ！

### 《公爵夫妻の部屋》

「あなた、カトレアの事ですけど……出来れば例の件はあの娘の望むようにしてあげたいんですけど」

「うむ、そうだな、わしもそれに依存は無い」

「では、明日にでもカトレアの気持ちを聞いておきましょう」

「そうしよう、その上でカトレアが望むならば……」

「ええ、そうですね」

### 《三度場面は主人公へ》

何だか俺にとってはとてつもなく嬉しいような危険なような、何とも言い難いフラグが成立した気がするが……気にしてもしようがないか。

まあ、とりあえず、三日後のワルドが来る日まではのんびりしていよう。

その後は色々忙しくなりそうだし、今から気引きしておかないと！



うっし、そんじゃ、寝よう！  
お休み、zzz……

## 第十二話

本日はワルドがヴァリエール家に来訪する日。

実際に来るのは、午後になるらしく今の所俺とキュルケとタバサは平和なもんだ。

まあ、ルイズは一応は婚約者って事もあり準備に追われている。ドレス用意したりとか色々忙しいらしく、朝からあっちゃこつちやと走り回っている。

それはそれとして、今日の夜にでも早速ではあるがワルドと接触してみようと思う。

その際こつちから聖地に行きたいかどうかを問い質し、奴の興味を引く事にする。

んで、少しでも興味ある素振りを見せたら……速攻拉致って聖地に直行。

後は野となれ山となれだ。

……しかし、何故に俺は聖地の事を知っているんだろう？

実際にアニメや原作じゃ細かい描写とか無かったし……あれか、これもまたあのド変態の仕業なのか？

『その通りじゃ！』

「む、また出やがったか、ド変態め！」

『まだその呼び方するのかの……わし悲しい……』

「キモイからやめろ……マジで気分悪くなるわ……」

どうしてこのド変態は……これで神様だってんだから世も未だ。

いつその事こいつ消滅した方が、世の為になるんじゃないかと真剣に悩む。

『……恐ろしい事を考える奴じやの』

「実際マジだろ、つか、何の用だ？」

『おぬしの先ほどの疑問と、少し能力に関して補足する事があったのでな』

「何？」

ド変態の話によると、先ず俺が聖地の情報を知っているのはド変態の仕業では無く俺が所望した能力<ゼロの使い魔に存在する魔法/魔法技術/知識の全て>によるものらしい。

というのも、聖地と言われている場所も実際には魔法により作られた場所なんだ。

なのであの能力の<知識の全て>の部分に該当するらしく、俺は聖地の情報を知りえている訳。

しかもだ、よくよく考えてみると……俺ってブリミルの正体も知ってるんだよなあ。

これってハルケギニアの人が聞いたら、多分心臓発作で死ぬんじゃないかって程、ある意味では衝撃的、ある意味では納得出来る情報だ。とはいえ、この情報に関してはおいそれと外に漏らす訳にはいかん。

公開するなら、何れ起きるであろうロマリアとのガチバトルの時にでも明かすしよう。

それと、能力の補足に関してだが……あのド変態め、何処まで俺をバグキャラ化させやがったんだよ……。

具体的に内容を聞いてみたが、もう正直……俺って人間やめてしまったのだろうかと本気で悩む程だ。

その補足内容は、先ず肉体についてラカンと同等という事で所望した為、所謂<気>というものが扱えるようになっていくという事で、これはギーシュとの戦闘時に既に確認済み。

だがここからがヤバイ。

ラカンと同等の肉体という事で、奴が使用した技やらその他諸々<気>を媒体とする技関係は全て使えるんだそうだ。

これは変態もある意味では予想外の事らしい。

よもやこんな事になるうとはなあ、もう少し吟味すべきだったかもしれない。

『という訳じゃ』

「なるほど、確かに予想外だ」

しかし、ラカンが使った技となると『ラカン・インパクト』とかも使えるって事が。

あれってぶつちやけた話、虚無より強いだろう。

あんななんぶつ放したら、それこそどんな被害が出るか……こりゃ自重しなきゃいけない。

敵軍共々味方まで撃滅とか洒落にならんわ。

『それと最後にじゃが、ラカンのアーティファクトである<千の顔を持つ英雄>ホ・ヘーロース・メタ・キーリオン・プロソーポーン』>をおぬしのポーチに入れておいたぞい』

「あんだと?!」

おいおいおい、あんな伝説級のアーティファクトなんて、チートどころの騒ぎじゃねえだろうが！

このクソ変態め、マジで何考えてやがる、俺にハルケギニアを滅ぼさせるつもりか！

『まあ、念のための保険じゃよ。ガンダールヴとも相性いいじゃろうしな。』

「そりゃそつだが……まあいい、非常時以外は使わないようにする」  
『それでいいじゃろ、んじゃさらばじゃ！』

言うだけ言ってまた消えやがったか。

あのクソ変態め、何時か必ずぶっ殺してやる……。

しかし、アーティファクトか……思いもよらない戦力を手に入れたちまった。

使用するならロマリアとの戦争になった場合とか大きな戦の時に限られるか。

常時あんな危険な代物使うわけにはいかない。

一対一とかの勝負の場合は、デルフを使えば十分だろう。

一応使い方に慣れておくべきだろうから、こっそり練習だけはおくか。

やれやれだぜ。

「タケル」

「およ、ルイズ、準備終わって……て、なんじゃそのド派手なドレスは……」

「うう……だっってお母様が……」

見ると、めっちゃフリフリな装飾超過多なゴスロリドレスを着たルイズがそこに……。

いやまあ、可愛いっちゃ可愛いけどさ……なんか違うね？

これじゃまるで……紅白時の小林 子のような気がするぞ……。  
なんというかアンバランスだなあ。

「ル、ルイズ……貴女その格好……ウププ……」  
「……プッ」

「わ、私だって好きでこんな格好してるんじゃないもんっ！」

「いやまあ、可愛いとは思っけどさ……何と言えいいのか……」  
「メントしづらいぞ、流石に……」

「うう……皆の視線が痛いわ……」

これって、カリィ又さんくそう呼ぶように言われたこの趣味なのかね？

娘にこの格好させるって……どこのマリーアントワネットですか  
貴女は……。

こりゃあれじゃねえのか、結婚式とかになったら、舞台装置付きのパーフェクト幸子になるんじゃないだろうか……。

ヤバイ、めっちゃ見てみたい気もするけど、爆笑しそうで怖い。

娘がこれって事は、今のカリィ又さんは果たしてどんな衣装なのやら、楽しみなような決して見てはいけないような。

……ヤバイ、想像したら笑ってしまいそうだ。

「と、とりあえずあれだ、そろそろ迎えに行くんだろ？」

「うん……」

「俺達はどうすっかね、一緒に行った方がいいか？」

「出来ればタケル達も来て欲しいわ」

「了解、んじゃ……ほれ、キュルケにタバサ、何時までも腹抱えてないで行くぞ」

「え、ええ……ウププ……」

「……コク」

「あうう……」

「あんま落ち込むなルイズ、可愛いには違い無いから……やり過ぎな気もするが……」

「言わないで……」

ルイズ的にも、母親の趣味には辟易しているって事が。

子供時代はよく母親の着せ替え人形になるって事はあるみたいだが、これは幾らなんでもやり過ぎだ。

流石にこの状態で表歩く事はできんだろうなあ。

その辺りも追々カーリ又さんに話しておくか……流石に不憫でならん。

### 《玄関》

さてと、ワルドの出迎えに来た訳だが……何なのあのカーリ又さんの衣装は……。

予想した通り過ぎて逆に嘖くわ！

何だよ、あの頭！

どんなメイクしたらあんなバベルの塔のような頭になんだよ！

まさか、あれって髪の毛に固定化掛けてんのか？

美的感覚を疑うレベルだな、ありや……。

と、そんな事を考えていたら、一頭のグリフォンが降りて来た。ワルドのご到着のようだ。

「お久しぶりでございます、ヴァリエール公爵閣下」

「うむ、ワルド子爵も息災か」

「はい」

ふむ、やっぱり原作と同じ髭の美丈夫といったところか。

しかし、どうもよそよそしいというか、何か妙な感じを受ける。

それに加えて何と言うべきか奴の視線がルイズを見ていない気がする。

確か奴はルイズの虚無としての力を利用しようとしてたはずだから、心象悪くなるような事はしないと思うんだが……一体どうなってるんだ？

「ルイズも久しぶりだね」

「はい、ワルド様」

「ところで、そちらの男性は？」

「えと……」

「ああ、ルイズに召喚されたロバ・アル・カリイエ出身の者ですよ。名前は草薙猛、苗字のクサナギか名前のタケル好きな方で呼んで下さい。」

「……人間を使い魔にしたのかい、ルイズ」

「えと、その……はい」

「双方合意の上での話ですからね、特に問題はありませんよ。それよりもここで話さずに移動しません？」

「そうだな。では、広間に行きましょう。」



広間に到着後、ワルドからの近況報告やらがヴァリエール公爵に  
対してされた後は、皆で雑談タイムとなった。

その間にワルドと幾つか話してみたが、かなり真面目な奴みたい  
だ。

だが、話している間も思ったのだが、どうもワルドはルイズを見  
ていない気がする。

というか、どうにも落ち着いていない感じがしてならない。

やっぱあれかね、レコン・キスタと通じてるから余裕が無い状態  
なのか？

その辺りについても、後で探りを入れてみるか。

《数時間経過……》

ワルド到着から既に数時間が経過、現在は既に夜中だ。  
ルイズ達は既に寝ている……何時もの如くだらしない寝方してる  
が……。

とりあえずルイズ達は置いておいて、これからワルドの部屋へ向  
かう。

こんな夜中に漢の部屋に行くのもあれだが、色々と聞かれると不  
味い話が多いので全員が寝静まったこの深夜を狙った訳だ。

とはいえ、一部はまだ起きているようなんだが……。  
ま、とにかく行くでしょう。

## 《ワルドの部屋》

さてと、ワルドの部屋に着いたはいいがどう話を持っていくかねえ。

まあ、あれかな、お為ごかしてもあれだし直球勝負で行くか……行き当たりばったりな気がしてならないけど。

「僕に何か御用かな、使い魔君」

ありやま、考え事してたらワルドの方から出てきたよ。  
て、よく考えれば当たり前か。

ワルドは風系統のスクウェアだし、気配には敏感なはずだし。  
俺が扉前に来る前に既に感じていたんだろ……まあそれならそれでいいや、余計な手間が省けた。

241

「ああ、ちよいと話しがあってね、いいかい」

「ああ、構わないよ」

「んじゃ、ちよっくらお邪魔するぜい」

そうして部屋の中に入り、ソファーに腰掛けると向かい側にワルドも座った。

「ごちゃごちゃとお為ごかしてもあれだし、直球勝負でいきますか！」

ワルドを引き入れない事にはこれから先面倒だ。

特にこいつと戦闘となった場合に、後々フーケ絡みでややこしい事になる。

だからこそ、なんとしてでも奴を正しい道に戻さなきゃならん。その為にも下手こかないように注意して当たらねば！

「それで話というのは？」

「ん〜その前に二〜三質問してもいいかい？」

「ああ、答えられる事ならね」

「んじゃ先ずは……」

ワルドの経歴などを簡単に確認。

とりあえず、経歴上は原作と大差ないと確認が取れた。

これなら聖地を目指しているってのは間違いないだろう。

ただ、どうにもルイズとの婚約についてはあんまり気乗りしていない感じ。

むしろ、別に好きな女がいるっぽい感じだ。

う〜む、謎だ……。

「答えてくれてあながと。やっぱり聞いてた通りのエリートだねえ。」

「いや、僕は自分の夢を叶える事だけを目標にしているだけさ」

「それでもその為に頑張れるってのは凄い事だと思うよ。早々出来る事じゃないしさ。」

「そう言っつて貰えると素直に嬉しいね」

ふむ、原作よりも割といい奴っぽい感じだなあ。

原作だともっとこつこつ、キザっぽいとか鼻持ちなら無いとか……そんな感じだったんだけど。

でも、このワルドなら益々味方に欲しい。

確実にいい相棒になると直感出来るぜ。

「それで、君の話というのは？」

「ああ、それなんだけどさ……正直に答えて欲しいんだが……あんな、聖地に行きたいか？」

「……何故、それを僕に聞くのかね？」

反応ありか……やっぱり聖地を求めてるのか。

これも母親の為なのか、それとも……。

理由はどうあれ、これならこっちに引き込むのも難しくは無い。

白帝に頼めば聖地なんて速攻で行けるしさ。

「何故かと聞かれれば情報源は明かせない。ただ、俺は知っているんだ、あんたの母親は聖地を求めてた事を。んで、あんた自身は母親の遺志を継ごうとした。違うかい？」

まあ、そう簡単には答えてくれねえだろう……レコンキスタの事とかバレルるマジでヤバイ事もある。

何よりこいつにとっての一番の目的が達成出来なくなっちまう可能性が高まる。

それじゃ話せなくて当然だ。

だが、それも普通ならの話。

今ここには普通じゃない俺が居る。

レコンキスタに入るよりも確実に聖地へ連れて行ってやる事が出来る。

そうすれば、優秀なこいつを失わずに済むし、後々の面倒事も回避出来る。

だからこそ、ここで白状して貰う必要があるんだ……悪いけど追撃させて貰うぜ！

「正直に言っちまいなって、その為に国裏切ってまでレコン・キスタに加入してんだろ？」

「……！！！」

「けどさ、あんな寄せ集めの組織にいたって聖地には行けないぜ」

まあ、トップもアホだしそもそもあいつら自身ガリアの狂王の傀儡でしかない。

ぶっちゃんけ、あの程度の戦力じゃどうも出来ん。

それにだ、そもそもマジで聖地を目指そうなんて奴いないだろう。王家を潰してその利権に乗っかるうってのが大半だろうし、後の連中はそもそも例の指輪の力で操られてるだけかもしれん。

そもそもあの組織の求心力の中核である虚無自体、アンドバリの指輪による偽者なんだから、指輪が失われたら速攻で瓦解するだろう。

それにこの世界には俺がいる以上、レコンキスタにアルビオン王家を潰させるような事はしない。

全力全開でレコンキスタは潰すつもりだ。

何しろアンリエッタを預ける先が無くなってしまふ。

正直、アンリエッタが女王になるよりも、ヴァリエール公爵が王になった方があらゆる意味で得策、というかアンリエッタはさっさとアルビオンに嫁に出してしまうのが、このトリスティンにとって

一番いいはずだ……本人にとつてもさ。

「それにだ、実を言えば俺は聖地の事をよく知ってるんだ。聖地がどついう場所で、何の為に存在しているかも知ってるんだよ。」

「な、何だつて！ それは本当なのか？！」

「大マジだ、そもそも聖地つてのはな……」

ここで俺が得たチート知識に含まれていた聖地についての説明を懇切丁寧にワルドに聞かせた。

まあ、ぶつちやけた話、聖地つてのは巨大な世界扉ワールドドアを固定しているだけなんだよね。

それが何の為かと言えば、ガンダールヴの武器を地球からハルケギニアに送り込む為なんだよ。

原作でもあつたあの破壊の杖や戦車とか、とにかく場違いな工芸品に武器系統が多いのはその為だ。

それを知ってるからこそエルフもあの土地を渡そうとはしないんだよ。

自分達が滅ぼされるきつかけになりかねないからなあ。

実際の所、ブリミルにとってはガンダールヴとヴィンダールヴ、そしてミヨズニトニルンは忠実な使い魔だったみたいだがリーヴスラシルだけは違う。

あれは確実にブリミル自身にも害を及ぼす存在だったようだ。

だからこそ、リーヴスラシルは記す事も憚れるなんて伝えられているんだ。

まあ、リーヴスラシルの力を考えれば当然と言えば当然だ。

何せやるうと思えば、地上の全ての生命体を殺せる。それもある意味念じるだけでだ……これ以上に危険な能力は無いだろう。

俺自身がリーヴスラシルの能力を持っているけど、あれは使い方を間違えれば洒落にならん。

前回のカトレアさんの治療だって、滅茶苦茶神経使ったからなあ。

幾等俺がラカンと同等の生命力を持つとはいえ、あんまり調子に乗って使える能力じゃない。

ある意味切り札的な能力だ。

「そ、そんな……それじゃ聖地に行っても……」

「そ、ハルケギニアを救う力なんて無い」

「し、しかし、それではハルケギニアは！」

「例の風石の大暴走の事？」

「知っているのか？」

「まあね、だけどそれなら対処する方法はあるんだよ」

「え！」

そつだ、実際問題地下に蓄積されている風石は掘り出すのは不可能。

あまりにも量が多すぎる……だとすれば他の方法を使う必要がある。

その方法というのは、土石を使い風石の力を相殺させるんだ。

火石や風石や水石は利用価値があるが、土石はほとんど利用価値が無い。

使うとしてもせいぜいが道路の補強位で、それだったらドットメ

イジでも出来るから態々土石を取り寄せる必要性が無い。  
だから、捨て値同然で売られている。

これらをかき集めて、各地の風石の集合ポイントを割り出した上で地下深くに埋めて暴走させる。

そうすれば、属性的に反発する風石と土石は互いに打ち消しあうはずなんだ。

これは俺の故郷の方で証明されているから間違いない。

ただ、それぞれの秘石を暴走させる際は、腕のいいメイジでないと細かい制御が出来ない。

制御に失敗すればその時点で何が起きるかわからない。

その為にも優秀なスクウェアメイジであるワルドは絶対に必要だ。

「こういう方法なんだよ」

「……そんな方法が」

「風石の大暴走は今すぐつて訳じゃないから、これから確実に準備を進めていけばいい。だけどレコンキスタじゃ駄目だ、あんな寄せ集め組織じゃ統制も取れないし、何よりこの話を信用しやしないだろう?」

「……確かに」

「なら、しっかりと信用出来る貴族の協力を得るべきだ。例えばヴアリーール公爵とかさ。」

「……」

まだ信用出来ないか、ならばやっぱり聖地に連れて行き、自分自身で聖地の有り様を見てもらおう。

その上で判断して貰うのが一番いい。



んじゃま、白帝に頼んでさくつと聖地まで行って貰いましょうかね。

聖地を見れば俺が言っている事も本当であるとわかって貰えるだろう。

「それじゃ聖地に行って貰って自分自身で確かめて貰うとしましょうかね。おいで、白帝。」

白帝を呼び出すと、今回は大人の姿で現れた。  
つか、今まで何処に行つてたんだろう。

放浪癖があるから、気が付くといなくなってるからなあ。  
まあ、別にいいんだけどさ。

『がう』

「ワルドを乗せて、聖地まで行って来てくれるか？」

『がうがう』

「んじゃワルド、さくつと聖地にいつてらっしや〜い！」

ワルドのケツを蹴つ飛ばして白帝に乗せ聖地に送り出す。  
多分、二〜三時間もあれば戻つて来るだろう。

そして、戻つて来た時に改めて現実を思い知る事になるはず。

つか、そもそもブリミルのあほつたれがいけないんだよ、要らぬ騒乱の種を撒き散らしやがって。

ほんと、神と名乗る奴に碌な奴はいねえ。

何時か蹴り飛ばしてやりたいぜ。

……

それから二時間程してワールドが戻って来たが、やっぱり放心している。

自分が追い求めていたものの答えがあんなのだったから気が抜けどちまったんだろう。

少し悪い事したかなあとと思うが、これも今後のワールドの為に致し方ない。

勘弁してくれ。

「どうだった、聖地を見た感想は」

「……あれが、僕の求め続けたものだったとは……」

「これでわかつたろ、あんなとこ行っても何にもならないんだよ」

「そう……だな……」

聖地を自分の眼で見て、あれが自分が求め続けたものと違う事がわかつたようだ。

何せあそこは対エルフ用にブリミルが残した負の遺産。

ありやハルケギニアを滅ぼす要因にはなっても救う要因にはなれない。

それを実感出来たんだろう。

「んじゃよ、もうレコンキスタに加勢すんのはやめにしなって。あんな組織にいてもいい事無いだろう？」

「ああ、聖地に行く目的は果たした以上、奴らに加担する理由はない。しかし、私は国を裏切ってしまったのだ、今更……。」

「大丈夫だって、その事は俺しか知らないんだし俺が黙ってればい

いんだからさ」

「い、いいのか？」

「いいんだよ、ワルドはお袋さんの意志を継いで大隆起を食い止めたかったんだろ、なら褒められる事はあっても責められるこっちはねえよ」

「……すまな、恩に着る」

これでワルドがレコンキスタに関わって死ぬような事はもう起こらないはず。

原作やアニメではかなりの悪役だったみたいだし、色んな二次創作でも結構扱い酷いけどこの世界のワルドはかなりまともだ。

これなら損得抜きでも仲間になって欲しいと思える。  
それにワルドに関してはもう一つ気になる事がある。

屋敷に来てからワルドが全くと言っていい程にルイズを見ていない事だ。

ワルドの視線はそう……エレオノールさんに向いていた。

本来ならルイズに向くはずなんだけど……。  
どうしてもここが解せないんだよなあ。

「んでよ、もう一つ話しがあんだけどいいか？」

「……何かね」

「ワルドはルイズの婚約者なんだよな？」

「一応は、ね」

「だけどさ、どうもワルドの視線がルイズを見ていないのが気になるよ。何でくエレオノール>さんを見てたんだ？」

「き、気づいてたのかい？」

「まあな、俺は格闘や剣術もやるから視線には敏感なんだよ。んで、

どういう理由なんだ？」

「……実は……僕は……その……」

なんだか歯切れが悪いな。

どうしたんだ、一体？

「ほら、まごまごしてないでYOUいつちやいなYO！」

「あ、いや……そのだね……」

この反応からすると……もしかしてだけど、ワルドってエレオノールさんに惚れてるのか？

そりゃまあ見た目は頗る美人だけどあの性格だぞ？

マジで惚れてるんだとしたら、ワルドの奴って相当根性あるなあ。  
あのどぎつい性格のエレオノールに惚れるだなんて。

「もしかしてさ、ワルドってエレオノールさんに惚れてる？」

「……！！ い、いや、そ、そそそそそうでは無くてだな……！！」

「……わかり易い反応だな、おい。つか、よくあのどぎつい性格のエレオノールさんに惚れたな？ しかもあの人お前より年上だぞ？」

「な、何を言う！ あの性格こそ彼女の魅力なのだ！ それにだ、僕は彼女に責められたい！ もうこれでもかという程に責められたいんだ！ それに何より僕は年上好みなのだ！」

「え〜と……つまり……ワルド的にはエレオノールさんは好みのもの真ん中って事？」

「そうだと、彼女以上の理想的な女性はいない……！！」

……もしかして、ワルドって……ドMなのか？

それに母親に傾倒してたってのもあるから……マザコン気質もあ

んのかもしれねえ。

そう考えた場合、確かにエレオノールさんはワルドにとって理想かもしれねえわ。

あの人も言葉攻めとか実は結構好きそうだし。

「つか、言葉責めを受けたいって……ワルドも案外いい趣味してんな」

「はっ？！ し、しまったあ！ 今まで誰にもいった事が無かったのに！」

「そりやまあ言えんわな……」

「た、頼むっ！ 誰にも言わないでくれっ！」

「だあ！ 言わねえから泣きながら引っ付くなっつもの！」

そりやまあ子爵ともあるう人間が被虐趣味だなんて知れ渡れば世間体としても不味い。

それにワルドは魔法騎士隊の隊長やってんだし……醜聞になっちまうよなあ。

まあ、俺としては個人の趣味だし口出しするつもりは無いんだが……いやまてよ……。

……これはあれかな、二人の仲を取り持つ方がいいかもしれん。

元々エレオノールさんの方もなんとかしたいと考えていたし、もしも二人が結ばれればヴァリエール家も安泰。

間違いないくヴァリエール公爵もカリー又さんも喜ぶだろう……行き遅れの娘が嫁に行けるんだから。

その上性癖を除けばワルドは頗る優秀なのは火を見るよりも明らか。

それにヴァリエール家が安泰となれば、崖っぷちに立たされているトリステイン王国を盛り返すにも役立つだろう。

最悪今の王家をアルビオンに嫁がせてヴァリエール家が王位についてもいいかもしれんし。

まあ、王家うんうんは抜きにしてもヴァリエール家を安泰させるのは今後のハルケギニアの情勢を考えれば必須とも言えるだろう。

だとすればだ、今すぐにも行動を起こすべきだ。

エレオノールさんの好みから性癖などなど、洗いざらい白状させてやる。

「わかった、そういう事なら俺がなんとかしよう」

「え?!」

「とりあえず、ここで待ってる」

「ちょ!」

ワルドがなんか言ってるけどとりあえず無視してエレオノールさんの部屋に乗り込もう。

あの人の事だから、そう簡単には本心を出さないだろうけど何としても暴露させねば。

まあ、俺が思うにあの人の負けず嫌いな性格と厳格な性格、ルイズから聞いた彼女の今までの行動を考えると……多分だけ潜在的にSなんだと思う。

その上実の所は結構母性的で優しいと来てる……そりゃワルドの好みにばっちしだし惚れるのも当然と言えば当然。

これであの人の好みが年下であれば、ワルドとくつつける事も難しくないと思うんだが。

何せワールドは顔はいいし中身もいい、まあDMな性癖はあれかもしれないが……とにかく当たって砕けるで行ってみるか。

### 《エレオノールの部屋》

さて、エレオノールさんの部屋の前についたが……どうやらまだ起きているようだ。

中で動いているのが感覚的にわかる。

多分、昼間のルイズの事が気にかかって眠れないんだろう。

全く、さっさと謝って仲直りすりゃいいのに……まあいいや、とりあえず声掛けてみよう。

「エレオノールさん、起きてるか？」

「ミスタ・クサナギ？」

「ああ、どうしてもあんたに重要な話があつて夜分にすまないが入れてくれないか？」

「開いてるからどうぞ……」

「お邪魔するぜい」

本当はこんな夜分遅くに女性の部屋に入るのはいけない事だとは思うが……これもワールドやエレオノールさん、ひいてはヴァリエール家の為だし致し方ない。

それにもしも二人が上手くいけば、エレオノールさんもずっと待ち望んでいた結婚相手をゲットする事になる訳だし。

双方にとって悪い事では無いはず！

うっし、気合入れていくぜい！

「それで、重要な話というのは何かしら？」  
「そうだなあ、今後のヴァリエール家にも関わる事なんだけど」  
「我が家に？ それはどういう事かしら？」  
「その前に幾つかエレオノールさんに聞きたい事がある。本当に重要な事なんで一切の嘘偽り無く答えて欲しい。」  
「答えられる事ならね」  
「エレオノールさんてさ、なんで婚約破棄が多いんだ？」  
「……それを聞いてどうするのかしら？」  
「悪いとは思うけど必要なですよ、これから先の話をするためには」

大方の予想はついてはいるけど、やっぱり本人の口から聞かなくてならん。

恐らくは彼女の知性に相手の男がついていけないってのが原因の一つだろう。

後は……彼女の責めに耐えられないって事もあるんだろう。  
エレオノールさんて言葉はきつついもんなあ。

「ほとんどの男が私の知性について来れないからよ」  
「そりゃ研究者であるエレオノールさんについていくのは並大抵じや無理でしょう」  
「……それに、ほんの少し言葉で責めただけで根を上げるんですもの」  
「あゝなるほど」

やっぱり責めてたんかい……。  
そりゃ男も逃げ出したくもなるわ。



でもまあ、これならワルドとは相性いいんじゃないかねえのか？  
うっし、んじゃま攻めてみますか！

「まあ、大体わかりましたよ」

「それで」

「ぶっちゃけて聞きますけど……エレオノールさんて、男を言葉で責めるとか苛めるとかって……好きですか？」

「なっ!?! と、とととと、突然何を言い出すのよ!?!」

あれま、顔真っ赤にしてうるたえてる。

こりゃ当たりっばいか。

「正直に答えて欲しい」

「そ、そんな事……言える訳ないでしょう!」

「別にその事でエレオノールさんを卑下しようなんて考えは無い。それにこれは非常に重要な事なんだ、今の質問の返答如何によっては、エレオノールさんが待ち望んでいた全てを受け入れてくれる男に出会えるかもしれないんだぜ」

「ど、どついう事?!」

「それを話す前に答えを聞きたい、どうなんだ？」

《エレオノール思考》

そ、そそそそんな事を突然言われて答えられる訳が……! !

で、でも、考えてみると、相手を論破したり愚図な男を言葉で責めた時……その……確かに言い知れぬ感覚があったような気がする。

あの時……二人ほど前の婚約者を言葉でボロボロにしてやった時

は……その……い、いや、そんなはずっ！

私は公爵家長女なのよ、その私にそんな性癖があるだなんて認める訳には！

《再び主人公へ》

あの様子から察するに、どうやら間違いない。

この人は自分では今まで自覚していなかったようだが、俺に指摘されて今までの自分の言動を思い返し自分自身の性癖を自覚しているんだろう。

だとしたら、ワルドとくっ付ける事が出来る可能性は高い。  
うっし、このまま押し込んでやろう！

「どうやら自覚したみたいっすね、エレオノールさんの態度を見れば返事を聞かずともわかりますよ」

「そ、そんな、私にそのような！」

「時にエレオノールさんは年上と年下どっちが好み？」

「へ……そ、それは……年下の方が好みだけど……」

ビンゴ！ 間違いなく相性はっちなバカップルになれるぞ、エレオノールさんとワルドは。

よし、こうしちゃいらねえ、早速ワルドに報告してこのままくっ付けちまおう。

「よしわかった、このまま待っててください」

「ちょ、ちょっと……」

ぬふふ……これでワルドとエレオノールさんがくっ付けばヴァリエール家は安泰。  
そうなりや俺もこの国での基盤を築き易くなる、こりゃなんとしても二人をくっつけなきゃ！

### 《ワルドの部屋》

「おい、ワルド！」  
「お、脅かさないでくれたまえ、一体そんなに慌ててどうしたんだ？」  
「エレオノールさんの好みを掴んだ！」  
「な、何だつてえええ！」

先ほどのエレオノールさんの反応を含め、俺が推測した内容を可能な限り詳しくワルドに聞かせてやった。

俺の推測を聞いている間、ワルドの眼はそりやもう血走った所の騒ぎじゃない位に爛々としていた。

無理も無い、自分が惚れている相手の好みがわかるんだから。  
つか、エレオノールさんの好みってモロにワルドだもんなあ。

ワルド自身はドMで言葉で責められるの好きみたいだし、年上が好きでエレオノールも好みと……。

もう完璧じゃん！

「という訳でな、間違いなくお前とエレオノールさんは上手いくと俺は考えている」

「し、しかし、どうやって彼女に……」

今のワルドの様子からすると、自分から告白するのは難しいだろう。

何せ性癖についてはあれだもんなあ……言い辛いのは間違いない。

ならば二人を引き合わせた上で、俺が兩人それぞれの好みや性癖を暴露した上でワルドがエレオノールに惚れている事を教えてしまおう。

後は二人を密室に閉じ込めて……どうふふふ……。

「どうするかは既に考えてある、とりあえずエレオノールさんの部屋に行くぞ」

「い、いや、しかし」

「いいから来いっての!」

まごつくワルドの首根っこを捕まえてエレオノールさんの部屋まで引きずっていく。

暴露が済み次第俺の全力のロックとサイレントを掛けて二人を幽閉。

その後は流れに任せてしまえばいい。

互いの内面を知った二人なら、何かしらの進展はあるだろう。

## 《エレオノールの部屋》

エレオノールさんの部屋に到着し、勢い良く扉を開ける。するとエレオノールさんはかなりビックリしている。

「邪魔するぜい！」

「ちよ、ちよっと！」

「ほら、ワルド、入って！」

「い、いや、まだ心の準備が……」

「ジャンも一緒なの？」

「そうだ、実は重要な用件でのはワルドに関してでね。まあとりあえず座ろうか。」

そう言つて、俺とワルドが隣り合わせ、その向かいにエレオノールさんが座る。

ワルドもエレオノールさんも何やら緊張した面持ち。

まあ、それもあながち間違いではない。

これから色々と暴露しまくるんだから。

「それで、ジャンに関しての重要な用件で何かしら？」

「実は……」

ここでまず、今日初めてワルドを見かけてからの俺が感じた事を事細かにエレオノールさんに話して聞かせる。

ワルドの視線がルイズにいかず、エレオノールさんに向いていた事などそりゃもう事細かに説明。

「まあ、そんな訳で俺はどうもワルドの視線に腑に落ちないところがありましたね。それを確かめるべく、先ほどワルドの部屋に乗り込んで色々と質問したんですよ。」

「それが今回の事と？」

「ええ、関係大有りです」

さあ、ここから一気にエレオノールさんに攻め込むぜ。

これをきつかけとして二人の仲が進展してくれば、俺としては言う事無し。

そうじゃなくても、互いに意識しあうだろうから無駄にはならないはず。

二人の為に、何より今後の俺のためにもとちらないように気をつけねば。

「んでまあ、色々と質問している内にワルドの女性の好みの話になりました」

「ジャンの女性の好み？」

「ええ、それで話を聞いている内にワルドが年上好みで、なおかつ……責められるのが好きらしくてすね」

「……せ、責められるのが好きって」

「所謂マゾヒストって奴ですな」

「ちょー!」

ワルドの場合、肉体的な痛みよりも精神的に責められる方が好きっぽい感じがする。

なんというか、こう弄り倒される感じかな？

「じゃ、ジャンにそんな趣味が……」

「……終わったorz」

ワルドがかなり凹んでる。

エレオノールさんはワルドの意外な一面を知った為か、結構啞然としている。

妹の婚約者がドMと知れば無理も無い……つつても、人間誰しもSかMかの性癖は持ち合わせていると思うけどね。

んじゃま、いよいよぶつちやけますかっ！

「んでまあワルドの性癖を暴露した事だし今回の一番重要な話についてだけど……エレオノールさん、これからいう事をよく聞いて考えて欲しい」

「こ、これ以上何が?!」

さてと、そろそろ々に入るとしますか。

二人の好みをすり合わせて、二人が相性がいいって事を自覚させよう。

「ワルドは責められる事と年上が好き、んで、エレオノールさんは責めるのが好みで年下好みな訳だ」

「……」

「しかも、ワルドはエレオノールさん、貴女に惚れているらしい」

「!?!?!」

「お、おい、何をさらっというのけているんだ、君は?!」

にゅふふ、まだまだ俺のターンは終わらないのさ。

ここから一気に振り切るぜ!

「ワルドは魔法騎士隊の隊長であり子爵として領主もやってるから教養の面でもバツチリだ。さて、これ以上の好条件、エレオノールさんにあるだろうか?」

「……え、えと……」

「まあ、今すぐに答えを出せる訳も無いから後は二人でゆっくりと話し合ってくれ」

「ちよ! この状況で僕を一人にするつもりか?!」

「いい加減覚悟を決めて漢を魅せるときだぜ、ワルド。ほんじゃまこのまま俺が全力でサイレントとロツク掛けて誰にも邪魔はされな

いようにするから、お互い素直になって自分の思いをぶつけ合え、  
んじゃな！」

ワルドを部屋に残し全力全開でサイレントを掛け、扉にはロック  
を掛ける。

中で喚いているかもしれないけど、サイレントのおかげで外に漏  
れる心配は無い。

このまま朝まで放置しておいて、後は二人に任せるとしよう。

まあ、二人がくつつけるかどうかはワルドがどれだけ自分の気持  
ちをはつきり伝えられるかに掛かってるだろう。

でもまあ、あれだ、時間は掛かれど上手くいくと思う。

ここまで来て覚悟が決まらない程、ワルドもヘタレじゃねえだろ  
うし、それにエレオノールさんも後が無い事はわかってるだろうか  
らしい加減素直になるだろう。

つつか、もうワルド以上の好条件、エレオノールさん相手だと存  
在しないだろう。

これでおじやんになったら、残念だけどエレオノールさんは生涯  
独身を貫く事になるだろうなあ。

上手く行く事を願いながら、後は運を天に任せるとしよう。

さ、俺も寝よつと。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4311t/>

---

ゼロの使い魔 -変態という名の神による二次創作-

2011年11月22日02時03分発行